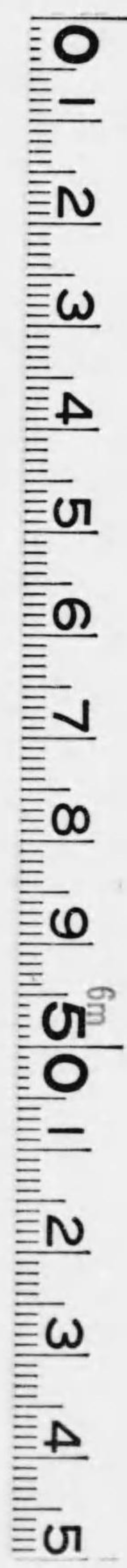


338

322



始



一
卷
庚申
年
冬
月
廿
四
日
書
於
京
北
前
門
外
德
勝
門
外
德
勝
門
外
德
勝
門
外

15.12.24

338-322



俠傑傳

痴遊 伊藤仁太郎

大正
6. 10. 25
内交

凡 例

一、此原稿を纏めて、東亞堂に送つたのは、丁度總選舉の始まる前であつた。従つて、出版に關する總べては、東亞堂に一任してある。校正は勿論、書物としての體裁、これ等は、僕に關係のない事を斷つて置く。

一、今迄に公刊した、豪俠傳や快傑傳や、其他のものと、今度の本書とは、其内容に於て、殆んど同じ筋道を歩んで居るのは、固より言ふ迄もない事であるが其材料の出處と、人物の相違とに因つて、多少は筆の運びも異つて居るし、讀んで行くうちに生ずる興味も、幾分か今迄のとは深い點もあらう。

一、本書に仍つて、明治維新の歴史の一端と、明治政史の極く狭い部分の一端とが、青年諸君に理解されたら、それで僕は満足する。

一、今度の總選舉に敗れた僕は、前途に向つて少しも悲觀して居ない。敗れたこ

とに就ても、左迄に耻辱と思つて居ない。僕は理想通りの競争して敗れたのだから、僕の敗れたのが悪いのではなく、僕の理想を容れない選挙民が、未だ政治的に覺醒して居ないのが悪い、と斯う思つて居る。されば此次には、復た争ふ覺悟であるから、きつと勝てると思つて居るので、前途は極めて樂觀して居るのである。

一、是れから僕は、又一頻り著述に耽るつもりである。本書は敗戦記念の著述として見て貰へば、それで僕は満足が出来るのだ。

大正六年五月初旬

九州巡遊の途中門司の石田旅館にて

痴遊記

梅田雲濱……………

✓ 紀尾井坂の記念碑…………… 一一八

✓ 日露媾和と焼討事件…………… 一三一

七卿の西竄…………… 一四三

✓ 大浦問題と内閣留任の真相…………… 一五五

贈位されたる韓國の志士金玉均…………… 一七三

憲政黨内閣の崩壊……………一九九

安藤對島守……………二三四

吉田松陰の刑死……………二四六

勅使大原重徳……………二六八

島津齊彬……………二八二

井上侯の報恩旅行……………二九六

江藤新平……………三四二

高杉晋作……………三六八

乃木將軍の性格……………

頼山陽が天保二年の九月二十一日に、愈々病が革まつて死ぬ時、妻のゆかりに遺言して、遺子三樹三郎の後見を川上東山に託した、東山は初め山陽の門人であつたが、僅な事から疝癪を發して、山陽の塾を出るこ、すぐに猪飼敬所の門に入った。猪飼三山陽は、恰も仇敵のやうになつて居たから、東山は山陽への面當に、猪飼の門人になつて修業をしたのだ。其後東山は、山陽塾の附近に、自分も亦塾を開いて、盛に山陽に反抗して居た。さういふ面倒な關係のある東山へ、山陽が臨終の際に妻へ遺言して、三樹三郎の教養を託したのであるから、りゑも一度は躊躇したけれど、死者の遺言は大切である。止むを得ず東山に會ふて、其遺言を取次ぐこ、生前には仇敵の如くにして争ふて居たけれど、東山も此遺言に動かされて、三樹三郎の教養を引受けた

頼三樹と薄井龍之

のである。子を見るこ親に如かずで、山陽が他にも子があつたけれど、三樹三郎の將來に望みを囑して、東山へ其後見を頼んだだけあつて、東山の教養も良かつたらうが、三樹三郎は遂に立派な儒者になつた。

山陽は非常に酒好きの人であつて、りる結婚する時の媒酌をした、小石玄瑞の家には今以て、山陽の書簡が澤山遺つて居るが、其大半は酒に就いての無心状である、こいふ一事に徴しても、如何に愛酒家であつたか、こいふこが想はれる。其遺子の三樹三郎も愛酒家であつたのは、全く遺傳で、殊に山陽に酒癖のあつた通り、三樹三郎も亦酒癖の甚かつた人で、一杯飲んで景氣が付く、亂暴を始める、それには同輩も弱つて居たこいふこだ。父の山陽は、日本外史や日本政記を著して、暗に武門政治の弊を痛論して、皇室の式微を慷慨して、それなしく勤王の志を起させるやうに努めたが、三樹三郎も亦夙に勤王の壮志を懐いて、頻に幕府の税政を罵つて居たのだ。或時江戸へ出て、上野の東照宮へ参拜する、如何にも其莊嚴なる有様を見て、憤慨の餘り、傍の石燈籠を蹴倒し、大に家康を罵つて、神官を驚かした。是が表面の問題になれば、三樹三郎の命は中かつたであらうが、同行した者の盡力で、何の咎めも受けなかつたけれど、徳川の全盛を極めた時代には、東照宮前前の石燈籠を蹴倒すなぞこいふこは普通の腐れ儒者に出来るこではない。本素皇室の式微を憂ひて、武門の跋扈を憤つて居た、

其勤勃の氣が、酒氣に促されて出て來たのである。

多くあつた門人の中で、最もよく師の志を知つて居たのは、信州飯田の出生で、薄井督太郎こいふ人であつた。學問は最も優れて居て、三樹三郎も非常に此人を愛して居た。學業が成つて、塾を退く間も無く日光へ行つて、教鞭を執つて居たのである。又一説には、日光には徳川家の直營に係る學校があつて、それを教鞭を執つて居たこも傳へられて居るが、何れにしても日光へ行つて他に學問を教へて居たこだけは、事實に相違ない。此人が明治になつてから、相應に人に知られた薄井龍之である。

時に安政五年の秋になつて、大老の井伊掃部頭が、非常の猛斷を以て、京都に檢挙をするこになつた、即ち越前鯖江の城主間部下總守が、當時の老中であつたが、井伊の内命を受け、京都へ急行し、勤王の浪士を片端から牢へ打込んだ、其際に、三樹三郎も亦押へられて、江戸へ護送されたのである。然るに日光に居た、薄井の耳にも這入つて、是は容易ならざる一大事である、恩師の身の上や如何に、茲に薄井は深い決心をして、密に江戸へ出て、京都の模様を探つて見るに、三樹三郎等は江戸へ送られて來るこいふこが分つた。恩師に會ふのは、江戸へ來てからは難かしいから、寧ろ途中に迎へて、密に後事を囑されて置いた方が宜からう、こいふ考へになつて、是から東海道を上るこになつた。

此騒動に捕はれた者は、百名近くもあつて、既に江戸に送られた者も少くないが、三樹三郎はまだ途中にある、さいふことを知つた薄井は、密に函嶺の關所手前まで行つて、待受けて居た、そのうちに三樹三郎は、軍鶏籠に入れられて、警護の役人が、嚴重に其前後を圍ふて来る。待受けて居た薄井は、遙に此様を見て、警護の役人の傍へ進んで、

「乍恐、些々御伺ひ致したい」

「ウム、何事か」

「其駕籠の中に居りまするは、頼三樹三郎先生ではありませぬか」

「如何にも其通りぢやが、大切な囚人三樹三郎を、先生ご尊敬するは何者か」

「ハハツ、公儀に於ては囚人の扱ひでも、私の身に取りますては、大切な恩師でございませぬか」

「フーム、其許の恩師と言はつしやるか」

「御意にございませぬか」

「して、何故に途中に待伏を致したか」

「實は日光の御廟所に於て、多くの門弟に古人の道を傳へ居りまする、自分は薄井督太郎と申しまする」

「成程、お名前は豫て聞いて居つたが、何として是までは參られたか」

「唯今も申述べました通り、先生は是より江戸表へ到着の上は、必ず牢舎の住居に承知いたしまする、左様相成りましては、再び對面の時也得難く、此儘に言葉も交さず、御別れ致すに忍びませぬ故、此場にて待受けました次第でございませぬか、何卒御情を以ちまして、恩師に對面の儀、御許容のほご願ひ上げまする」

「懃懃に頼んだ薄井、此時は役人の袂には、幾何かの金が投込まれてあつたのだ。師弟の情誼に免じて會はせてやりたいさいふ氣もあつたらうが、實を言へば、袂の重くなつた其效能の方が多かつたのだらう、役人は頻に首肯して、

「公然に許すとは言へぬが、暫時休息を致す故、其間に他處ながらの別れをお告げなさい」

「御情の御取扱ひ有難く存じまする」

警護の役人は、下僚の者に申付けて、駕籠を路傍に下させ、左右に離れて肅然と控へて居る、薄井は静に駕籠の前へ進んで、ホンの二寸四方程の窓の前へ来て、

「先生、御健勝でござりましたか」

「言はれて、三樹三郎は窓から外を見るに、意外にも門人の薄井であるから、

「ヤツ、其方は督太郎でないか」

「ハイ」

「言つたが、流石に薄井も、變り果てたる師の有様を見て、早や先立つものは涙ばかりであつた。」

「今更に何ぞ申上げやうもございませぬ、唯此上は公儀の御裁斷を待つの外はありませぬが、疾くも先生の御逮捕になられたことを傳へ聞きまして、是まで參つて、一目御目に掛かりたく、御待受を致した次第でございます」

「ウム、それは能く心に掛けて訪ねて呉れた。残念ながら拙者の命も、江戸へ到着した上は如何なるか相分らぬ、唯今日まで汝等に教へた勤王の大義は、聽て實現される時節もあらうと思ふに依つて、氣長に時の來るを待つて、我志を繼いで貰ひたい」

斯かる身の上になつて居るにも拘らず、軍鶏籠の中から、勤王の志を繼いで呉れいの一言、薄井は何程に嬉しかつたか知れない。

「此上は江戸表まで、御後に從いて御送りは致しますが、最早御話いたすこともなるまいと存じます故、何なりと御申遣し置くべきことありますならば、承りたく存じます」
「其親切は辱ないが、最早此世に思ひ置くことない、汝が此處へ來て呉れたのは、何よりの冥途の土産ぢや」

是までのことを聽いて居る中に、薄井は眼も涙に曇り、氣も遠くなる程の思ひはしたが、強き氣を取直して、

「先生の御形見に心得て、大切に保存いたします故、何なりと一筆御書き遣しを願ひ上げます」

「ウム、宜しい」

矢立の筆に墨を含ませて、懐紙と共に渡したから、三樹三郎はサラ／＼と認めて、例の小窓から薄井に渡した。之を受取つて見るに、

當年意氣欲凌雲、

快馬東馳不見山、

今日危途春雨冷、

檻車搖夢度三函關、

こいふ詩が認めてある、其後へ、

思はしと思ふ心は淺間山煙に迷ふ煙なりけり

そのうちに警護の役人は近づいて、

「サア、もう大分時刻も遅れたから、其處を離れて呉れ」

「ハイ、段々の御情有難く存じます」

と言つて、薄井は駕籠の側を離れた。聽て軍鶏籠は人夫に擔がれて、是から／＼坂を下る

今夜は小田原が泊りになるのであらう。

斯くて三樹三郎は、江戸へ着くも、直に傳馬町の揚屋へ入れられて、是から毎日のやうに、辰の口の評定所へ引出されて、取調べを受けた。固より潔白な人であつたから、一般の人は餘程違ふ所があつて、自分の首が飛ぶ程の罪科を少しも包まず、役人の前で無遠慮に述立て、幕府の税政を罵つて止まない。左なきだに罪状の重く見られて居た、三樹三郎の意氣込が是では、何うしても死罪は免れぬ。翌安政六年の九月下旬、遂に三樹三郎は、吉田松陰や橋本左内と共に傳馬町の牢屋に於て首を刎ねられ、其屍骸は小塚原の刑場へ捨てられた。其時の辭世はかへりみる比叡の山陰くもりけるわか行くさきは白雲の空

わかつみは君か世おもふまこゝろの深からさりしるしなりけり

三樹三郎の行年僅に三十四歳であつた。

話頭一轉、薄井は恩師の三樹三郎に別れて、日光へ戻つて来るも、浮かぬ心を引立て、相變らず子弟を相手に、古人の道を傳へて居た。或日のこゝ、奉行所から呼出が来たから、直に出頭するも、意外にも白洲へ廻はされて、高い所から奉行は、薄井を端然と見下して居る。

「御召に依りまして、薄井督太郎罷出でました」

「ウム、其方に尋ねるが、先般頼三樹三郎と申す者、江戸表へ護送の途中、東海道箱根山の陸

に於て、其方密に對面したといふこゝであるが、其儀は如何ぢや」

「ハッ」

と言つた切り、暫くは薄井も返辭が出なかつた。警護の役人が武士の情を以て、密に對面させて呉れた。それを調べられるのであるから、迂闊り其實を白狀した爲に、折角の親切を以て會はせて呉れた役人へ、迷惑を掛けてはならぬといふ考で、流石に言ひ込んで居るも、奉行は言葉を改めて、

「大切なる囚人を護送の途中、密に迎へて言葉を交はしたこゝは、容易ならぬ大罪であるが、既に其事は明白に相成つて、江戸表より其方に對して一應の取調べをせい、といふ御沙汰があつたに依つて、此儀を相尋ねるのぢやが、併し拙者の考へる所では、豈夫左様のこゝのあつたことも思へぬ。此事は其方の一身の浮沈にも關するこゝ故、確考へて明に申立てるやうに致せ、唯血氣の勇に逸つて、一度疑を受けた故、會はぬものを會ふたと言ふやうな、輕卒なこゝの無きやうに、深く注意いたせ」

「妙に擲んだ一言は、左様なこゝはありはせぬ、と言はせやうの奉行の情であらう。併し薄井は、此間に疾くも覺悟が決いた。何うせ此事は何時か露顯をするのである。一片の情で會はせて呉れた役人には氣の毒ではあるが、今更に包み隠して、後日に至り再び證據が出て、辛き

目を見るよりは、今の中に男らしく明に言ふてしまつた方が宜い。既に覺悟の決いた薄井は、何の恐氣も無く、

「洵に恐入りました、御尋ねの通りに相違ござりませぬ」

「何ぞ申す、三樹三郎に對面せぬさいふのか」

「イヤ、左様ではござりませぬ、正に對面いたしたに相違ござりませぬ」

斯う斷然言はれては、奉行も薄井を助くる譯にはいかぬ。

「夫は以ての外のことである。大切な囚人を途中に待構へて、對面するさいふこそすら既に都合のとであるに、況して言葉を交すなごは容易ならぬ大罪であるぞ、苟も多くの者に學問を教へる身柄をして、甚だ不都合ではないか」

「其御吐りにて恐入り奉りまする、が併し、子弟の情誼は止むこゝを得ませぬ」

取調べは済んで、直に牢へ入れられた。

斯くて薄井は牢舎の人になつたけれど、奉行の取扱ひは極めて寛大であつて、牢番をして居る者も、なかく心掛けの善い武士で、如何にも氣の毒ださいふ取扱振であつた。尤も薄井が、多くの弟子に學問を授ける場合に、よく親切にして居た事は、一般の評判にもなつて居たのであるから、牢番さいふやうな卑しい役をして居る者も、薄井の平生、師弟の情誼を思ふ

て途中に待受け、恩師に對面して、最後の一言を聽いて來た、此誠實の行爲に對しては、縱令公儀の法度に反して居るにもせよ、普通の罪人と同一の扱ひは出来なかつたのである、其牢番の頭をして居たのが、越後柏崎の出生で、椎橋平藏さいふ人であつた。自分の子供を薄井に頼んで、學問を教へて貰つて居た、さいふ關係もあつて、殊に親切な取扱ひをして居たのだが、愈々薄井が江戸へ送られる日が定まる、椎橋は或夜密に牢格子の前へやつて來て、周圍に氣を配り乍ら、

「先生」

「さ、聲をかけられて、薄井は格子の所まで這出して來た。

「オー、是は椎橋氏か」

「何にも貴下には御氣の毒ではあるが、既に江戸表へ送られる日も近づきました」

「ハ、ハ、ハ、僕は江戸へ差送りになるのでありますか」

「如何にも……何事にも御遠慮なく仰せになつたら如何でござりますか、自分の力に及ぶだけのことは御取次ぎ致しませう」

「イヤ、何にも御禮の申し様は無い、が唯一つ、茲に心残りには自分に一人の伴がある、愈々江戸表へ護送をされた後のこゝも案じられて、心残りは唯此一事でござる」

「御尤に存じまする、私の倅も先生の御教育を受け、平生は御子息と親しく交つて居りまする其儀は確に承知いたしました故、御心置きなく江戸表へ御出で遊ばせ」
 「是にて、最早思ひ置くことはありませぬ、何分此上も倅の儀は御願ひ致す」
 「委細承知いたしました」
 そのうちに人影が見えたから、椎橋は格子の前を立去る、薄井も其晩は、安々と眠るこゝが出来た。

彼是する中に、安政六年の五月になつて、もう二三日中には、江戸へ送られること決つた。或夜非常な大雨で、殊には風さへ激しく、日光の山には有りうちの暴風雨になつたのである。大谷川の水は刻一刻と嵩を増して、左右の岸を洗ふて流れる水勢の激しさ、已に神橋も危しきいふ警報が傳つて、廟所の附近は警護の役人が、右往左往に駆廻り、其騷擾は一通りでない、薄井は唯一人牢舎の中に、茫然と此暴風雨を他處に、唯恩師の前途や、自分の身の行末を案じ煩ふて居る。折柄牢格子の側へ人影が見えたかと思ふに、間もなくガチンギーと牢の戸前が開いた。ハツと思ふて、其方へ眼を移す途端に、椎橋が聲を潜めて、

「サア先生、此間に何方へも御逃げ遊ばせ」
 此意外の一言に、薄井は驚いて、

「何に、拙者に逃けるこ仰せられるか」

「如何にも、凡そは公儀の御手心も相分つた、先生は江戸表へ御到着になれば、直に命の亡いこゝも略々察せられましたから、一刻も早く此暴風雨の騒動に、役人の警戒も緩んで居りますれば、何方へも逃亡れて、一時身を潜め、時の來たるのを御待ち遊ばせ」

「折角の御思召ではあるが、拙者が若しも本様は致したならば、後日になつて足下の迷惑も左こそ、唯それを思へば、如何に御勤めになつても、逃走なぞいふことは出来ぬ」

「イヤ、左様なことを言ふて居る場合ではない、一刻も早く、サア、直に御逃げ遊ばせ」

「ガタリミ其處へ投出したのは、衣服ミ大小、脚絆草鞋から鞆笠まで、用意を整へて來たのだ。是までに苦心して呉れた、椎橋の好意は最早無にするこゝは出来ぬ。殊に恩師から言はれた通り、勤王の志を繼いで、徳川幕府に一矢報いるのは、是から自分の一生の事業であると思へば、今は椎橋の好意を幸に、薄井も決心して、手早に身仕度を整へる。其間も風雨は益々激しく、轟々として耳を聳するばかり、漸くに身仕度も出來て、牢内から這出した薄井は、椎橋の手を執つて、唯涙の外に何の言葉も出ない。此時に椎橋は、薄井の耳に口を寄せて、

「豫て御依頼になつた御子息は、既に水戸へ御送り申してあります故、其儀は特に御安心下

「エツ、何ぞ仰せられる、水戸へ倅を御送り下されたさか」
 「幸に拙者の從弟に當る平九郎が申す者が、武田伊賀守の家來に相成つて居る故、此方へ細々
 申送つて、御息は平九郎の手に御預り申してある」
 重々の椎橋の好意には、薄井も何ぞ感謝すべき言葉も出なかつた。周圍を見廻して居た椎橋
 は、グルリと體の方向を變へたかと思ふに、「ウーム」に唸いて、其場にドツと倒れた。薄井が
 驚いて熱々見れば、何時か左の脇腹に一刀を突込んで居る。
 「ヤツ、腹を切されたか」

「先生ツ、縦令義の爲には言ひ乍ら、苟も自分が守つて居る牢舎を破り、大切な囚人を逃がし
 たさあつては、公儀へ對して申譯は立ちませぬ、殊に此事を曖昧に致さうとすれば、同僚の
 者へ迷惑の掛かるのは必定、自分が此場に切腹して相果てますれば、深い事情は分らずとも
 椎橋が先生を御逃し申したさいふこゝになつて、他の者へ迷惑は及ばぬ。何卒此間に早く御
 遁がれ下され」

「椎橋氏、何とも御禮の申さう様は無い、さらば御免」
 と言つて、一三間走つたかと思ふ所へ、牢舎が凄々しい裝束をしてやつて来て、薄井の姿を暗
 き中にも認めて、

「怪者ツ」

「ご聲を掛けられたので、最早遁がれぬ所も、薄井は振り返り様に、腰の一刀抜く手も見せず、一
 人の牢舎を斬倒して、他の一人が刀を持って、斬つて掛かるを引外して一刀浴せた。呀と聲を立
 て、倒れた間に、薄井は牢舎の塀を乗り越え、水戸を指して急ぎ行く。

薄井は水戸へ着いた後、平九郎に會ふて、自分の愛子にも會ひ、それから平九郎の紹介で、
 武田伊賀守にも面會した、是が有名な耕雲齋のこゝである。流石に武田は薄井の人格を見抜い
 て、府中に移して私塾を開き、姓名を變へさせて厚く保護したさいふ。是が薄井の水戸の天狗
 派に關係して、野州の平地に波瀾を起し、幕府の討手を對手に、驍名を轟かす端緒になつたの
 である。

天下の糸平

(一)

大きな戦争が始まる毎に、意外な金儲けをして、急に財産家になる者が澤山にある。又株や
 米の相場に激變があつた場合に、賣るゝか買ふゝかして、大金を儲けた一夜大盡、是等の人を

總稱して成金といふが、乍併、單に是だけの意味の上から稱する成金なるものは、甚だ心細い連中である。唯金を儲けたさか損をしたさかいふ、簡單な標準から人間の身分に、高下の批評が付くものさすれば、人間位詰らぬものはない、雨に風に幾多の苦心を積んで、刻苦奮闘の結果、漸々積上げて来た富の上には、何も云へぬ一種の威厳が付て来る、自分の力で造つた戦争でなく、何かの都合で始つた戦争から、品物の上に相場の變動があつて、幸に其品物を多く有つて居たから、澤山の利益を得て、泡沫のやうな富を造つた、何うもあの人は豪勢な成金だ、さいつたやうな賞讃の言葉を浴せ掛けられるさ、これで本人は一廉の紳商になつた氣で済まして居る。斯ういふ成金に對しては、何う考へて見ても、敬意を表することは出来ない。一概に成金を排斥する次第ではないが、同じ成金なるにも其間に幾分か、他の手本になる苦心艱難の一幕がなければ、其儲けた金にも有難味がない、従つて一般の人も崇敬の念を起して來ない譯である。昨今の新聞や雜誌に依つて傳へられる、富豪なるもの、大半は、此無意味の成金を指していふのであるから、實に驚くの外はない。或は大成功の人であるさか、或は實業界稀に見るの偉人である、さかいつたやうな、唯何さなく聞いても齒の淫くやうな、褒辭を遠慮もなく浴せ掛けて、世間の心なき青年を煽り立てる輩がある。人間の總てが金で評價の付くものでないさか、少し理窟の解る者なら左様思ふであらうが、明けても暮れても金

が欲しい、金が欲しいで金にのみ憧れて居る人から見れば、蟬の命にも均しい一時の淫いた富を得た人に對して、眞實偉大なる成功者なるが如く思つて、其人の眞似をしようとするものが在る。所が、唯世間の景氣に連れて、自分でも夢のやうな心持で、一時の大金を儲けた、所謂成功者なるものに何の學ぶべき所のないのは當然なことで、さういふものを標準として、無邪氣な青年を煽り立てる程罪なことはない。今茲に説き出す糸平の立身談は、決してさういふ淫いた金を儲けた、麥酒の泡の怪物みたいな人間さは一つにならない。眞に智慧と膽玉の二つで、維新前後の變亂の巻に出没して、努力と奮闘の結果、遂に一廉の豪商になり濟して、自から天下の糸平と稱した。世間の人も亦許して、之を天下の糸平といふて居た程の、今は故人になつた田中平八の身の上談、是は極めて興味のある。又今の青年に最も模範となるべき、多くの逸話を有つて居る人であるから、特に之を述べて見やういふ氣になつたのだが、元來僕は、政治家さか學者さかいかいふものゝ傳記を、好んで述べるさかにはして居るが、即ち天下國家のさかに関係した人の身の上について、深い興味を有つて講演して居るのであるから、従つて大きい金持の話をするさかなどは、餘り好まないのだ。乍併、金を儲けた人が、必ず悪い人であるさか、いふ譯はない、金持の中にもなかく、偉い人物が澤山に居る。そこで近來は、餘り毛嫌ひをせずに、世間に傳へて耻かしからぬ人物

のこころは、縦令金持の立身談でも、一向に頓着なく話すやうになつて来たのだ。殊に糸平の如き人は、普通の成金と違つて、確かに成金中の偉人であるといふことを深く信じて居るのである。今の田中銀行の持主たる田中平八は、此人の倅であるが、父の平八は全く性質を異にして今の平八は極めて實質な、且つ穩健な實業家で、大きな投機を張込んで、乾坤一擲の大勝負をするといふやうなこころは出来ない性質で、徐々に進んで行く、所謂守成的の氣風がある人で、父から譲られた遺産の左までに大きくなかつたのを、三十年の間に何うか斯うか、百萬圓以上にもしたといふのだから、此點に於ては父の氣象に似ず、守成的の人であつたのは、田中家の爲に或は幸福であつたかも知れない、若し今の平八が、父の平八の如き氣象を有つて、父の死後に荒れ出して、萬一にも失敗したならば、田中家は今日の全盛を極めるこころは、或は出来なかつたかも知れない。平八の外に今の田中銀之助の父が居た、是は次男で、相當の手腕家であつたやうだが、天死をしてしまつた。此銀之助の資産も、百萬圓ある三世間では評して居る、兎に角、此二人に依つて糸平の後は、先づ立派な富豪として世に存するこころになつた。唯僕が甚だ遺憾に堪へないのは、三男の平三郎のこころである。是は非常に霸氣のある、且つ任侠の氣に富んだ、何處もなく父の面影を、其儘にした所のある、頗る前途に有望な人であつたが、惜しい哉肺を病んで、早く死んでしまつた。尤も、今いふやうな氣風であるから、よく他に騙さ

れて大きな金を引掛けられたこころもあるが、さういふ場合に出逢つても、平氣で居た所に、何もなく大旦那風の様子が仄見えた。又友人や知己の危念を聞いて、之を救ふたこころもなかく、多い、僕は横濱に生れて横濱に育つたのだが、田中家の三子も、亦横濱に生れて横濱に育つた關係から、小學校も同じ門を出入して居たのだ。さういふ關係から田中兄弟のこころはよく知つて居たが、平八は僕に比べると、少し年が上で級も違つて居たので、餘り親しくはしなかつたが、平三郎は僕より二歳位の年下であつたけれど、極く懇意に交際して居た。此人が若し長生をしたならば、或は驚くべき程の成功をしたかも知れないと思つて、今に至るも其の死を惜んで止まないのである。

(二)

信州の伊那郡に、赤穂村といふ所があつて、此處に藤島卯兵衛といふ水呑百姓があつた。夫婦揃つて氣質も良く、村の人には評判が好かつた。然るに其倅の簽吉といふのが、なかく腕白者で、何うにも斯うにも手の着けやうがなかつた。天保四年の出生で、弘化元年には丁度十二歳になる。何しろ子供の癖に他争ふこころが好きで、何うかするこころ、大きな人を傷けて歸るこころがある。其度毎に両親は、談判の尻を持掛けられて閉口するこころが多い。それを見兼ね

て同じ村に居た小林孫三郎といふ人が、釜吉の腕白は尋常でないが、何處もなく見込のある子供だといつて、自から進んで釜吉を引取つて教育することに成つた。釜吉は孫三郎に引取られてから、文武の二道に付て深い修業をすることに成つたのであるが、何分にも我儘が甚いので、悪戯が激しいので、遂には孫三郎も愛憎を盡かして、父の卯兵衛へ返すことにした。そこで卯兵衛は彌々持餘して、此儘村に置いて、若し大い間違でも仕出かしてはならぬといふ考から、程遠からぬ飯田の城下へ出て、自分の豫て懸念にして居た、魚問屋の主人に頼み込んで、使つて貰ふことにした。其家の主人も釜吉のことは、卯兵衛から聴かずとも、薄々聞いて知つて居たので、「宜しい、承知しました、お前さんが自分の實子でありながら、持餘す程の腕白小僧だといふことは、他から聞いて居たが、今斯うして本人を見るに、何處もなく悪戯をしさうな強情者のやうだが、さういふ氣風の子供は、又使ひやうに依つて役に立つものだから、何うせ氣の暴い者を澤山使つて居る、此稼業の見習をさせるには、却てさういふ亂暴な子供の方が宜いかも知れない、マア兎に角置いて行つて御覽なさい」

「何分御願ひ申します」

快く引受けて呉れたので、父の卯兵衛も喜んで、釜吉を其家に残し、幾分の安心をして村へ歸つて行つた。

幾ら腕白のやうでも、實父の膝下を離れて、他人の家へ來たのだから、もう一つは集まつて居る雇人の多くが、何れも血氣盛りの亂暴漢で、何れの土地にしても魚問屋の雇人といつたやうな者は、俗に謂ふ生物扱ひで、何うしても氣が暴い、其大勢の中に這入つて居たのだから、釜吉の腕白も今までのやうに、他の眼には着かなかつたけれど、何うかするに主人の眼にも、餘るやうな悪戯をすることに成る。併し、初から覺悟で置いた主人は、餘り叱言も言はずに、却つて釜吉々々言つて、目を掛けて使つて居る、彼是する中に十五歳の春を迎へた。普通の人に比べれば、體格もよし、氣象も勝れて居て、其働き振も相當に年を取つた大人を凌ぐ程であつたから、主人は益々釜吉を信用するやうになつた。或日のこと、主人の命令で、五六軒の家に魚を送つての歸途、天秤棒を肩にして、急いで歸らうとして、或横町の角を曲らうとする途端に

「待てッ」

と、恐しい聲で叫止た者がある。釜吉は驚いて振り返るに、筋骨の逞い上背のある立派な武士が、何處で飲んだか眞赤な顔をして、足腰も踉蹌いて居る様子で、釜吉の顔を睨み付けて居る。大概の子供なら慄へ上つてしまふのだが、釜吉は例の氣象にて、一旦は驚いたが、聽て落付いた様子で、

「何か旦那御用ですか」

「何か御用かとは怪しからぬ、コレ此袴を見ろ」

「釜吉は平氣な顔で、熱き袴を見つめて、

「成程、大した御袴でございますね、是が仙臺平さいふんですか、ピカ／＼光つて立派なもの
ですな」

「何ちや、誰が袴を褒めろと言つた、此裾に掛かつて居る泥を見ろさいふのだ」

「オー／＼、是や甚く泥が着いて居ますが、まだ本當に乾かねえのだから、今揉むと却て宜け
ません、悉皆乾いてから輕く叩く、上に着いた泥が取れる、後は汚拔屋へやつたら、舊の
やうに綺麗になります」

「彌々貴様は怪しからぬ奴ぢや、此泥水は貴様が、今其角を曲る時、糞草鞋の儘で泥濘へ踏込
んだ途端に撥ねたのぢや、それを知らぬ顔で、人を嘲弄するやうなことを申すは、實に怪
しからぬ奴、サア其處へ直れ、打斬つて呉れる」

「言ひ乍ら、刀の柄に手を掛けた、それを見て、釜吉は、

「ア、モシ旦那、待つて御呉んなさいまし、それぢや私が、今此處を曲る時に、蹴上げた泥
ださいふのでございませうか」

「左様ぢや、それを知らぬ等はなからう」

「所が、些とも知らなかつたのです、夫ア飛でもねえ事で、何うも濟みません、唯旦那が此袴

を見ろと言ふから左様なこゝは氣が付かずに、問題外の話をして濟みませんけれど、旦那

だつて少し氣を付けて居りや、左様な目に遭はなかつたんだ、私の方は其日稼ぎの忙しい體

で、大急で此處を曲つた途端に、旦那がボンヤリ曲つたから、そこで泥が引掛かつたので、

私が惡氣でしたのでねいんですから、何うか勘辨して御呉んなせえ」

「彌々以て貴様は怪しからぬ、武士に對し嘲弄の語氣を以て、彼是申すは赦し難い奴ぢや、

サア直れ、打斬つて遣はす」

「言ひ乍ら徐々さ詰寄つた。

そのうちに釜吉は、肩の荷を卸して、天秤棒を右の手に持つて、頻に詫がるやうにして居た
が、纔に武士の隙を見て、ヤツミ聲を掛けると同時に、向脛を拂つた、不意を打たれて醉漢の
武士は、兩脛を擡はれたからドツミ路上に倒れる。起上がらうとする所を乗し掛かつて、二つ
三つ殿り付けた。此勢に驚いたものか、今までの權幕にも似ず、武士は這々の體で逃出した。

其後影を見送つて、冷かに笑つた釜吉は、

「へん、口程でもねい弱い武士だけぢや、酔ばらつて居やがつたんで、餘程喧嘩がし宜かつた

ハ、ハ、ハ、ハ、」

此大膽な振舞を見た見物は、唯驚くの外はなかつた。釜吉は天秤棒を肩に、主人の家を指し

て急いで行く。

五六町もやがて来たかと思ふに、傍の軒下からヌツシ現はれた一人の武士、覆面をして居ても顔はよくは分らぬが、其體格から大小の様子に依つて察するに、相當の格式ある武士は誰にも見える、釜吉の通り過ぎやうにするのを、

『コレ、町人、一寸待て』

と、呼止めた。釜吉は振り返つて見るに、立派な武士だから、オヤ又出たのかと思ひ乍らも、

『ハイ、何か御用でございますか。』

『ウム、待て、今あの四辻で、武士に無禮を働いたのは、其方ぢやな』

『別に無禮といふことでもねいんですが、賣られた喧嘩を買はない譯には行かず、一寸相手になつたばかりでございます』

『フム、健氣な一言感心した、が、あの態を見ては此儘に歸すことはならぬ、サア今度は拙者が對手になる、尋常に勝負をせい』

と言ひ乍ら、腰の大刀に反を打つた。

『エツ、戯談ぢやございませぬ、旦那は今の武士のお友達ですか』

『イヤ、不見不知の者ぢや』

『ヘーッ、不見不知の者が、何だつて敵討をしようてんですか』

『武士は相身互ひさいふ、縦令不見不知にせよ、同じく大小を差した武士が、素町人の小僧に耻辱を與へられたのを、其儘に見過す譯にはならぬ、今度は拙者が相手になつて遣はず、サア尋常に立合へ』

『戯談言つちやいけません、旦那には恨みも辛みもないんです、何うか御勘辨を願ひます』

『イヤ、ならぬ、サア立合へ』

釜吉は例の通り天秤棒を持ち乍ら、デロリ／＼と武士の様子を見て、頻りに謝つて居たが、何と思つたか天秤棒を抛り出して、大地に兩手を突いて、

『何うか旦那、御勘辨なすつて御呉んなせ』

『何ぢや、最前の意氣組違つて、大層弱い音を吐くな、勝負をせぬさいよなら、其儘に斬り捨て、呉れやうか』

『ト、飛んでもねい話で、何うか勘辨してお呉んなせえ』

『フム、左様いたすに、對手は出来ぬさいふのか』

『へい、逆も敵ひませぬ、何うか勘辨してお呉んなせえ』

『然らば最前の武士に、何故抵抗いたした』

『へい、一寸謝つたんですけれど、お武士が勘辨ならぬといつて、刀の柄に手を掛けたから只だ打斬られるのも残念だと思つて、向ふの様子を見るに、酒に酔拂つて、足下が踉蹌いて居るから、此調子ぢや喧嘩しても負ける氣遣ひはねえ、若し殴り損つてスツバ抜きをされても、はやく逃出してしまへば、酔漢さ素面だから脚の速さが違ふ、何うか斯うか逃げ通せるだらうに、そこで捨鉢に此方から殴り付けた、それが巧く中つたんで、あゝいふこゝになつたんです、所が今度は、旦那が酒にも酔つて居ず、一寸見ても強さうで、逆も對手になつたつて敵ひさうもないし、不意に打つて掛かつた所が、逆も前のやうな譯には行くまいと思つて見るに、何だか恐しくなりましたから、斯うして平伏つて謝つて居るんでございますから何うか勘辨してお呉んなせえ』

之を聴くに、彼の武士は頻りに首肯いて、

『諸々、それで分つた、サア宜いから、俺も一緒は来い』

『簽吉の手を執つて引立てるやうにした。』

『旦那、斯様な謝つて居るんですから、何うか勘辨してお呉んなせえ』

『別に勘辨しないとは言はぬ、マア一緒に来い、來さへすれば仔細が分る』

『それだつて、此天秤棒や板蓋があるんですから……』

『それは近所の家に預けて置けば宜しい、失ふたら償ふて遣す』

簽吉が彼是言ふのも頓着なく、手を引くやうにして連れて行つた。之を見て居た見物のうちには、簽吉の身を案じる者もあつたけれど、倍て其中へ割つて這入つて、謝つてやらうといふ奮發をする者もなかつた。

此覆面した武士は、飯田の在の郷士で、田中保兵衛といふ人であつた。郷士でこそあれ文武兩道の修養も深く、殊に武藝に秀で、居た爲に、飯田の城下へ出て、誰一人保兵衛を輕んずる者はなかつた。今日は偶々用事の都合で、城下を徘徊して居た時に、簽吉と武士の喧嘩を見て、如何にも其大膽な簽吉の舉動に感じて、先に廻つて待受けて居た所へ、簽吉がやつて來たから、之を試みるに、自分の思つた通り、前の武士は酔拂つて居たから、勝てるだらうと思つたが、今度は難かしいと思つたから謝るんだといふ、此場合に對手の強弱を、直に看抜く、子供に似合はぬ大膽さは、未練母しく思つたのだ。家へ連れて歸つた保兵衛は簽吉に向つて、

『何うぢや、お前は俺の子になつて、此家の相續をする氣はないか』

『夢のやうな相談に、簽吉は眼を圓くして、

『へーッ、水呑百姓の倅で、今は魚屋の丁稚になつて居る私を、子供にして下さるに仰しやるんですか』

「ウム、左様ぢや」

「旦那、戯談ぢやございますまいね」

「イヤ戯談ではない、俺には子供が一人もない、何うせ養子をしなければならぬこゝになつて居る、お前の氣象を見込んで、俺が引取つてやらうと思ふが、お前に異存がなければ、親許へも談判つた上で引取らう」

「有難うございます、何うせ家に居たつて、食ふや食はずの水呑百姓、親父の世話は兄や妹がしますから、何うか引取つて下せえ」

「諾、それでは親許へ談判つて遣はさう」

其翌日になつて、保兵衛は卯兵衛を訪ねて、相談に及ぶと、心の中では卯兵衛も非常に喜んでくれぬ、何分にも釜吉の亂暴には、愛相の盡きる程弱つて居るのだから、

「それ程までに仰つて下さりますが、釜吉の亂暴が尋常でございませぬから、萬一御宅へ参りましてから、飛んだ御迷惑を掛けらるゝがございませぬ、却て御厚志に反くやうなこゝにならうと思つて、實は決断も付かぬのでございませぬが、其邊は如何でございませう」

「イヤ、それは差支ない、一旦子供として貰ひ受けた以上、如何なるこゝが出来たさうも、親許へ其始末を持ち込むやうな、卑怯な保兵衛ではない」

「さういふこゝでございますなら、何うか思召の通りになすつて戴きたいのですが、併し引取つては見たが、飛んでもない奴であるから、歸へすと仰つても、私の方では引受るこゝは出来ないかも知れませぬから、それだけは念の爲に御断り申して置きます」

「ウム、面白い、其約束は反古にせぬ」

斯ういふ相談で、愈々釜吉は保兵衛に引取られるこゝになつた。實の父の卯兵衛が、若し亂暴を働いて歸へるこゝも引取りませぬ、こゝいふ口狀附で子供をやるこゝにした。それを承知で引受けて来た保兵衛、此交渉が頗る面白いと同時に、釜吉がこれ程迄に亂暴であつたか、

こゝいふこゝも想像される。

釜吉は保兵衛に引取られてから、名を平八に改めた。田中の姓を名乗つたのは、斯ういふ事情からである。是から保兵衛が、平八に文武兩道の修業をさせ、書物も一通りは教へたが、殊に武藝は本人も好んで、なかくに其修業は激しいものであつた。もう二十の年を迎へて、一人前の武士になるこゝ、サア飯田の在の郷士の養子で一生を送りたくない。霸氣の溢れるやうな平八は矢も楯も堪らず、何うかして江戸表へ出て、一修業して見たいこゝいふ氣が起つて、何うしても抑へ切れない、そこで保兵衛の前に出て、

「洵に恐れ入りますが、江戸表へ修業に参りたく存じますが、御許し下さいませぬか」

「さういふこゝでございますなら、何うか思召の通りになすつて戴きたいのですが、併し引取つては見たが、飛んでもない奴であるから、歸へすと仰つても、私の方では引受るこゝは出来ないかも知れませぬから、それだけは念の爲に御断り申して置きます」

「ウム、面白い、其約束は反古にせぬ」

斯ういふ相談で、愈々釜吉は保兵衛に引取られるこゝになつた。實の父の卯兵衛が、若し亂暴を働いて歸へるこゝも引取りませぬ、こゝいふ口狀附で子供をやるこゝにした。それを承知で引受けて来た保兵衛、此交渉が頗る面白いと同時に、釜吉がこれ程迄に亂暴であつたか、

こゝいふこゝも想像される。

釜吉は保兵衛に引取られてから、名を平八に改めた。田中の姓を名乗つたのは、斯ういふ事情からである。是から保兵衛が、平八に文武兩道の修業をさせ、書物も一通りは教へたが、殊に武藝は本人も好んで、なかくに其修業は激しいものであつた。もう二十の年を迎へて、一人前の武士になるこゝ、サア飯田の在の郷士の養子で一生を送りたくない。霸氣の溢れるやうな平八は矢も楯も堪らず、何うかして江戸表へ出て、一修業して見たいこゝいふ氣が起つて、何うしても抑へ切れない、そこで保兵衛の前に出て、

「洵に恐れ入りますが、江戸表へ修業に参りたく存じますが、御許し下さいませぬか」

「ウム、諾、許してやらう」
 保兵衛は洵に理解の宜い人であつた。平八が思入つての願望を引受けて、直に旅の用意に掛からせた。是から平八は生れた國を離れて、江戸表へ出かけることになつたのである。

(三)

嘉永三年の六月三日に、亞米利加の使節ヘルリが、相州浦賀へやつて来て、開國貿易の條約に調印を求めた。是が原因となつて、各國政府から追々に、使節を差向けて來るので、徳川幕府の狼狽は言ふまでもなく、朝廷に於ては逸早く、攘夷の詔を發して、四邊の沿海に國防の準備をさせる、さういふ程の騒動であつた。將軍の家慶は病んで、何の役にも立たず、老中の總ては外交無能で、更に談判が捗らぬ。唯一時遁れに外使を取扱つて居るだけのことで、來る年もく、同じことを繰返して居たのだから、遂には外使の方でも容易に承知をしなくなつて、隨分脅迫がましいことをやつて見せる。もう徳川の泰平も二百年以上續いて、諸藩の幕府を畏敬する念も、追々に薄らいで来て、中には長い泰平に倦んで、何か時勢の上に一大變化が起れば宜い、さういふやうな氣を有つ者も出て來た。斯ういふ折柄の外夷渡來の騒動だから、徳川の爲には非常な苦痛であつた。加ふるに朝廷は、飽までも攘夷の御趣意を以て幕府に隨むので、幕

府は外夷と朝廷の間に板挟みになつて、其苦痛は尋常でない。彼是する中に家慶が逝つて、家定の代になつたけれど、此將軍も矢張り、病身で柔弱であつたから、此時局艱難の場合に、將軍たるに適せぬ人であつた。誰が見ても、長生の出來ぬと思ふ程に、病身であつた家定は、愈々病の床に就てまだ相續人がない。そこで三百諸侯の中でも、稍々時勢に眼を着けて居た連中は、頻に將軍の相續に付て心配を始めた。

就中、薩州の島津齊彬は、稀世の名君であつたから、よく時勢を達観して、日本國の前途を憂ひ、此場合には相當の年輩で、眞に將軍職に堪へる人物を選んで、相續人にしなければならぬ、さういふ意見から、一橋刑部慶喜を以て、其繼嗣に當てやういふ計畫を始めた。之に同意した者が、越前の松平春嶽、伊豫宇和島の伊達宗城、備後福山の阿部伊勢守、土州高知の山内容堂などいふ、諸侯の中でも殊に人物の優れた、一癖ある人々ばかりであつた。

此計畫が、段々進んで行くに、意外千萬にも、大奥の女中連が、慶喜を擁立することに反對して、折角に成り掛けた、繼嗣問題が行き惱みとなつた。大奥の女中が、何で慶喜に反對したかといふに、それは慶喜に對する反對ではなく、慶喜の實父たる水戸の齊昭、即ち烈公に對するの反感が激かつた爲に、あの爺の存なぞを、將軍にされて堪るものか、さういふやうな意氣込から、激い反抗が起つたのだ、大奥の女中の勢力は實に廣大なもので、表方の役人に掣肘を

加へるだけの勢があつた。それであるから大概な老中は、大奥の女中の機嫌を取らなければ、長く勤まらぬいふ位で、當時の阿部伊勢守は、固より賢明な人ではあつたけれど、第一に大奥の女中の氣に入つたのは、其美男であつたといふことが、最も女中連の喝采を博した原因であつたのだから、可笑しいぢやないか。さういつたやうな譯で、虚榮に我執と嫉妬の權化たる奥女中に反對されたから、慶喜の繼嗣問題が行惱みになつたのだ。時も時、折も折して、肝腎な島津齊彬が、コロリに罹かつて死んだ爲めに、繼嗣問題は一頓挫した。それ以前後して、阿部伊勢守も俄に病んで死ぬ、といふやうな譯で、慶喜派は一時屏息するの止むなきに至つた。此機會に頭を持上げたのは、大奥連の同意を得て、紀州の慶福を擔ぎ上げた、水野土佐守の一派であつた。慶福はまだ十歳内外の極く小さい子供であつたが、擔ぎ上げる者が宜かつたので、有外に勢力が強く、終に、慶喜派を凌ぐ程の勢になつて、溜間詰の諸侯の中から、江州彦根の城主井伊掃部頭を擧げて大老に推した。此時の條件が、飽まで紀州の慶福の爲に盡すといふのであつたから、井伊が大老になつた内容は、甚だ怪しからぬ次第であつて、井伊は是が爲に慶福派の爲めに盡すことになつた。其結果、遂に慶喜を排斥して、慶福を將軍の繼嗣にするこゝになつたのである。其間の經過や井伊の奸策を述べて居たら、なかくに長いこゝになるから唯大體だけのこと言ふて置くのだが、兎に角、井伊が大老になつた事情は、さういふ次第か

らであつて、是が爲めに水戸の齊昭が閉居を命ぜられるやら、尾州の慶勝までが蟄居させられ本人の慶喜も謹慎を命ぜられた。井伊の専横妄斷は殆ど至らざる所なく、終には病んで死人に均しき、家定の御説なりを稱して、思ひの儘に成さん欲する所をなし遂げた、同時に、有名な安政の疑獄なるものを起した。是も井伊が、朝廷の勢力を抑制するが爲に、勤王倒幕の一派即ち攘夷鎖港の説を唱へた連中に、一網打盡の壓抑を加へたのである。此際に首を斬られたのが吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎、等の連中であつた、實に其剛暴狼藉は至らざるなき有様であつた。遂に此事は水戸の浪士の怒を買つて、萬延元年の三月三日に、井伊大老は櫻田門外の一撃に、敢なく頭首所を異にするこゝになつて、段落は付いたけれど、一時は井伊大老の權勢は實に驚くべきほごであつた。

是は其當時の政局の大體を述べたのであるが、田中平八は江戸表で、文武の修業をして居る中に、段々京都江戸の刺戟が甚だしくなつて、天下の形勢頗る面白い、と觀て取つた所から直に京都へ上つて、浪士の中に身を投じて、盛に活動を始めた。それは無論、攘夷倒幕の派に加つて居たのであるが、何分にも出生が士民で、僅かに郷士の養子になつて、武士の道を學んだといふに過ぎないのであるから、まだ其頃には門地門閥を尊ぶの氣風が盛であつて、同じ武士の中でも、御目見得以上と以下とでは、格段に取扱が違ふといふ位に、人の階級に甚しい

區別をつけて居た時代であるから、平八は一廉の武士として扱はれて居る中に、是が士民の子であつて、僅に郷士の養子になつたのである、さういふことが知れると、何となく同志の間から疎んぜられて、平八は何時にも輕侮されて居たのである。負けぬ氣の平八は憤慨して反抗するけれども、何うしても自分は一人前の武士として認められない。それが口惜しくてならぬから、焦り焦つて争ふ程、尙秘密の相談などには参加されないうやうになつて来る。縱令自分は如何なる出生にもせよ、四方の志があつて、天下の問題に接觸して居るのに、人間の善悪は言はずして、出生の貴賤を論じて、此疎外を受けるのは如何にも残念な次第である。何となく一人前の武士としての扱ひを受けたいと、日夜其事ばかり思ひを苦めて居た。折柄、佐久間象山が乘込んで来て、開國の主義を鼓吹することになつたので、一段々攘夷黨の活動は激しくなつて来た。此機會に平八が不圖思ひ付いたのは、象山の力に依つて自分の保證を得たいといふのであつた。

象山は信州松代の眞田幸貫の家來で、夙に開國の説を持つて、頻に攘夷論の愚を嘲笑して居たのだ、吉田松陰が大なる決心を以て、外國へ密航しようとして、伊豆の下田まで出掛けて押へられたのも、實は象山の煽動に依つたのである。象山も亦それが爲、罪を得て、一時は藩へ御預けの身分になつて、謹慎は命ぜられたが、それでも象山の開國主義は止まなかつたのであ

る。

安政の昔に、外國へ留學したいといふ願書を出して、幕府の役人から譴責を受けて、謹慎させられたのも此人である。今の時代から見れば、外國留學のこゝなどは何でも無いが、安政の昔に之を願つて出たといふのが象山の優れた所である。此人は普通の腐儒者と違つて、一種の活きた學者であつたといふことは、此一事に依つて、明である。然るに幕府に於ては、朝廷の御趣意が飽までも攘夷にあつて、開國條約を認めて呉れないから、それに付ての苦勞は一通りでなく、段々願を出したけれど、何うしても朝廷では攘夷を實行せよといふのであつた。一度開國條約に調印した幕府が、如何に朝廷の御沙汰なればさて、今更に其調印を取消すか撤回するさかいふやうな、馬鹿なことは出来ないものであるから、此上は何んな苦勞をしても、朝廷の御趣意を、開國主義に變へて戴くの外はない。それをするには朝廷の御側近く仕へて居る者の意見から變へて行く必要があるといふ考で、當時朝廷の命に、據所なく上洛して居た、將軍家茂も相談して、(家茂は慶福のこゝである)、開國主義の儒者で、見識もあれば辯舌もあり、且つ膽力もあるといつたやうな人物を選んで、公家堂上方の攘夷論を、開國論に變化させる必要があるといふので、其人物を段々物色した結果が、松代の象山の外に、此役を擔當する者はないといふことになつて、今までの謹慎を赦して、急ぎ上京させることにしたのである。象

川上 象山

山は自分の意見が行はれることであるから、喜んで出て来て、是から盛に公家堂上方にも、開國の主義を鼓吹した。中川宮は最も象山を愛して、山階宮其他へ御紹介の勞を執つて下さる。象山の意見は追々々、朝廷の中に吹込まれることになつた。是は後の話であるが、それを攘夷派の者が憎んで、遂に元治元年の七月十一日に、象山が中川宮家から歸つて来る途中、三條木屋町の高瀬川筋に於て、熊本の浪人川上才齋の手に罹つて、象山は敢なき最期を遂けたのである。象山は斯くの如くにして横死を遂けたれど、其主義は遂に今日の時勢を生み出したのであるから、象山は縦令殺されても、其靈は立派に生きて居た譯になるのである。

象山は平八は縦令殺されても、同じ信濃國の一人であるから、象山に絶つて自分の身に保證をして貰つたならば、多少は人がましき取扱も受けるであらうと、或る日のこと象山を訪ねて、其説を聴くことになつたのである。平八が騒いで居たのは攘夷であつて、象山は開國の意見を持して居たのだから、全く反對の人ではあるけれども、國の先靈の力に依つて、自分の身の向上の付くやうにして貰ひたい、といふ考で訪ねたのである。

初対面から左様な話も出来ないで、二度三度續けて行く中に、段々懇意になつて来る。幾分か象山も、認めて呉れたやうであるから、そこで平八は象山に向つて、
『自分も今日までに、武士の修業を積んで、一人前の武夫として耻かしからぬ身分になつたミ

は思つて居るが、何うも同志の間で、出生が土民であるといふ爲めに、左様認めて呉れぬやうで、心外に堪へませぬが、先生の御口添を以て、何んか同志の間に認められるやうになりたいと思つて、偏に御口添を願ひたい次第であるが、如何でございませうか』

『思入つての頼みを聴いて、象山は熱々平八の顔を見詰め乍ら、
『儲てく、お前は何んかいふ愚な人ぢや』
『エッ、私が愚でありますか』

『左、ぢや、マア日本一の愚人ぢやらう』

『何んか仰しやる、私が日本一の愚人でありますか』
『如何にも左様ぢや』

『そりや何ういふ譯でありますか』

『何ういふ譯かといつて、よく考へて見なさい、人間といふものは己の天分を辨へなければいかぬ、苟くも人として己の天分を辨へぬ者、之を愚人と稱す。お前が如何に文武の二道を學んだにもせよ、要するに一個の武士たるに過ぎないのぢや、お前が生きて居らうと死んでしまはうと、それが天下に何程の影響を有つか、お前の生きて居るのは、唯一個の武士が生きて居るさいふに過ぎない、又お前が死んだミ、又一個の人間が死んださいふに過ぎないの

ぢや、何も苦心して、武士一人前に認めて貰はねばならぬ、さういふ理由は何處にある、武士としてのお前は一人一匹に過ぎないが、併し其膽玉と智慧を巧に働かして行つたならば、町人や士民の中に於てこそ、百人さか千人さかの頭になれるだらうが、武士として何の價値がある。それが解らぬのは即ち愚人ではないか、凡そ武士として天下の事に盡すのも、又町人として天下の事に盡すのも、其皇國の爲めに盡すさういふ點に於て、相違はない筈ぢや、必ず武士として天下の爲めに盡さなければならぬ、さういふ法はないのぢや、其區別がお前に解らぬさういふのは、實に愚の至りではないか、お前が町人の中に身を投ずれば、百人や千人の頭になつて、大に其智慧と度胸の用ひ所はある。何を苦んで一人一匹の武士になりたいさういふのか、古人も言ふて居る、寧ろ鶏口さなるも牛後さなるなけれ、是れは千古の格言ぢや、今俺が改めて言ふことをよく聴きなさい、尤も此事は俺の見込ちやから、或は將來になつて間違ふかも知れぬが、それは念の爲めに斷つて置く、今後十年さか又は二十年さかの月日が経てば、必ず我々の腰にある、大小を捨てねばならぬ時節があらうと思ふのぢや、そこで土籍にある者も、又町人や士民の群に居る者も、等しく立つて皇國の爲めに盡さなければならぬ、さういふ時節は必ず一度は来る、定つて居る、俺の見込では十年か二十年の後に、さういふ時節になると思つて居るのぢや、殊に一度開國條約に調印して、世界各國の人が、我國土へ入

込んで来る以上、異人の目的とする所は貿易にある、それは日本の金を持つて歸りたいの一心から、異人はやつて来るのぢや、それを日本の者が、反對に此方へ、異人の金を捲上げる工夫をして置かなければならぬ、それが貿易の戦争さういふものぢや、武士が鐵砲を撃つたり刀を抜いて争ふのばかりが戦争ではない、今横濱は開港の矢先で、非常に全國の人が入込んで行つて、混雑を極めて居る、俺も暫く横濱に行つて、あの土地の事情も幾分か知つて居るが、何故お前はそれに氣がつかぬのか、それ程に苦心して、一人一匹の武士と認めて貰ひたいなぞさういふ、下らぬことを考へるよりは、其苦心を今言ふた貿易のことに何故傾けないのか、お前が大小捨て、横濱のやうな所へ乗込で行つて、町人の群に這入つて、貿易のことに従ふたならば、無論のこゝ、百人や千人の頭になつて、大に自分の志を成すことが出来る、左様いふ立派な天分を有つて居るこゝが、自分に解らないさういふのは、古人の所謂、天下の愚己を知らざるより甚しきはなしで、それが即ちお前に當る批評である。俺がお前を日本一の愚人さういふのが間違つて居るか、何うか、よく胸に手を置いて考へて見るが宜い、斯ういふ調子で、象山に吐め付けられた平八は、何と返す言葉もなく、胸の中には不平勃々であるけわき、さればして象山の言ふ所を、辯駁するだけの理窟も見出されねば、また辯舌もない平八は、不平の中に茫然歸つて来た。

其後も屢々、象山を訪ねて居る中に、段々其説を聴いて、平八も何時か大悟するこゝが出来たのである。悟つて見ると、決断のある平八は、自分の將來は象山の教に従ひ、町人に身を落して、貿易に一身を立てるのが第一である、さういふこゝに考へ付いたのだ。さうなるこゝの短い平八は、直に大小を叩き賣つて金にしてしまつた。其他 unnecessary なものは悉く賣飛して路用の金を整へて、象山に別を告げ、横濱を指して引揚げて来た。其後で、象山は川上の手に罹つて殺されたのであつた。

(四)

横濱開港の當時は、實に火事場のやうな騒動で、全國の人が入込んで来て、血眼になつて金を儲けやうとして、其競争の状態は實に凄まじきであつた。それが皆異人を當込んでのこゝであつたが、英語一つ解るのでなし、又異人に對する取扱は、何ういふ風にしたら宜からうか、さういふやうな考もなく、唯僅な資本を握つて来るだけのこゝで、中には十分の用意をして来る者もあつたが、不慣れなこゝに蹉躓も多く、大概な者は失敗して、来た時の氣概は何處へやら、何時の間にか煙の如く消えてしまふ者が多かつた。平八も其仲間に入込んで、色々なこゝはやつて見たけれど、慣れぬこゝに失敗が續き、遂には持つて来た金も使ひ果してしまつた。

食ふこゝ食はぬの境から、據所なく勞働に従ふやうにもなつたが、何時芽を吹いて、世の中に出られるか、其見當は更につかなくなつて、遂には神奈川宿の駕籠虎といふ、駕籠屋の乾分になつて、ホイ駕籠ホイ駕籠と、駕籠を肩に東海道筋を飛んで歩く、雲助同様の身分になつてしまつた。慣れぬこゝで初めの中は、脚を痛めて鳥屋に着いた、それも半年程経つと、何うか斯うか一人前の駕籠昇になつた。一年以上も續いて居る中には、駕籠虎の平公といつたら、多少人に知られるやうな駕籠昇になつたが、如何に出世した所で駕籠昇ちや仕様がな、象山の言つたこゝも餘り當にはならなかつた、平八は遂に宿場の駕籠昇で日を送る、果敢ない運命の下に空しく生きて居たのである。

今日も朝から爐邊に集つて、同じ仲間の駕籠昇と、十文博奕を始めた。悪いこゝには染るが早く、平八は何時か博奕の味を覚えて、頻に丁半に浮身を寝して居たのだ。今日は何うしたのか、好い目が出ずに奪られ通し、遂々無一物になつて、寒い時分に賭衣をして素裸になつてしまつた。馬の腹掛の洗つたのがあつたから、それを着て見たが、馬の腹掛ちや仕やうがない、背中に着れば腹の方が開く、腹の方に着れば、背中の方が開く、さういふやうな工合で、着物を半分着て居るのだ。夜更くまで博奕は續いて居た、所へ雪駄の後金をチャラ／＼鳴らし乍ら這入つて来た商人體の有福らしい人が、

『モシ虎さん』

『へい、是りや横濱の旦那様でござりましたか、お久しぶりでございます』
『大分夜更になつてお氣の毒だが、是から程ヶ谷へ用達に行つて、それから更にも山越えをして横濱へ歸りたいと思ふのだが、一挺駕籠を仕立て貰ひたいが、何うだらうか、都合は付かうかね』

『へい、毎度御最辰になります旦那様、宜しうございます、直に仕度を致しますから、一寸それへ御休みを願ひます』

『言ひ乍ら、爐邊に集つて居る駕籠昇を願ひて、』

『ヤイ、横濱の旦那様だ、サア何うする、誰か支度をしなまや可けねいぜ』
博奕に耽つて居る連中は、今目前好い仕事がつても、立たうとする者は一人もなかつた。

隅の方に馬の腹掛を着て、縮まつて居た平八は這出して、

『誰が仕事番か知らねえが、此仕事ア俺に譲つて呉んねえ』

『宜いとも、宜いとも、他の者ぢやなし、平公なら俺の方から喜んで譲つてやらう、其代り又汝に無理を言ふこともあるから……』

『夫ア同じこつた、有難てえ、それぢや兄弟濟まねいが、此仕事は一ぱい貰つたぜ』

『諾』

『誰か相棒がなくちや仕様がねえ……オイ攻ツ、汝濟まねいが、附合つて呉れねえか』

『宜いとも、俺も爵つて居る所だ、斯様な仕事にでもあり付かなきや、明日の小遣錢にも困るんだ』

『相變らず汝は申着なことを言ふな、腹の中では困つて居ても、黙つて居るのが、其處が男の我慢さいふものだ』

『大きなことを言ふない、平公、汝だつて他の仕事を譲つて貰つた程ぢやねえか』

駕籠虎は、此兩人の問答を聞いて、

『オイ、汝達や、旦那様を待たして置いて、左様な詰らねえことを言つて居ちやあ仕様がねえ、早く仕度をしねえか』

其中に平八と臆病政の兩人は、支度をして出て來た、政さいふ駕籠昇の絆名を臆病さいふのは、何んなことにも寒心して、無暗に恐がる所から、此絆名が付いたのだ。駕籠虎は例の商人の前に小腰を屈めて、

『へい旦那様、仕度が出來ましたから、御乗りなさいまし』

『左様かい、それは濟まなかつたね』

是からお客さんは駕籠に乗る、政公に鼻棒を昇がせて、平八は後棒に肩を入れる、ホイ駕籠、ホイ駕籠、神奈川の宿を出て、だら／＼坂になつた、青木臺を上つて、向ふへ下りる、左の方は横濱灣からの入江になつて居て、右の方が一面の山で、其崖に沿ふて細い街道を薄暗い提灯の光に道を照し乍ら急いで来る、もう輕衣橋へ掛かつて、是から少し行けば程ヶ谷の宿に這入るのだ。折柄、臆病政は何を見たのか、出たツミ叫ぶ、駕籠を棄て、韋駄天の如く、程ヶ谷の方に驅けて行く、調子を喰つて、平八も同じく肩を外したから、駕籠は横に倒れる途端に、お客さんは駕籠の中から轉り出した。平八は息杖を執つた儘、此咄嗟の場合にも油断のない男で、崖にピツタリ喰着いて、暗い中から様子を見る、臆病政が出たと言つて逃げたのも無理はない。身輕の装束に、覆面頭巾を被つた、武士體の者が長い刀を引抜いて、駕籠から轉り出して今起上がらうとした、お客の鼻先へ、其兇々する長刀を突付けて、

「静にしろッ」

「ッ、ッ、ごうぞ生命丈けは……」

「汝の懐に纏つた金の有るこは、晝の中から附廻して居たので分つて居る、先に廻つて待つて居た此松並木、夜深になつて人通のない、其淋しいのが此方の附目、サア胴巻ぐるみ出してしまへ」

こ、定文句の脅迫科白を並べて居る。平八は之を聴いて、諸は追剥だなと思つて、例の息杖を取直して身構へ、暗いのに慣れた眼で熱々眺めた。確かに武士風の追剥で、小腰を屈めて長刀を突付けて居る、背後は全て隙だらけだ、見當を付けた平八は、ヤツミ聲を掛ける、同時に息杖を突出した。龜の尾の邊を強かに突かれて、呀哉と言ひ乍ら前に倒れて、立上がらうとする所を、踏込んで来た平八が急所にグツミ一本突込んだから、ウンと言つて倒れた。其追剥には目もくれず、半分死んだやうになつて慄へて居る、例のお客に向つて、

「旦那、御怪我はありませんでしたか」

「へ、へ、」

「飛んだこでございましたな」

「ア、驚いた、私は又追剥が出たかと思ひました」

「へー、駕籠屋の平公でございます」

「フーム、駕籠屋さんかい、ア驚いた」

「飛んだこが始つて、嘸御迷惑でございしたらう、政の野郎は臆かさいふ紳名がある位で意氣地なしてございますから逃げちまひました、追剥は御覽の通り、俺が當殺して置きましたから、もう大丈夫でございます」

「へー、洵に有難うございました」
 「何にも奪られやしませんか」
 「へい、今胴巻を出さうとした途端に、此人がウンミいつて倒れたんでございます」
 「左様ですか、夫や宜うございました、サア駕籠に乗つて下せえ」
 「へー、駕籠屋さん」
 「言ひ乍ら、周囲を見廻して、
 『駕籠へ乗れと言つたつて、お前さん一人ぢやないか』
 『イーエ、其御心配にや及びません、此追剣に活を入れて、鼻棒を昇がして行きます』
 『ミ、ミ、飛んでもないことで、私は泥棒に昇がれた駕籠なんぞに乗ることは出来ません』
 『ナニ御心配なせえますな、長い刀を抜いて、旦那の鼻先へ突付けりや泥棒だが、駕籠の棒に肩を入れりや駕籠昇でござえます、マア見て御出なさいまし』
 「言ひながら、泥棒を引起して、活を入れた。ハット氣の付いた横面を、ビシャツミ張りつけたから、驚いて逃さうとする泥棒を、平八は緊り抑へつけて、
 『ヤイ、神妙にして居ろ』
 『ヤツ是は……』

「何が是はだ、俺達が正直に仕事をして居る此街道へ、時々出て来て、斯様な荒仕事をされちや、俺達の稼業が上つたりだ、併し汝も稼業のこじだから、今夜だきや見通して呉れるからじたばたせず片棒昇いで行け」
 泥棒は眼を圓くして、
 「何と言はしやる、俺に此駕籠を昇けさか」
 「左様だ、其代り駕籠賃は旦那に頂戴してやらう」
 「戯談言つちや可けない、豈夫駕籠は昇けない」
 「何だ愚圖々々吐すに聴かねえぞ」
 「息杖を執つて立上がる。前の手練に懲りて居る泥棒は、
 『へ、ッ、宜しうございます』
 平八は大小を取上げるに、泥棒に鼻棒を昇がせて、自分は後棒に肩を入れてホイ駕籠、ホイ駕籠、乗つて居るお客さんは生きた心地がない。
 程ヶ谷宿へ這入らうとする所まで来るに、向ふから臆病政が先に立つて、町役人や仲間の駕籠昇を連れて、ガヤ／＼言ひ乍らやつて来る。之を見た平八は駕籠を下して、
 『エー旦那、洵に相済みませんが、泥棒に少しばかりやつてお呉んなさいまし』

「へー、何ういふこゝに致したら宜しうございますか」
 「少し高いやうではございますが、此奴も好い仕事を失策つたので、幾らか可哀想でもござい
 ますから何うぞ一兩だけやつてお呉んなさいまし」

「へ、ッ、もう安いこゝでございます、サア何うぞ」

「言ひながら出した一兩を、受取つた平八は、」

「ヤイ泥棒」

「ハア」

「ハアぢやねい、是から此街道へ、餘りひよいく出て呉れるなよ、サア旦那に駕籠賃を一兩
 戴いた、斯様な好い仕事は二度ミアねえぜ、早く此一兩持つて消えて亡くなれ」

「イヤ、是は何こも辱けない」

「サア大小は返してやる、其一兩のある間は神妙にして居ろ、無くなつたら、何でも勝手なこ
 こをしろい」

泥棒は一兩貰つて、神奈川の方へさく／＼駈けて行く。其後へ臆病政等一同がやつて来て、
 是からお客さんを守つて、程ヶ谷へ来る。用事も済んで、山を抜けて、横濱へ歸つて来た。此
 お客さんが其頃横濱で有名な、生糸の賣込商であつた、大和屋三郎兵衛といふ大きな商人であ

る。途中の災難から平八を知つて、何うも普通の駕籠屋でないと思つたから、

「マア此方へ御上んなさい、偕て駕籠屋さん、何うもお前さんは普通の駕籠屋さんとは思へな
 いが、何か仔細があつて、斯ういふ稼業に落魄したのでせう、其事情を話して下さい」

「恐入りました、御話し申すも御耻しいこゝでございしますが、實は斯ういふ次第で……」

「是から平八が大體の徑路を話したので、三郎兵衛は、」

「成程、さういふ仔細があつたのでございしますか、併し貴下も異人を相手の商賣を始めやうこ
 いふのに、如何に立派な御方でも、不慣れなこゝは思ふやうに行くものではありません、寧ろ
 斯うなすつたら何うですか、私の店にお客分として、暫くの間御居になつて異人を相手に
 商賣する、呼吸を一通り御覧になつて、よく商賣の呼吸が解つた所で、御自分が一騎で始め
 るこゝにしたら、何んなものでせうか」

「イヤ、さういふこゝになれば此上もない、洵に都合の好いこゝですが、斯ういふ姿の者が、
 御世話になるこゝにも恐入りますから……」

「何の、左様な御心配には及びませぬ、命の親もいふべき貴下には、私は何しかして御報い
 申したいと思つて居るのですから、思召があつたら、店に居て御覧なさい」

「それぢや、何うかさういふこゝに願ひます、が、併し旦那、洵に御耻しい譯ですが、斯うい

ふ卑しい稼業になりました。博奕、飲酒の道樂に、駕籠虎を首め仲間の奴等にも、不義理な借銭がありました。足を洗ふには、其方の處分から付けなければならぬのですが、何んか御心配は願はれますまいか。」

「御理道千萬、宜しい、其方のごことは私が一切御引受するから、御任せなさい。」

「何んか何分御願ひ申します。」

是から三郎兵衛は駕籠虎へ交渉つて、一切の借銭を済ませた上に、幾分かの禮もして、駕籠屋の方の手は切つてしまつた。平八は是から大和屋の番頭になつて、商館へ通ふやうになつたのである。

(五)

斯ういふ機會を捉へた平八は、是から全く奮闘の生活に這入つたのだ。一生懸命になつて、商館通ひをして、異人を對手の商賣振の研究も積んで、年を経る中に知己も殖えれば、後援者も出来る。第一に大和屋が承知で、其暖簾下のやうになつて、茲に爲替兩替店を出すことになつた。商機を見ることに敏い平八は、或年の貨幣の相場に付ても、なかくに機敏な行動をして、段々資産も殖える、それに大和屋が資本を貸して呉れたので、傍ら生糸の賣込を始め

た。平八の生れた所が信州であつたといふのが、此商賣には此上もない好都合であつて、日本一の生糸の原産地が、故郷であるといふ關係から、此生糸の賣込に成功して、見る／＼中に身上は延びる、平八の名は段々世人に知られるやうになつて、明治四年の當時には、もう横濱の糸平といへば大概な者は知つて居るほさになつた。

或日のごこ、待合の富貴樓から使者が来て、

「唯今、東京の御客様が見えて、直に御出で下さるやうにさいふごこでございますから、御迎ひに出ました。」

「さいふ、何んなお客さんかご聽いて見れば、

「お役人様のやうです。」

「さいふだけのごこで、他は分らない、兎に角、平八は支度をして出懸けた。

此富貴樓が、即ち例の富貴樓であつて、今様の待合を始めた元祖である。樓主は有名なお倉此女はなかくの傑物で、普通の待合の女將は、大分氣象が變つて居た。其面白い氣象を見込んで縣令の陸奥宗光が最辰にした。何時も晝飯は此家で食ふやうにして、それから親交のあつた、伊藤だこか、又は山縣、井上、黒田、西郷等の人々を、段々紹介して呉れたので、何か政治の問題でも起きて、一寸集會をするにしても、東京では人の目に着くさいふので、態々横

濱までやつて来て、富貴樓の二室を使ふやうになつた。斯ういふことが縁で、富貴樓も明治政府の大官との關係は付いたのである。それをお倉が巧に利用して、遂々日本一の待合になつたのだ。昔は淺草觀世音の境内に、水茶屋の客引娘であつたのが、植木屋の龜次郎といふ者が好い仲になつて出奔した。是がお倉の苦勞の最初で、龜次郎が存外の道樂者であつて、博奕も女色の二道樂で、何時もピーク風車、何うにも始末が付かなくなつて、内藤新宿の女郎屋に身を沈めたけれども、忽ちに好い客を捉へて落籍され、其方の處分を付けてから、又龜次郎も夫婦になつた。間もなく二度の勤めを、品川の土藏相模ですることになつて、龜次郎に其身代金を悉皆渡した。亭主の龜次郎は女房のお倉が、此苦勞をして居るのも察せず、又も其身代金は、其日の中に奪られてしまつた。斯ういふ厄介な亭主を有つたお倉は、少しも悔まず、何處までも惚れ抜いて居たものか、龜次郎の爲めには、何んな苦勞も構はぬといふので、何時か好い客を捉へて、土藏相模を早く出てしまつた。

それから夫婦で横濱へ来て、富貴樓を開いたのだ。其時分には今の歌舞伎座の茶屋武田屋の女將や築地の瓢家の女將などが、まだ横濱で藝者をして居て、盛に富貴樓に出入をして居た。亭主の龜次郎は火鉢の前に奉られて、待合の旦那様で威張つて居たのだが、持つて生れた道樂は止まないものを見て、出入の藝者さくつ付いて夜逃げをして了つた、サアお倉の驚駭は

一通りでない、命までも打込んだ亭主に逃げられたのだから、早速東京へ出て来るに、伊藤博文の邸へ飛込んで来て、

「サア御前、旦那の御力を拜借しなければならぬのです」

と、不意に言はれて、伊藤は笑ひ乍ら、

「何が始つたのぢや」

「何が、家の龜さんが藝者を連れて逃げてしまつたのですから、政府の御威光で捜して下さい」

「飛でもないことを言つて来る奴だ、貴様の亭主が藝者も墮落をしたからさいつて、政府の御威光も使へないぢやないか」

「左様な意地の悪いことを仰しやらないで、平生の御最良で、何うか政府の御威光で、兩人を押へて下さい」

之を頼まれたのが伊藤だから、面白半分で引受けた。政府の御威光で遂々兩人を押へて、お倉に引渡したが、偕て如何に處分をするか、伊藤も興味を有つて見て居た。お倉は亭主に向つて、

「ネエ龜さん」

一通りでない、命までも打込んだ亭主に逃げられたのだから、早速東京へ出て来るに、伊藤博文の邸へ飛込んで来て、

「サア御前、旦那の御力を拜借しなければならぬのです」

と、不意に言はれて、伊藤は笑ひ乍ら、

「何が始つたのぢや」

「何が、家の龜さんが藝者を連れて逃げてしまつたのですから、政府の御威光で捜して下さい」

「飛でもないことを言つて来る奴だ、貴様の亭主が藝者も墮落をしたからさいつて、政府の御威光も使へないぢやないか」

「左様な意地の悪いことを仰しやらないで、平生の御最良で、何うか政府の御威光で、兩人を押へて下さい」

之を頼まれたのが伊藤だから、面白半分で引受けた。政府の御威光で遂々兩人を押へて、お倉に引渡したが、偕て如何に處分をするか、伊藤も興味を有つて見て居た。お倉は亭主に向つて、

「ネエ龜さん」

流石に體裁が悪いが、龜次郎は下を向いて、黙つて居る。
 「お前さんも此妓と一緒に、縦令幾日でも夫婦生活をしたら、もう気が済んだでせう、今まで私が二度まで、苦界に身を沈めた苦勞を思つたら、何うか此妓のことは諦めて下さい、さうして私に、元の夫婦で永長く暮して下さい、ネエ可いでせう」
 斯う言はれては龜次郎も、唯首肯より外に仕方がなかつた。それからお倉は、女の方に向つて、

「お前さんが亭主に惚れたのは、決して私は無理だとは思はない、妾は此人の爲に二度まで苦界に身を沈めたが、左様な辛い目に遭つても、妾は別れることが出来ないのだから、妾の惚れる男に他の女が惚れるのは當然だと思つて、妾は何も思つて居ないのです、けれども妾は此人は夫婦なのだから、あなたも何うか是ッ切り諦めて、二度は關係して下さるな、其代り妾は今までのことは少しも恨みは思はないから、可いかい、解つたかい」
 斯う人情の解つた裁断をされては、藝者も體裁が悪い。

「何うか勘辨して下さい、將來は何うか女將を姐さんにして交際をしたいから……」
 「可いさ、左様解つて呉れば、妾も嬉しい」
 是から兩人が姉妹になつた。此藝者が今築地で有名な、或待合の女將なのだから面白いでは

ないか。此詰らない逸話の中に、お倉の氣象が現はれて居る。凡そ世の中に男女の關係位面倒なものはない、それを斯ういふ風に解釋して居るお倉には、一種の人生觀があると思ふ。大學邊りで變な學問に頭を痛め、生瓢筆のやうな蒼い顔をして、人生不可解なき言つて、華嚴の瀧や霧島山で、熱い思ひをしたり、冷たい思ひをする連中が、若しお倉の手許に半月も居たら直に人生は解するに足る、さいつたやうなことになるだらう。

糸平は此お倉を利用して、金儲けをしたこともあつて、お倉は糸平は特別の交際をして居たのだ。今其富貴樓から迎ひに來られて、來て見るに、意外にも客いふのは、大藏少輔の井上馨であつた。

明治四年に大藏省が組織されて、大久保利通が大藏卿になつて、井上が大藏少輔になつたが大久保はホンの名前だけのことで、其實權は井上にあつたのだ。當時の大藏省は今の大藏省とは違つて、なかくに其權限が廣く組織されて居たから、政府の仕事の大半は、大藏省でやるやうになつて居たのだ。其實權を握つて居た、井上の權勢は實に廣大なもので、又其配下には有ゆる人材が集つて居た。伊藤博文も陸奥宗光も中島信行も亦遠藤護介のやうな人までが、皆其部下に居て、仕事をして居たのだから、大藏省の勢力が強かつたのも無理はない。其井上がやつて來て、糸平を呼んだのだから、何の用事か分らないが何うせ大きいこの相談に違ひな

い、糸平は思ひ乍らも、

「儲て旦那、何ういふ御用でございますか」

「外のこゝでもないが、此頃頼に評判の質金だが、横濱に何の位あるだらうか」

「サア、それは何うも分りませぬな、併し大分行はれて居るやうですから、何萬兩いふ金でせうな」

「ウム、何しろ御維新の際に、各藩で先を争うて拵へた鉛詰の質金、あの額銀の質金を總稱して、チン／＼、是や莫大なものであるに違ひない、それに付て糸平、お前に頼みがあるのぢや」

「へい、何ういふこゝでございますか」

「此横濱にある質金を、お前の力で集めたならば、何の位集まるだらうか」

「サア、何の位通用して居るか分らないのですから、是だけ集めますといふこゝは、ハツキリ申せませぬが、十日も掛かりましたなら、三萬兩や四萬兩を集めるのは困難もありますまい」

「ウム、それぢやお前の力で、集められるだけ集めて呉れぬか」

「へい、妙な御用でございますな、集めろと仰しやれば、兩替渡世の私は手数料さへ戴けば、何でもやりますが、併し旦那、大政府のお役人ともいはれる閣下が、質金を集めて何になさいますか、若し金の相場でもなさるさいふなら、私や御引受は出来ませぬが……」

「イヤ、さういふ不正のこゝから頼むのではない」

「へエ……何ういふ理由でございますか」

「實は俺が、大藏省の金庫を預るこゝになつて、初て驚いたのは、異人が此チン／＼を質金に知つて、歩安に方々から集めて来ては、額面通りの金に引換へて呉れいふて、大藏省へ持込む、質金に知り乍ら、それを拒絶けるとの出来ないのは、政府の信用を思ふからぢや、今日までに莫大な正金を、質金の代りに持つて行かれた、若し此儘にして置いたならば、大藏省は是が爲に破産をするやうになる、そこで此間中から俺が先に立つて、江戸中の兩替屋を廻つて、百兩や二百兩の端金なら宜しいが、五百兩以上の質金を持つて居る者があれば、片端からフン縛つて、それ／＼嚴重の處分を加へ、金は没收して了つたが、此横濱にある質金は、左様な處分も出来ず、そこでお前を頼んで、一遍に集めてしまひたいと思ふのぢや、それが若し異人の手に廻つて、正金に引換に來られた日には、俺の方でも困るのぢやから、其前に買集めて了はういふのだ。仔細さいふのは斯ういふ譯ぢや」

「成程、さうして見ますれば、政府の御爲でございますから、宜しうございます、力限り集めませう、其代りに私は兩替渡世でございますから、相當の歩合は頂戴いたしたうございます」

「宜しい、それは引受けた」

『就ては、尙一つ願つて置きたいのは、其集めました贖金と正金は、右から左へ御引換に願へませうな』

『それは無論のことぢや』

『それが間違ふミ、私の方で困りますが、確ミそれに違ひございますまいな』

井上は自分の頸筋へ手を當て乍ら、

『間違つたら是ぢや』

『其御言葉を戴けば安心でございますから、早速に集めることに致しませう』

それから宴會になつて、夜更く井上は歸つた。

数日の後、糸平は必死になつて集めたチンく、幾萬兩の贖金を持つて、大藏省へやつて来て、之を井上に引渡した。

其時分は大藏省に、現金の餘裕などは更に無かつたのだから、今糸平に持込まれた贖金に對して、直ぐ正金を渡してやるまいやうな、都合はしてなかつた。そこで井上が會計の者を呼んで、悉皆數へて之を渡した上、糸平の買集めた植校書を見て、

『宜し、よく分つたから、何れ此方から沙汰をする、其節に出て參れ、正金は渡して遣はす』

『夫や困ります、此間も御斷り申した通り、右から左へ正金を下さらないミ、私は迷惑をする』

のですから、何うか今日御引渡しを願ひます』

『政府の方の都合があるのだから、何れ此方から沙汰をするに、貴様は解らぬ奴ぢや政府が町人を騙して何うする、黙つて歸へれば宜い』

『けれども是は贖金なんですから、右から左へ頂戴をしないで、幾日か経つた後に、若し旦那が知らないといへば、私が贖金使ひになつてしまふのですから、斯様な危ないことはありません、何うか左様なことを仰しやらずに渡して下さるやうに願ひたい』

『イヤ、今の場合さういふ譯にはいかぬ、黙つて歸へれといふのに、貴様も分らぬ奴ぢや』

ミ、井上一流の劍突で追返へさうしたから、糸平はグツミ向き直つて、

『何だミツ』

其權幕の激しいのには、井上も眼を剝いた。糸平は纏て片肌を脱いで、胡座を組いた。

『それだから此間あれだけ念を押して置いたんだ、大藏省で何んな大い役人か知らねえが、取引をすりや矢張り五分々々の仲間だ、政府の役人も糞もあるかい、斯様な危い仕事をさせ乍ら、今になつて正金を渡すの渡さねえのミ、左様な御詫を吐きやがつて、誰か承知するもんかい、サア今右から左へ正金を出さねえいふなら、此首が飛ばうミ、此處一寸も動かねえのだから、何ミでもして見ろ、全體政府の權威を笠に被つて、力の弱い町人を高壓的に吹鳴

り付けやうとしたつて、左様なこゝに驚く平八ぢやねえ、誰だと思ふ、天下の糸平を知らねえか」

こ、痰阿を切つて睨み付けた。其權幕の恐しいのに、井上も呆氣に取られて黙つて居る。所へ這入つて來たのが例の伊藤で、此有様を見るこ、

「オイ、平八、何をして居るんだ」

「伊藤の旦那ですか」

「伊藤の旦那ぢやない、大藏省の應接所へ來て、肌脱ぎで胡座を組くさいふのは何こいふこゝだ」

「餘り井上さんが解らねいこゝを言ふから、そこで今一寸痰阿を切つたんですが、何方が悪いか、善惡の結末を付けてお呉んなせえ」

「オイ井上、何うしたんぢや」

「實は斯ういふ次第だ」

井上の物語るのを聽いて、伊藤は笑ひ乍ら、

「夫やお前が宜くない、相變らずの疥癬で追返さうとするから、魂のある町人だこゝ斯様なこゝになる」

こ言ひ乍ら、平八の方へ向つて、

「是や井上の方が悪いが、併し政府も御都合のあるこゝだから、俺が保證するから待つて貰ひたい、實は大坂の造幣寮から金の出來て來るのを待つて居る所だから、それが届いたら、何を差措いても、お前の方の始末は付けやう、何うだ是でもお前は承知が出來ないか」

平八は行儀を直し乍ら、

「さういふ風に解つた話なら、幾日でも待ませう、井上の旦那のやうに高壓的にやッ付けられるから俺や癪に觸つたのです」

伊藤の仲裁で、糸平も笑つて、大藏省を引揚げて來た。

斯ういふ事情から、糸平の名が段々世間へ響いて來る。自分も之を自慢にしたが、世間の人も、天下の糸平で通らせるやうになつた。が、幾日かの後に、大藏省からは伊藤が保證した通りに、正金が廻つて來たから、此こゝの結局は付いたのである。併し井上も此チン／＼いふ質金の處分に付ては、なかくに苦心をしたもので、是は唯其一端だけのこゝを話したのであるが、井上の當時の苦心談は、實に面白い逸話を遺して居るのである。

平八は段々成功して、遂に横濱一番の商人になつた。誰が何さいつても天下の糸平で、日本中の人が知るやうになつたのである。明治十年の前後は、殊に糸平の全盛期で、家産は殖えるし、商賣は繁昌する。曾て象山が言ふた通りの身分になつた。平八は大得意で、天下を睥睨して居るの概があつた。

此人の好きであつたのが芝居見物、何時も東京へ出て来ては、新富座に一日の享樂をしたのである。當時の名優阪東彦三郎が最良であつたが、僕も此彦三郎は覚えて居る。明治十二年の時分記憶するが、此人が大岡越前守で、死んだ菊五郎が天一坊、例の團十郎が山内伊賀介を勤めて、なかく面白く芝居を見せた。天一坊の裁判になつて、其陰謀の尻を割つてから、越前守が天一坊を高縁の上から蹴落して、吃度睨み付けた時は、品格のある中に何さなく威嚴のあつた。是が南の町奉行として、後世に傳へられた越前守さういふ人であるかと思ふ位に、適役であつた。是は僕の記憶に今も存つて居る、洵に品格のある役者であつた。是が最良で、何時も見に来る、そのうちに芝居茶屋の二階で打出しになつてから宴會を開いて、彦三郎を呼んで飲むことになつた、其時分には遊興の機關が甚だ不備であつたから、酒でも飲んで、大勢の客を聘んで豪遊をするのには、厭でも吉原へ行くより外はなかつたのである。吉原は又豪遊をすべきやうに、家屋の構造から、總ての機關が備つて居たのだ。されば苟も大盡遊びさういへば、

吉原よりないやうに傳へられて居た。併し何んな遺方をした所で、遊廓内の遊びだから餘り綺麗な遊びとは言へない。稍々通人の豪遊さういふべきものは、芝居茶屋の二階に最良の役者を呼んで、藝者期間に周圍を取捨かせ乍ら、人知れず大金を撒布して歸つて行く、是が大盡遊びの粹なるものであつた。糸平は今其遊びをして、喜んで居た所であるが、段々時刻が移つて夜更くなつて、サア歸らうとした時に、懐から袱紗包を出した。紙幣の束が直接に包んである、其中から百兩の束を一つ出して、彦三郎の前へボンと投出した。今の百兩と違つて、其頃の百兩は大金である。それを投出したのだから、周圍の取捨連中は、眼を圓くして居る。

『オイ彦三、深更くまで氣の毒であつた、俵にでも乗つて行つて呉れ』
と言つて、應揚に向直つた時に、彦三は、
『洵に思召は有難うございませうが、此お金はお返し申します』
『エッ、何』

『段々の御最良で有難いことに思つて居りますが、此お金だけは御返し申します。』
流石の糸平も、グット癪に觸つた。
『何ッ、此金は受取れぬッ』
『ハイ』

『天下の糸平が出した金を、不淨の金といふのか』
 『決して左様ではございませぬ。』
 『それならば、何故受取らぬ。』
 『旦那が天下の糸平なら、私も天下の彦三郎でございませぬ、裸金の投打……斯ういふ御祝儀は戴いたことがございませぬ』
 『断然言はれて、流石の糸平も額を押へた。』

『成程、裸金の投打は乞食の外にないことだ。イヤ是は俺が失策だ、何うか勘辨して呉れ』
 『其晩は無事に歸つたが、是から彦三郎を愛することが一層深くなつた。まだ其頃には、役者が河原乞食言はれた時代であるが、其役者の中にも、斯ういふ氣概のある人があつた。果して今の俳優の中に、是だけの氣概を有つて居る者が幾人あらうか、彦三は矢張り天下の名優であつた。』

或日のこゝ、極く暑い盛夏の時、彦三郎の家へ押掛けて來ての大酒宴、狭い家に一ぱいの人で、其熱蒸し暑氣の爲に、ジリ／＼汗が出るのを、ヂツ／＼堪へて飲んで居る。彦三は糸平に向つて、
 『風呂が沸きましたやうですが、御這入になりますか』

『ウム、此暑氣では風呂にでも這入らなければ、浸ぎが付かないが、併し、もう動くのも實は太儀で、出來ることなら此儘這入りたい』

『エツ、此座敷でお湯に這入りたい……』
 『ウム』

『何でもないことではございませぬ、直に支度を致します』

こゝ意外の答を聽いて、糸平も驚いた。暑いので動くのが厭で言ふた戯談を、彦三は今直に風呂を立てますといふ。何んなことをするかと思つて居る中に、新しい据風呂を持つて來て、其座敷の中央へ据ゑて、是から水を汲み込む。イヤもう座敷中水だらけになつた。竈には百目掛の蠟燭を點して、是から湯を沸し出した。石炭や骸炭違つて、百目掛の蠟燭を點して、湯を沸すなどは其時代のこゝが想はれて、實に床しいやうな氣がする、そのうちに湯が沸いた。

『サア旦那、御這入り下さいませ』
 之を見た糸平は、何とも言へぬ嬉しさで、直に湯に這入り、是から藝者や幫間は、尻端折の禪掛になつて、前や後に廻つて、糸平の汗を洗落す、快い心持になつて、湯上り姿の涼く、別の座敷で又飲み直しになつた。糸平は嬉しさの餘り時を移し、夜更けになつて、サア歸らうとなつた時に、門口へ大勢の職人體の者が、押掛けて來て、

「唯今、お誂へものが漸く出来ましたから、是から御敷き換へ申します。」
 と言ひ乍ら、家内へ飛込んで来て、濡れて居る疊は申すまでもなく、立關口の疊まで、片端から引剥して、戸外へ抛り出す、後に敷込んだのは、備後表の香の芬する、新しい疊ばかりであつた。濡したのは奥座敷一室であつたが、今は家中の疊が皆新しくなつた。是は糸平が、風呂へ這入つて居る中に、附いて居る者に耳打をして、疊屋に走らせて註文したのを、疊屋は直に間に合せたのだ。天下の糸平の遊びは、斯ういふ所にも其氣分が現はれて居て、實に面白い今の成金は何んな派手なことをするにしても、精々が自動車に乗つて、臭い息を他に吹き掛け乍ら、砂塵を立て、怪しげな女と相乗をして、市中を乗廻す位に過ぎまい、逆も比べものにならぬ。遊ぶのでも昔の人には趣向があつた、其處に奥床しい點は現はれて居る。
 斯ういふ次第で彦三糸平のことは、段々人の評判にも上るやうになつた。今は此兩人共故人になつて居るが、天下の糸平に彦三郎、何と面白い對照ではないか。糸平はまだ老朽ぢたといふ齡でもない五十の坂を越えたばかりで、明治十六年に病んで、遂に起たなくなつたのである。今は神奈川の寺に、天下の糸平と刻つた石塔が、人の目を引くだけのことであるが。葬式の時に集つて来た車夫には、二十錢づゝ渡して居たのを、僕は子供心に甚く感心したことがある。葬送を送つて来た者の車夫に金をやることは、確か是が初めてであつたかと思ふ、兎に角天

下の糸平は確に怪物であつた。

萬延 櫻田事件

(上)

水戸家は徳川御三家の筆頭であるから、さうしても徳川と、其興廢を共にしなければならぬ關係を有つて居たのだ。然るに幕末の水戸家は、全く徳川宗家に對して好意を有つて居なかつた。嘉永年間に亞米利加の使節ペルリが我國に渡來してから、追々各國の人もやつて来て、開國條約に調印を求めらるやうになつた。それから攘夷開國の議論が分かれて、諸藩の間にも大分難しい問題になつて来たのだが、其攘夷論が勤王論に結び付けられて、遂に幕府の倒れたのは此議論の爲であつたのだから、其處に幕末史の面白味はあるのだ。
 幕府では外夷から迫られて、開國貿易を拒絶する口實も無く、又實力も有つて居なかつたのであるから、餘儀なくせられて、遂に其條約に調印することになつたのである。然るに朝廷は何處までも攘夷の御趣意を以て幕府に臨まれたので、朝廷と幕府の間に其折合が付かなくなつたのみならず、豫て徳川家に對して、長い間の恨みを有つて居た毛利藩などが、朝廷を笠に被ぶつて、盛に攘夷論を唱へて来たので、之に附和雷同する者も出て来た所から、毛利藩では之

を以て、幕府を苦める唯一の手段と認めて、更に朝廷の思召たる攘夷の御趣意に反いて、幕府が開國條約に調印したのは、違勅の大罪を犯したものである、さいふ理窟を付けて、頻に幕府を窘めたのだ、其頃水戸家の當主であつた齊昭、此人は後に烈公と諡された人であるが、なかなか強情な朝氣に富んで居た人である。世間からは水戸は副將軍の格式がある、さまで言はれて居た位に、徳川宗家は深い因縁を有つて居た、御三家の筆頭ではあつたけれども、此問題に付いては全く幕府の主張を異にして、頻に攘夷を唱へて居たのだ。加ふるに光圀以來、例の大日本史の編纂に従事して、殆ど是が藩の事業の如くなつて居た、それが爲に有らゆる學者を集めて、我が皇室に關する一切の事情を取調べて居たので、自然皇室の方からも、水戸家に對しては特別の御取扱ひがあり、烈公の如きは是が爲に、屢々朝廷より恩賞の御沙汰にも預かつた。烈公も亦幾度か京都へ献納物などをして、段々皇室に近付くやうになつて來た、其間に勤王の精神が、何時傳へられることもなく、藩士の間にも段々傳へられて來たので、何時か皇威の衰へを嘆くやうになつて來たのである。當時の事情からいへば、勤王と佐幕との兩立すべき筈は無いのであるから、水戸の藩士が多少も勤王論に基いて動くやうになれば、徳川宗家に對して情の薄くなるのは、自然の勢で止むを得ない、尤も藩の學者の中でも勤王論を唱へながら幕府の爲にも盡さうとした人はあつたけれども、それはなかく、實行に難かつた。幕府が朝廷

に對して、相當の御取扱ひをして居れば格別のこゝだが、非常に冷酷な仕向けをして居たこゝは事實であつたのだから、それが爲に皇威の衰へて居るのを嘆くこゝになれば、自然幕府に向つて攻撃の矢を向けなければならぬのである。勤王論を唱へる傍、幕府を佐けるこゝは手品師にも出来るこゝではない。従つて勤王論一本槍で進んで行くものは無遠慮にドシ／＼議論もすれば、活動もするさういふやうな譯で、到頭藩士の間が二つに分かれて、後には天狗書生の二派になつて、戦さをするまでの騒ぎになつたのだ。

江州彦根の井伊直弼が、幕府の内閣に這入つてから、段々専横の振舞をする。將軍は年少で世間のこゝを知らない、さうしても大老の意の如く何事もやつて退ける傾きがあつた。殊に十三代の家定が病んで繼嗣が無いさういふ所から、齊昭の子慶喜を繼嗣にする運動が起きたのに、大奥と紀州派が反對して、紀州藩の若殿慶福を後嗣に据ゑるこゝにした。それが十四代の家茂になるのであるが、其肝煎をしたのが井伊直弼で、繼嗣の争ひに付いても随分無理なこゝをしたのだ。そんな關係から一層水戸家と幕府との折合が悪くなつて來て、齊昭は隠居して居たけれども、尙藩主を壓するの威力を有つて居たし、旁々幕府には何の遠慮も無く勤王攘夷の説を唱へて進んで行つたのだ。

外夷の壓迫が段々酷くなつて來たから、幕府の方では苦し紛れに、條約の調印も濟ませ、之

を朝廷へ奏請に及んだ。然るに朝廷では、飽までも攘夷の御趣意に基いて、其調印を御許しに
ならない。茲に於いて幕府は外夷に朝廷の板挟になつて、二進も三進も行かなくなつてしまつ
た。其折柄、京都に居た攘夷派が、頻に朝廷に迫つて攘夷の斷行をしようとしたので、遂に之
に關する密勅が下だるこゝになつたのである。其密勅は第一に水戸家へも下だつたのであるが
其頃京都の藩邸を預つて居た、鶴飼吉左衛門の倅の幸吉といふものが、密に其の密勅を齎して
江戸へ下だつて来て、駒込の別邸に閉居して居た齊昭に、之を手渡したのである。普通の場合
ならば、斯やうな密勅は御受けをする筈は無いのだが、前に言ふたやうな事情から、齊昭も宗
家に對しては不快の念を有つて居たので、快く密勅を御受けを致してしまつた。それが幕府の
方へ漏れたので、それから騒動はなかく激かつたのである。

其前から勤王佐幕の兩派が、藩中に於て軋轢して居た所へ、斯ういふ問題が持上がつて來た
ので、飽までも密勅の御趣意に基いて、攘夷の實行を計らうといふものゝ、それは甚だ穩でな
いから兎に角幕府の手を経て、其密勅は京都へ御戻しするのが正當であるといふものゝ、二派
の暗闘が激しくなつて來て、家老其他の重役は、多く勅書返還の方に傾いた。幕府の方でも乗
て、置けないから、嚴ましく其返還を迫つて來るといふので、一層騒ぎは大きくなつて、是が
爲に到頭脱藩してまでも、朝廷の御趣意を立てるこゝいふものが起つて、其時の水戸藩の騒ぎは

一通りでなかつた。斯ういふ事情から脱藩した連中が、何時か江戸へ乗込んで來て、各所に潛
伏して居た。人数は極く少なかつたけれども、眞に命賭けで國事に盡すこゝいふ連中であつたか
ら、遂には井伊大老暗殺の計畫をするやうになつたのである。

乍併、此連中は何處までも、勤王の精神を以て立つ者には違ひなかつたし、又井伊大老から
主人の齊昭が、非常な虐待をされた。それに對する復讐の念もあつて暗殺を企てたには違ひな
いが、さればこゝ此問題を以て、直に徳川幕府を倒してしまふ、こゝいふやうな考は無かつたの
である。井伊大老を暗殺をしたこゝが原因になつて、幕府の運命が茲に窮つたのは、それは後
になつてからのこゝで、最初から其處まで見越してやつたこゝではない。

全體、極く公平な觀察から言へば、斯ういふ問題に付いて相争ふ場合に、對手の者を暗殺す
るこゝいふやうなこゝは、甚だ正しい方法とは言へないのである。乍併、それも時代の關係から
調べて行けば、強ちに悪いこゝのみは言へない。今日のやうに言論の自由があつて、又國民
の代表者が議會に立つて、政府の當局者に争ふこゝの出来る機關が完備して居れば格別のこゝ
だが、其時代には勿論さういふ機關の備へがなかつたのは言ふまでもなく、少しでも幕府のこ
ゝに付いて激しい議論をすれば、直ぐに押へられて首を刎ねられる。そんな時代に於て、攘夷
さか勤王さかといふこゝで争ひをする者が、時の政權を握つて居る者に對して、最後の手段とし

て暗殺を行ふのは、さうも止むを得ないことだ。正々堂々兵を起して争ふことになればそれは又格別のことだが、極く少ない人数で此大官を斃さうといふやうな場合には、暗殺の手段に訴へる外に策はないのだから、革命の一手段として認めてやらなければならぬまい。

櫻田門外に井伊大老の首を斬つたのは、水戸の浪士であるが、其中にタツタ一人有村治左衛門といふ薩藩士が加はつて居た。其關係に付いては一通り述べて置かなければならぬ、といふものは有村を除く外の者は、皆水戸の藩士であつたけれど、タツタ一人の有村が加はつた爲に此大事が遂げられたといふ點からいへば、有村の功勞は決して見逃がすことは出来ないのだ。従つて有村と此連中との關係を述べて置かなければ、此事件に付いて、物語を盡したものは言へないのである。

薩藩も長州藩と同じやうに、幕府へ對して餘り好意を有つては居なかつたが、齊彬の在世の間は、幕府を討つて倒すといふやうな、極端な考は有つて居なかつた。長州藩では飽までも、幕府を討つて倒す方針を有つて居たけれども薩藩の方では改革の出来るだけ改革を行ふて可成り幕府は其儘に續けさせたい、といふ念はあつた。齊彬は嘉永安政へ掛けての諸侯の中では、第一番に賢明な人ではあつたが、當主になつてからの壽命が極めて短かつたので、餘り済えた仕事を仕遺したといふやうなことは無かつたが幕府の改革に付いては苦心した人である。それ

から朝廷へ對しても、至誠を以て御務めをした位で、若し齊彬が居なければ薩藩に一貫した勤王の歴史が無いといふ位まで、後世の人に思はれる程、朝廷へ對しては忠節を盡した人である例の西郷南洲は此人の引立てに預つて、漸く世間へ出るやうになつたのだ。されば齊彬が死んでから後も、其志は南洲が承繼いで、維新の大業は成し遂げたのである。

十三代の將軍家定の御簾中は、齊彬の養女篤子姫が、表面は近衛左大臣の養女として嫁いだのである。齊彬が何ういふ譯で、篤子姫を將軍の御簾中にしたかといへば、即ち幕府の改革を行ふ一つの手段としてやつたことで、西郷の如きは現に調度係を勤めて、其輿入の準備は一切西郷の手に依つてなされた、といふやうな關係になつて居る、斯ういふ風に婚姻から結び付けて、幕府との關係を深くし、それから徐に手を下だして行かうといふ考ではあつたけれど、不幸にして時疫に罹かつて薨れたから、折角の婚姻政略も無駄にはなつてしまつたのだが、齊彬の苦心は、此一事に依つても十分に察することが出来る。櫻田事件の起きた時は、西郷は流罪中であつて、少しも其事件に關係は無かつたが、其代り例の大久保市藏が、深く此事件には關係して居たのである。

齊彬と久光の相續争ひに付いて起きた、薩藩の内訌に最も深い關係を有つて居た、有村治右衛門といふ人があつた。糾明奉行を勤めて居て、なか／＼剛骨の聞えがあつた人であるが、此

人の倅に雄助、治左衛門、俊齋の三人があつた。俊齋は後の海江田信義であるが、次男の治左衛門は非常に剣術に優れて、當時の藩士中でも屈指の腕利きであつた。父の治右衛門が齊彬のここに付いて罪を得るまでに、久光派に對抗した關係から、倅の治左衛門が齊彬の幕府改革に勤王論に傾いて居たのは言ふまでもない。其仲間では大久保が最も勢力もあつたし、郷黨の間でも重きをなして居たのだ。鹿兒島の城下を流れる、甲突川の東岸の鍛冶屋町に生れて、西郷は二歳違ひの弟であつた。大久保の父も、前に言ふた相續争ひの時に切腹して死んだ一人であるが、西郷は幼少の時から極めて親密の交際があつた、されば西郷の流罪中も、大久保が専ら齊彬の遺志を繼いで、天下の爲に盡さうといふ考があつて、頻りに奔走して居たのである。或る時此連中が集つて、愈々時勢に憤慨して江戸表へ押出さうといふので、決死隊を組織したこころがある。然るに、其こころが久光の耳に這入つて、大久保外數名の者が急に御前へ召されて、久光から懇々説諭をされたこころがあつた。一同の者がそれまでに天下の御爲に盡さうといふのは結構なこころであるが、まだそれまでに切迫した時節でもない、今の場合は暫く慎んで居れ、今後は余が自から乗出して天下のこころに與かるから、其際には御前達の力も藉りなければならぬ。こころいふやうなこころを諭されて、到頭押へられたこころもあつた。其時分の武士は、主人から有難さうなこころを言はれれば、それでギユツミ參つてしまつたのであるから、此連中も矢

張りそんなやうな譯で、一時は勢揃ひして江戸表へ乗出す計畫をしたが、それは止めてしまつたけれども、此儘に其志を挫くのは残念であるといふので、段々相談の上、遂に有村治左衛門が此一系列を代表して、江戸表へ乗出すこころになつた。之には左まで藩の方でも干渉はしなかつたのみならず、唯一人の治左衛門を江戸へ出さないといふこころになつたなら、一同が糞ヤケになつて、こんなこころをするかも知れないから是だけは黙認するこころになつた。

江戸へ出てからの治左衛門は、暫く世間の様子を窺つて居たが、さうも國許で思つて居たのこころは大分違ふ所もあつて、容易に事を起すこころも出来ぬ、先づ暫くは武術の修業でもして徐々に時の來たるのを待つこころにしようといふこころに決して、それから千葉周作の門に入つて、劍術の修業をするこころになつたのである。それに付いて面白い話があるから、それを一寸述べるこころにする。

三田の藩邸に居て、毎日のやうに市中の見物をしたり、有志の間に出入して時勢の話なきを聞いて居たが、或日、刀屋が色々な刀劍を持つて來て見せた、中の一振が、治左衛門の氣に入つて之を求めるとこころにした。年齢は若いし、劍術は出来るし、それが名刀を一振求めたのだから、何さなく切味を試して見たいやうな氣になつた。夜晩くなつて短檠の下に、夏猶寒き三尺の秋水を抜いて、熱く視て居る中に何さなく殺意が起きて來る。二振り、三振り、振つて見る

中に、何れ程切れるか試して見たいといふ考も起きて来て、翌晩はコッソリ邸を抜出して試斬に出たのである。

舊幕の時代にはよくあつたことださうだが、慾得を離れて唯刀の切味を試したい爲に、四辻に待伏せをしては、道行く者をバツサリ斬つて、知らぬ顔で歸へるこいふやうなことが、大分流行つたものだといふことだが、斬られた奴こそ災難な譯で、何の罪も科も無く、唯刀の切味を試す爲に、ズバリくゞやられた日には堪つたものでない。此頃の騷擾事件で巡査に斬られたさか、毆られたさかといふやうなことは、大正の聖代なれば議論にもなるが、舊幕時代なら一笑にも値ひしない位のことで、時勢の違ひは言ひながら、實に面白い對照だと思ふ。

毎晩のやうに出掛けては行くが一人も斬れない、治左衛門は元來情深い武士であるから、刀の柄に手を掛けて、道行く奴を熟々睨んで居る中に、惻隱の心が起きて、さうしても刀を抜くことが出来ない。若い者を見れば、若し此儘に斬棄てたならば其親が慍くであらうさか、老人を見れば、嘸孫が哀むことであらうさか、そんなことを考へた日には、逆も辻斬などは出来るものでない、そこで自分はスツカリ辻斬を断念してしまはうとは思ふが、腰の刀が承知しない之を見るに付けても切味を試したいといふ氣は起きて来るのだ。そこで或晩のこゝ、愈々決心の上、今宵こそは心を鬼にして、此一刀の切味を試めさうといふ覺悟で、密に邸を脱出した。

彼處の四辻、此處の往來に、密に其機會を覗つて居たが、さうしても氣咎めがして手を下さることが出来ないで、頻に場所を移しながらやつて来た。何處をさう廻つて来たのか、到頭外神田へ出て、聖堂坂へ掛かつた。今ではそれ程のこゝもないが、昔はなかく樹木の鬱蒼として、晝も猶暗いといふ位に生ひ繁つて居て、ダラ／＼上ほりの聖堂坂は、一方に御茶の水の掘割を控へて、餘り夜などは氣味の好い所ではなかつた、土塀に沿ふた大きな立樹の蔭に潜んで、治左衛門は一人熟々考へた、さうして自分は斯んなに氣が弱いのか、今宵こそは愈々試して見なければならぬが、成るべくは町人でなく、然るべき武士に出會ひたいものだ、彼は考へて居る所へ、坂の上から小田原提灯を下けて、短い刀を一本差した老人が下りて来る。治左衛門は遙に之を見て、年こそ老つて居るやうだが、一本差して居る以上は武士に違ひない、町人に違つて武士を斬るなら差支ない、獨り首肯して待受ける。武士だから暗撃をしても宜いといふ理窟はあるまいが、治左衛門は斯う考へて待受けたのだ。斯んな所へ通り合はした者は、實に災難な次第である。

彼是して居る所へ、通り掛かつた武士は、斯んな恐しい奴が隠れて居るこゝは、神ならぬ身の少しも知らず、今通り過ぎようとした途端に「ヤツ」に掛けた氣合と共に電光一閃、老人は二つになつたかと思ひの外、「エイッ」に氣合が入るこゝ右へ飛んだ。治左衛門が氣を入れて拔討に

した刀は空を撃つた、失策たと思ふて取直さうとした途端に、飛込んで来た其老人の早さ、刀持つ治左衛門の手首を押へたかと思ふに、前へ引かれた。力を入れて治左衛門が振放さうとした呼吸を計つて、大地に投げ付けた手練は、實に敏捷いものであつた。治左衛門が起上がらうとする所へ、馬乗りになつてギユツと締付けた力の強さ、流石の治左衛門も、跳返へすこゝが出来なかつた。

「其方は何者ぢや、聲も掛けずに暗討は卑怯にも程のあつたものぢや、遺趣か遺恨か強盗か、斯く相成つたる以上は、最早遁れぬ所ぢや、有體に申せ」

今は治左衛門も絶體絶命、もう逆も及ばぬ所を觀念めて、組伏せられながら、

「イヤ何ともして恐入りました、御手向ひは仕りませぬ、其處御放し下さい」

「ウム、手向ひはせぬか」

「如何にも」

「諾」

靜に立上がった老人は、塵を拂ふて後へ退いた。流石に身の構へに隙は無い。治左衛門も塵を拂ふて起上つたが、纏て大地に兩手を突いて、

「斯く相成りまする以上は、最早御手向ひは仕りませぬ、如何やうにも御隨意になされませ」

こいふ様子を熱々見て居た老人は、

「見受ける所、まだ年齢も若いやうぢやが、最前斬掛けた時の手の内の冴えこいひ、一角の武夫であらうが、何こいふ不心得なこゝを致すのぢや、さういふ事情で斬掛けたのか、其仔細を語りなさい」

「別に仔細してはございませぬ、此頃需めました新身の一刃、其切味の程を試したさに……」

「ウム、諸は試斬か」

「御意にござります」

「ハツハ、ハ、ハ、それは飛だ心得違ひぢや、如何に干將莫耶の劍は持て居ても、其心掛けては何の役もなすまい、別に遺趣遺恨は無く試斬こいふのでは、一時の出来心に相違あるまい、深くは咎めぬから其儘歸らつしやい」

此意外の言葉には治左衛門も驚いて、

「然らば是までの無禮は、御免し下さるご仰せられまするか」

「如何にも、一旦の心得違ひ、今後を戒めるこいふならば、強ひては咎めぬ」

「恐入りましたる御言葉、就きましては尊公の御名前は何ご仰せられまするか」

「問はれて名乗る程の名前でもないが、ツイ此先の於玉ヶ池に、道場を構へて居る千葉周作ぢ

「エツ千葉先生に仰せられますか」

「如何にも」

之には治左衛門も惘れ返つた、毎晩のやうに出掛けて、何時も心に後が来て空しく歸つて、今夜は愈々覺悟して斬つて掛ければ、江戸中で一番強い奴に掛かつたのだから、こても敵ふ譯は無い。

「偕ては先生が豫て噂に承りました、千葉の大先生でござりまするか、私姓名の義は……」

「イヤ、それを聞くことは止さう、今宵は此儘に別れることに致さう」

と言ひ棄て、其儘立上がった周作は、昌平橋の方へ悠々行く、闇の中に周作の姿の見えなくなるまで見送つて居た治左衛門は、唯敬服するの外は無かつた。

其頃江戸に於ての劍客としては千葉周作、桃井俊藏、齋藤彌九郎の三人を以て、先づ第一にしてあつたのだ。江戸で三傑であるから日本の三傑に違ひない、其中でも於玉ヶ池の千葉は、一番に評判が高く、二代目の榮次郎も強かつたが、初代の周作の如きは、實に鬼神と言はれた程である、聖堂坂に暗討のこゝがあつてから、一日経つて、

「ハッ先生、申上げます」

「何ぢや」

「是非大先生にお目にかゝりたいといふて、薩藩士有村治左衛門に申します者が控へて居りますが、如何いたしませうか」

「ウム、左様か、是へ通しなさい」

「ハッ」

聽て案内者に連れられて、治左衛門は周作の前に出た。聖堂坂の一條から治左衛門は深く考へて、千葉を訪ねて来たのである。

「拙者は最前御取次まで申出でましたる、薩藩士有村治左衛門に申します者でござるが、先生は……」

「言はせもあへず、周作は、」

「オー、此頃は途中で失禮致した」

「エツ途中で……」

「もう御忘れか、聖堂坂の闇仕合、御手の内は感心いたしましたよ、ハッハ、ハ、ハ、ハ、」

「さては先生、御承知でござりまするか」

『あれだけの押問答をして別れた今日、お手前さ、いふことが分らぬやうでは、此道場の主人にはなれぬ』

『左様御承知の以上は止むこゝを得ませぬ、今改めて申し上げますが、彼の夜の狼藉者は私でございます』

『先夜のごみが残念であるから、もう一度仕合ひをしようといふのか』

『イエ、さう致して……、決して左様な譯ではございませぬ、邸へ歸つて熟々考へました所、全く自分の不心得から、あのやうなごみを致しまして、それを御咎めも無く、御免し下された先生の宏量には、唯恐入るの外はござりませぬ、此以上先夜の罪は御免し下されて、門人の中に御加へ下さらば千萬辱なく存じまするが、如何でござりませうか』

『フ、ム、門人になりたい』

『左様』

『イヤ、それは感心な心掛けぢや、宜しい、御引受け致さう』

『さては御承知下さりますか』

『それにしても良い腕前、氣合も共に斬掛けた時の早さは、俺なればこそ脱すごも出来たが大概な者は一刀兩断ぢや』

寝められる程、治左衛門は體裁が悪い、そんなに手腕がえらいのなら眞ツ二つになりさうなものだが、投付けられた上に吐言まで言はれたのだから、何もなく面目ないやうな氣もする。

『併しお手前の膽玉の太いには恐入つたよ』

『ハ、ハ、膽玉が太いさ仰せられまするか』

『あの時投けて押へ付けたが、スツカリ膽玉の太いごは、其時に分つたのぢや』

『さういふ所から御分りになりましたか』

『あの投付けて上から押へた時に、俺の右手が、お手前の陰囊へ掛かつたのは御承知か』

『エツ陰囊へ、フーム』

治左衛門は益々呆れた、あの咄嗟の間に、そんなごの出来る筈は無い、又握られれば分らなければならぬのだが、自分には少しも覺えがなかつた。

『大概な者は驚けば縮むが、お手前のはダラミして居つたから、それで膽の太いのは分つたよ、ハツハ、ハ、ハ、』

是だけの違ひがあつたのでは、十人一束になつても千葉に敵ふ譯は無い。治左衛門は益々恐入つて、遂に千葉の門人になり、是から本式に修業をしたのだ。元來が十分に出来て居た所へ周作が身を入れて教へたから、忽ち免許を得て、道場を開くごになつたのである。

此治左衛門が麻布の十番に、道場を開いて居た所へ、繁々出入したのが水戸の浪士で、殊に高橋多一郎と金子孫次郎の二人が、最も親しく交つて居た關係から、櫻田事件の仲間入をするこゝになつたのである。

(下)

井伊大老は偉人といふ程の人ではない、乍併、當時の諸侯の中では、見識を有つた人であつた、といふこゝだけは疑ひが無い。開國條約に調印したこゝを以て、直に開國論者であつたといふこゝは言へないのだが、兎に角苦し紛れにもせよ、開國條約に調印した一事は、開國論者であるといふ辯護の材料にはなる。何れにもせよ普通の大名よりは、伶俐な人であつたといふこゝだけは十分に言へるのだが、其代り又腕に任かせてやり過ぎたといふ瑕もある。現に安政五年の大疑獄を起したこゝは、井伊の一生を通じて、是位の失策は無かつたらう。勤王論を唱へる者が、段々勢力を得て来れば、幕府の運命の危くなるは、自然の條理で致方が無い。それを高壓手段で壓伏けてしまはうとして、彼の大疑獄を起して、一時に百人以上の人を羅織したのみならず、何れも嚴刑に處して、天下の爲に惜むべき人材を多く失ふたこゝは、失政の最も甚しきものであつた。是が爲に幕府の運命をして、益々危き淵に引入れたのである。水戸の

浪士が非常な決心を以て、井伊の音を覗つたのも、其疑獄に深い恨みを懷いたのは勿論、例の繼嗣問題に付いて、水戸家へ辛く當つたこゝや、齊昭に對して峻酷な壓迫を加へたこゝも、水戸の家來を怒らせた原因になつたのである。

齊昭の手に秘せられてあつた密勅を、幕府が水戸家に迫つて、朝廷へ返還させようとした。それに憤激して、常陸の石岡に藩士が澤山集つて、江戸から来る使者を喰止めた、といふこゝが動機となつて、遂々多數の藩士が脱走した。之に就ては幕府でも、非常に心配して十分の警戒は加へたけれど、今のやうに搜索機關が備はつて居なかつたから、心配して騒いだ割合には脱藩士を押へるこゝは出来なかつた。其うちに脱藩士の方では、名を變へ姿を變へて江戸に入込み、彼處此處に密會して段々相談の末が、遂に井伊大老を登城の道に要撃するこゝに決したのである。けれど井伊大老の方にも十分の警戒はあつたのだから、容易に手を下だすこゝは出来ない。縱令其機會があつて手を下だすにしても十人や二十人の小人数を以て、而かも白晝に伊井の共廻りへ切込むこゝは、極めて大膽な所業で、果して其目的を遂げられるか、さうかといふこゝは、流石に危ぶまれたのである。そこで高橋と金子が、有村に秘密を打明けて相談するこゝ、實は有村も井伊大老の處置には、非常な不満を懷いて居て、何時か一度は天誅を加へようとの考へは、あつたのだから有村も非常に喜んで、腕を藉すこゝになつたのだ。

常人に優れた人物、而も時の大老になつた程の人であるから、彼のやうな横死を遂げるに就ても、幾分か其前兆はあつた。尤も政治上の争ひから、横死を遂げた偉い人物には、必ず其災厄に出會ふ前に、何かの徴候はあるものだ。傳へられて居る。遠い昔のことは言ふに及ばず、現に星亨が、伊庭某の卑怯な刃に罹る前にも、色々な徴候のあつたことを、僕は實地に於いて知つて居る、星を深く信する人が、

『ごうも貴下は、世間の攻撃が激しいから、萬一心得違ひの奴があつて、貴下に害を加へるやうなことが起るに困るから、相當の人物を選んで、護衛に附けて置いて貰ひたい』

こいふたら、

『君の好意は辱けないが、併し護衛を附けた所で致方が無からう、若し護衛する者より強い者が出て来れば、何の甲斐も無いのだから、此儘で宜しい』

と言つて、其注意を却けたことがある。それに似寄つたことは澤山あつたが、此一事を以て見ても、幾分か星を知る人の間には、萬一の變を憂ひて居た人はあつたのだ。星自身に於いても其覺悟はあつたであらうが、あれだけの人物であつた星は、斯ういふ立派な答へを以て、護衛などを退けてしまつた。其處に星の値打はあるのだが、兎に角、斯ういふことがあつた。井伊大老の身の上に就ても、それと同じやうなことが屢々あつたのだが、其中に於いて最も興味の

あることを一つ述べて置かう。

萬延元年の二月二十一日に、松平左兵衛督信和といふ人が、井伊家へ御客としてやつて来た。此人は上州矢田の城主で、極く小藩ではあつたけれど、伊井大老と深い交際があつて、井伊の方でも能く其爲人を信じて居たのだ、井伊が面會するに、信和は膝を改めて、

『諸て今日御訪ね致したのは餘の儀でもござらぬが、他日來、貴下に對する世評が、如何にも險しくなつて来て、何時さういふ凶變が起らぬにも限らぬゆゑ、心配の餘り今日は御訪ねを致したのであるが、既に開國條約の調印も済んで、繼嗣の問題も片付いたのであるから、貴下に於ては一時大老職を退いて、閑散の身になられては如何でござるか、左様相成れば貴下に對して、深い恨みを有つて居る者の心も和いで、無謀なことを企てる者も無くなるだらうと思ふが如何でござらうか、』

こ之を聞いて井伊は、

『折角の御忠告ではあるが、今の場合に大老職を退くことは出来ませぬ、縱令開國條約に調印は終つても、まだ朝廷より其御許しが無いのみならず、外夷は追々に迫つて来て、今後のことが心配でならぬ。今暫くは此儘に居て、職を離るゝことは相成りませぬ。』

御決心は然るこみながら、大老職を退いて閑散の身に相成つても天下の御爲に盡すこみは出

あるこみを一つ述べて置かう。

萬延元年の二月二十一日に、松平左兵衛督信和といふ人が、井伊家へ御客としてやつて来た。此人は上州矢田の城主で、極く小藩ではあつたけれど、伊井大老と深い交際があつて、井伊の方でも能く其爲人を信じて居たのだ、井伊が面會するに、信和は膝を改めて、

『諸て今日御訪ね致したのは餘の儀でもござらぬが、他日來、貴下に對する世評が、如何にも險しくなつて来て、何時さういふ凶變が起らぬにも限らぬゆゑ、心配の餘り今日は御訪ねを致したのであるが、既に開國條約の調印も済んで、繼嗣の問題も片付いたのであるから、貴下に於ては一時大老職を退いて、閑散の身になられては如何でござるか、左様相成れば貴下に對して、深い恨みを有つて居る者の心も和いで、無謀なことを企てる者も無くなるだらうと思ふが如何でござらうか、』

こ之を聞いて井伊は、

『折角の御忠告ではあるが、今の場合に大老職を退くことは出来ませぬ、縱令開國條約に調印は終つても、まだ朝廷より其御許しが無いのみならず、外夷は追々に迫つて来て、今後のことが心配でならぬ。今暫くは此儘に居て、職を離るゝことは相成りませぬ。』

御決心は然るこみながら、大老職を退いて閑散の身に相成つても天下の御爲に盡すこみは出

來るのであるから、貴下を附狙ふ者の心を和ける一つの方便にして、御役御免を願ふさいふのは最も上策であらうと考へるが、猶御聽入れ下さらぬか』

『それまでに仰せ下さるは千萬辱けないが、御役御免を願ふ所存はござらぬ』

『キツバリ断られたので、信和は尙膝を進めて、仰せではございますが、それに就ては尙聞き及んだ次第もござれば、一應申述べるに依つて、ごく御聽取りを願ひたい』

『イヤ、其こならば最早承るに及ばぬ、自分の覺悟は天下の御爲に斃れるに決まつて居るのであるから、最早承るに及びませぬ』

彼是押問答をして居るうちに、登城の時刻が迫つた。

『今日は之にて御免蒙る、何れ殿中にて又御目に掛かるこもござらう』

『言ひながら立上がらうとする、井伊の袖を控へて信和は、』

『でもござらうが、今一應拙者の申すこを、御聽取り下さい』

『言ひながら袖をグツミ引く、それを井伊が拂つた途端に、ピリツミ音がして袖の縫付けが綻びた。信和が思はず手を離す、振返りもせず、井伊は奥へ這入つてしまつた。信和は親切を以て諫めたこも遂に仇になつたのみならず、餘りに井伊の強情我慢の強いのに、聊か憫れた』

氣味で茫然して居る所へ、合の襖を開いて出て來たのが、井伊家の公用人富田源兵衛といふ人であつた。信和は靜に富田を顧みて、

『是までに申上げて御聽入れの無い以上は止むこを得ない、自分は立歸へるが、此上も路次の警護は十分御注意を願ひたい』

『言ひ置いて、信和は自邸へ歸つた。』

話變つて水戸の浪士は、愈々正月三日の上巳の節句に井伊が登城する、それを路に擁して討取らうといふ手筈を定めて、二日の夕方から鮫津の川崎屋へ集つて、當日の手筈を定めるこゝにした。其時に集つた連中は

佐藤鐵三郎	森五六郎	森山繁之助	杉山彌一郎
の佐野竹之助	黒澤忠三郎	蓮田市五郎	齋藤監物
廣岡子之太郎	鯉淵要人	山口辰之助	廣木松之助
稻田重藏	増子金八	關鐵之助	高橋多一郎
林忠左衛門	海保嵯峨之助	有村治左衛門	有村雄助
金子孫次郎			

通計二十一人であつたが、此の中に高橋金子は、愈々井伊大老の首級を擧げたのを見届けた

後、江戸を遁れて京都へ上り、朝廷へ斬森の趣意を上奏する役目を引受けたのだ。同じ死ぬるのならば井伊大老に、縦令一太刀でも斬付けて、潔く死ぬのは誰しも望む所である。唯徒に暴民の扱ひをされて、何の爲に井伊大老を斃したかといふ趣意が明にならないのは、如何にも遺憾千萬であるから、誰にもせよ京都へ上つて朝廷へ其旨を申上ることが必要だといふことになつたけれど、何れも斬込む方へは行きたがるが、奏聞方は引受人が無い、そこで止むことを得ず、高橋三金子が引受けることになつて、別に有村雄助と佐藤鐵三郎が附添ふことに決したのだ。

それから斬込みの順序は、井伊大老の行列が、櫻田見附へ掛かつた時に、先づ有村治左衛門が先供の中へ躍込んで、例の飾槍を奪ひ取つて暴れる。其左右には増子金八、廣木松之助、黒澤忠三郎の三人が附添ふて、有村に掛かつて来る者を斬倒す役目だ。是が爲めに供廻りが亂れる、其隙に乗じて杉山彌一郎が、斬込み訴訟をするやうに見せ掛けて、轡脇へ突進する。それを支へる井伊の家臣を、附添ひの稻田重藏が防ぐ。混雜の隙に乗じて、杉山が轡の中に一發撃込むのを合圖に四方に隠れて居る者が一遍に斬込む、さういふ手順に決めたのであるが、其時に佐野竹之助の咏んだ歌は

あら樂し思ひは晴れて數島の

大和の道の開き初めけん

有村兄弟が故郷の母へ送つた、書面の末に認めた歌に、

大君の憂き御心を安めすは

再び國に歸らさらめや

(雄助)

岩かねも碎かさらめや武夫の

國の爲に思ひ切る太刀

(治左衛門)

其他の人も、それ／＼詩や歌に其志は表して居るが、兎に角、一同の決心は實に偉いものであつた。

萬延元年の三月三日、前の日から降出した雪は一層激しく、咫尺を辨せざる程の大降になつて、歩行にさへ困る程であつたのは、斬込む方の人には、さ程程の便宜であつたか知れない。其うちに井伊大老の行列が、櫻田見附の外までやつて来た、豫て待受けた浪士連は、前に述べたやうな手順で、先づ有村が斬込む、それから一同が切尖揃へて斬込んだから、俄に行列が亂れ立つた、井伊の家來にも、それ／＼腕利きはあつたけれど、何しろ不意を討たれた爲に、右往左往になつて斬崩されたが、唯轡脇を守つて居た、川西忠左衛門が二刀の達人で、頻に奮闘して居たので、佐野竹之助首め井伊の首級を擧げる役になつた連中が、非常に喜んで居る。

所へ有村が、散々先供を荒した勢で駈付けて来て、川西を斬倒したから、到頭井伊の首級は、佐野の手に這入つたのである。

斬合ひの状況は大概なこゝにして、其後始末に就てのこゝを述べやう。佐野は井伊大老の首を取るに、直に之を有村に渡したから、有村は大刀の切先に貫いて、辰の口の方へ駈けて行く其時に重傷を負ふて倒れて居た、大河原秀之丞といふ井伊の家來が、有村の後から聲を掛けずに斬付けた、後頭部から肩先へ掛けてザツクリ割込まれたので、流石の有村も此重傷には堪らない。後を振り返つて見るに、全身朱に染んだ大河原が、一太刀斬付けて前に倒れて、更に起上からうこする所であつたら、それを一步踏込んで有村が、一刀に斬付けたので、憐れ大河原の息は絶えた、乍併、有村も此重傷に堪らず、辰の口で立腹を切つてしまつた。

此有村が立腹を切つた所が、若年寄遠藤但馬守の邸前であつた。平生から憎まれて居る井伊が殺されたのであるから、加勢に出る者は一人も無い。遠藤の邸でも門を閉ちて長屋の窓から其斬合ひの様を見て居た。所へ血だらけになつた武士が駈て来て、立腹を切つて倒れたから遠藤の家來が密に出て見るに、井伊大老の首が轉がつて居たので、其儘門内へ持込んで、重役の手許へ届けた。騒動が一先づ鎮つて井伊家の方では、主人の首が無いから大騒ぎになつた。遠藤の邸に其首があるといふこゝを聴出して、直ぐ三浦清三横川又太郎の二人が、遠藤家へ談

判に行つたが、遠藤の家來は色々皮肉なこゝを言ふて、なかく渡して呉れない。三浦三横川も、まさか主人の首を呉れぬと言へないから、家來の首を稱して受取らうとするので、なかくに渡さないのだ。それも散々押合つた末に、到頭賞ひ受けて漸く引取つて来る、こゝいふやうな譯で、是が爲に井伊の邸は、上を下への混雑、是こゝいふのも水戸藩士の所業であるから、水戸家へ押掛けて一戦争しよう、こゝいふこゝになつた。幕府の憲法としては、苟も諸侯が途上に於いて、斯やうな災難に遭ふて横死を遂げるに、無論其家は潰されるのであるから、さうせ潰されるものなれば、水戸家へ斬込んで共潰にならうといふ覺悟で、それ／＼斬込みの仕度に掛かつたのだ、所が水戸家の方でも、井伊家から斬込んで来るこゝいふので、可矣さういふ譯ならば對手になつてやらうと、是も仕度をして待構へる。若しそれを其儘にして置いたならば、將軍の御膝下に於いて、太い騒動が起るのだ。一方は家康公以來、深い關係のある井伊家であるし、又た一方は御三家筆頭の水戸家であるから、何方を潰すこゝいふこゝも出来ない。此時の老中方の苦心は一通りでなかつた。然るに老中のうちに安藤對馬守といふ傑物があつて、此こゝの始末を引受けるこゝになつた。安藤は磐城平で五萬石ばかりの小さな大名ではあつたけれど、なかく偉い人物で、井伊に拔擢されて老中格に昇つて居たのであるが、他の關老も一切を安藤に委せるこゝになつたから、安藤は直に彦根の藩邸へやつて来た。

井伊家に於いては、老中の對馬守がやつて来るに聞いて、幕府の憲法に依つて家は取潰されるものにして、重役の連中も、恐れ返つて對馬守の前へ出た。

「諸て今日は意外の凶變で、彦根侯にも御負傷をなされたといふことは承つて居るが、御生命に別條がなくて、此上の仕合せはござらぬ」
「挨拶をされたから、重役も怪訝な顔をして、直に何と答ふべき言葉も出なかつた。然るに安藤は尙言葉を續けて」

「而て、其後の御容體は如何でござるか」

「言はれて、初て重役も氣が付いた。諸ては老中方に於ても、當家に瑕を付けまいこの考から既に横死を遂げた主人に對して、是までの好意を有つて呉れるのであるか、嬉し涙と共に、」
「態々の御見舞ひに預つて、何とも恐縮に存じます。主人掃部頭儀、多少の負傷は致しましたれど、幸にして御生命には別條は無く、唯今療治中にござりますれば、追而登城の上御挨拶を申上げます」

「左様承つて、拙者も安心いたしたが、一應は御見舞ひを申上げた、彦根侯にも一言申述べたく存する故、御案内を願ひたい」
斯う言はれて見るに、重役も聊か閉口したのは、首を胸に離れて居る主人の前へ、對馬守を平

氣で案内することも出来ない。けれども對馬守は、頻に案内を促すので、據所なく死んで居る主人の前へ案内した、所が對馬守は、生きて居る人に話する通り、平然した顔で、
「今日の凶變にて飛だ御災難、此上にも十分に御療養の上、一日も早く登城下さるやう祈り上ける」

「挨拶をして、其儘引取つてしまつた。」

茲に於て井伊家の重役は、直に若殿の家督相續願を出したので、幕府は即刻之を許した、其後に掃部頭の病死届を出して、事は圓滿に治つた。斯くて井伊家にも瑕が付かぬことになつたのであるから、水戸家へ斬込んで共潰れにならう杯、馬鹿騒ぎをする者も無く、事は穩に済んでしまつたのである。

斯ういふ事情で、井伊家は存続することになつた、今日まで立派に井伊の家が遺つたのは、全く對馬守の盡力であつた。

梅田雲濱

(一)

雲濱の名は、劍舞の詩に、妻臥病床 兒泣飢いふのがある爲に、其詩を作つた人にして

却々に有名になつて居るが、雲濱の爲人が、果して何ういふ人物であつたかといふことになると、知る人は少ないのである、あの詩に依つて劍舞をする人に聽いて見ても、其詩に付てのことだけは臆氣に説明も出来やうが、詳しいことになつては、更に分らないのが十人に九人までは先づ左様である。安政戊午の大獄に連座して、無慘の最期を遂げた、多くの志士のうちに於て梅田は最も優れたる人物として、長く後世に傳へらるべき筈ではあるが、一般の人の餘り深く知られて居ないのは、甚だ遺憾である。茲に其爲人の一斑を説くことにしよう。

雲濱の父は、若州小濱の酒井若狹守の家臣で、矢部岩十郎といふた人である。雲濱は其次男に生れて幼名は源次郎といふた。文化三年の十月の出生で、兄弟は五人であつた。父の岩十郎は、同じ家中の者、些な事の争ひが因になつて、遂に決闘の結果、敵方を斬倒して行方を晦ましてしまつた。源次郎は其前に、同家中の元は大目付まで勤めた、梅田といふ家へ貰はれて相續人になつて居たのである。既に雲濱が養子に行つた時分には、梅田家も非常に衰へて、其日の生活にも困る位であつたが、雲濱の祖父が梅田家から、矢部家へ養子に來た因縁があるので今度は梅田の方から養子を送つたのだ。源次郎は天生の美男で、其の風采からいへば、貴公子の面影があつたけれど、氣象は非常に荒々しく、子供の時分から堂々たる大人に對して、平氣で喧嘩をし掛けるといつたやうな風があつた。文政二年といふから、雲濱が十四歳の時である

小濱の城下外に、將軍塚の一本松といふのがあつて、其傳説には、此一本松は所謂靈木であるから、若し此松に對して不淨の仕向けをする者があれば、神罰が當るといふて、非常に恐れて居たものだ。それを雲濱は、態々松の木に上つて、其上から往來に向つて小便をした。其邊を通り掛かつた者が驚いて、此事を言ひ觸らしたから、忽ちに評判になつて、

「親の岩十郎は、人を殺して夜逃をする、伴の源次郎は一本松の上から小便を垂れる、さうせ矢部の家も又梅田の家も、末は碌なことにはなるまい」

といつて、様々に取沙汰をする。流石に母のよし子は氣丈な女ではあつたけれど、源次郎の悪戯が餘りに激しいのを憂ひて、

「お前は、將軍塚の一本松に小水を掛けたさうだが、何故さういふ悪いことをするのですか、あの松には神様の靈が籠つて居て、土地の人を守つて下さるやうになつて居るのに、何ういふ譯で、さういふ所業をし向けるのですか」

之を聽いた源次郎は、微笑を漏し乍ら、
「是は母上の仰せも心得ませぬ、若しあの一本松に神靈が宿つて居りますならば、私の小水を掛けたことは喜んで居るに違ひない、それが悪いのなら、若し誤つて左様なことをした者があつた時に、何ういふことになるでせうか、路傍にある將軍塚の一本松、土地の人

こそ其傳説は知つても居りませうが、旅を掛けて来た他國の人が何でさういふ傳説を知つて居りませう、若しさういふ人が誤つて小水をし掛けた時分に、神罰が當るゝしたならば、此位不都合な神様はないので、元が松の木のことであるから、假に神靈が宿つて居るにしても其神靈に汚れたことをするのでないから、更に差支はないと思ひます」

斯ういふ理窟詰めで、母のよし子に答へた。逆も十四や十五の子供は思へない位であつた。或日のこと、藩に於ては槍の達人として、第一に數へられて居た、木下治郎兵衛といふ人が突然訪ねて来た。此人は神名を關魔といはれた位で、恐しい顔をして居たので、大概な者は恐れて近付かなかつた。併し、武藝に於ては藩中屈指の人物であるから、藩士の間では却々重きをなして居たのだ。よし子は豫て相識の間柄であるから、木下を迎へて座敷に通した。其後の挨拶も済んで、木下は、

「今日御訪ね致したのは餘の儀でもござらぬが、實は梅田家へ養子に御遣しになつた、源次郎殿の一身に付てござるが、世間では彼は悪い風評も立て、居る様であるが、拙者の見る所では、普通の少年は思へぬばかりでなく、確に前途に望のある少年を見込んで御相談に来たのぢやが、當分の中拙者に、御預け下さることは出来まいか」

此相談には、よし子も意外の感はあつたが、併し昨今の源次郎が、其悪戯の普通でなく、何時

か養家へ迷惑を掛けるやうなことがあつてはならぬ、さういふ心配もあつた折柄であるから、實は木下の相談は渡りに船と喜んで、よし子は應ずる考にはなつたけれど、今は梅田家へ養子にやつてあるので、自分の一存で取決めることは出来ない。そこで木下に向つては、

「其思召は洵に有難いことでございますが、何分にも梅田家へ養子に遣してあります源次郎のと故、一應は養家の親戚にも相談の上で、何分の御返辭は申しますが、大概は強ひても御願ひを致す所存でございますから、其邊は宜しく御含み置きを願ひ上げます」

「其仰せは如何にも御道理ぢや、何れ御挨拶のあるまでは御待受けをするが、若し梅田家の御親戚に於て、彼是御異存がある時は、一應御知らせ下さい、拙者から然るべく御相談を致すことに致さう」

斯ういふ相談で、木下は歸つて行つた。それからよし子が、段々梅田家へ相談に及ぶと、是も亦養子に貰つたには違ひないが、實は其悪戯が一通りでないで、持餘して居た所だ。關魔の治郎兵衛が引受けて呉れれば、此上もないことであるから、寧ろ任せてしまつた方が宜しいふことに相談が一決して、よし子の方へ答へて来たから、そこで木下を訪ねて、源次郎を任せることにしたのである。

(三)

源次郎は木下に引取られて、是から内弟子として、文武の二道を仕込まれることになった。悪戯は一通りでないが、氣象は大人にも勝つて居るので、木下も頗る望を囑して、一心になつて仕込んだが、其記憶の良いのこ上達の早いのは、流石の木下も驚く程であつた。斯うなるを、教へる方にも張合が出るから、益々氣を入れて仕込む。教へられる方は、従つてそれに引かれるやうになるから、猶更奮發をする。記憶の良い者が一生懸命に稽古をして、仕込む人が良い人であるから、是ならば申分のあるべき筈はない、源次郎の上達は、人の評判にも上るやうになつた。

木下の門に學ぶこと二年、源次郎の齡は十六歳になつた春のこと、例年に比べては寒氣も一段と激しく、數日打續いた雪は、積り積つて軒を蔽ふばかり、大概な家は、二階や天窓から出入をするほどであつた。冬籠りには寒國の常として、悪い遊びが流行るけれど、木下の家塾に限つては左様なこともなく、相變らず武藝の稽古や、兵學の教授で賑つて居る。夜に入つて通ひの門人は皆歸つてしまつて、残るは内弟子ばかりになつた。源次郎は相變らず木下の前に出て、色々其教へを受けて居た。時に木下が、

『大分雪も積つて、寒氣も例年よりは厳しいやうぢやが、今宵は往來も淋しいことであらう』
 『左様で御座ます、もう日が暮れては人通りはござりませぬ』
 木下は急に思付いたやうに膝を打ち乍ら、
 『オー、面白いことがある』

『何でござりますか』

『此城下外れの唐崎の松原に、女盜賊の首が曝されてあつた筈ぢや』

『ハイ、まだござりますか』

『何うぢや源次郎、あの女賊の左の耳を殺いで、持つて来ることは出来ぬか』
 大概な者なら驚くのだが、源次郎は済した顔で、

『先生』

『何ぢや』

『女盜賊の耳は、何かの藥になるのでござりますか』

意外な奇問に、木下も聊か狼狽して、

『イヤ、別に藥にはなるまいが、曝首の耳を取つて来る位の度胸がなければ、何事に付ても武士らしい行動は出来ぬものぢや』

「何ぞ仰せられます、曝されてある首の耳を殺いで来れば、武士一人前と看做されるこゝが出来るのでござりますか」

「左様ぢや」

「左様なこゝなら何でもござりませぬ、一寸行つて持つて参りませうか」
 戯談のやうに言つて退けた、源次郎の一言には、木下も頼母しく思つた。

「ウム、貴様行つて来るか」

「参りますとも、生きて居る人の耳では、動くから斬り難いでせうが、曝されて居る首なら、
 對手が動かないから、尙斬り易いと思ひます」

理窟はそれに違ひないが、普通の者には、其耳を殺いで来るのが難しいのである。それを源次郎は事も無げに言ふて、是から出掛けやういふのだから、木下も大分興が乗つて来て、

「ウム、それでは一寸行つて来い」

是から源次郎は外へ出た。夜はまだ更けたまい程ではないけれど、雪の爲に往來は途絶えて今までに降つた雪は、恰で石のやうに凍つて居る。豫て乗り慣れて居る竹馬に乗つて、是から唐崎の松原へ、女盗賊の耳を殺ぐべく出掛けたのである。

源次郎の平生から考へれば、此位なこゝは出来さうにも思はれるが、併し、其處は子供のこゝ

こであるから人前だけに威張つて、サアやつて見ろこなつたら、遠巡けるかと思つて試みた木下は、案外にも源次郎が、平氣で引受けて出て行つたから、之には聊か憫れた位であつた。暫くするに、源次郎は歸つて来た。木下の前に、紙へ載せた耳を出して、

「サア先生御覽下さい、女盗賊の耳も、矢張り眞人間の耳と同じでござりまする」

こ言ひ乍ら差出したのを見て、木下は心から感じた。

「やっこりや耳が二つある」

「初め間違へて右を斬りました、途中まで来て思付きましたから、また引返して左を斬つて来ました」

「フム」

源次郎が出て行く時に、木下は自分の差して居た刀を貸し與へたのだが、今此源次郎の大膽な態度を見ては、深く感心して了つた、

「お前の差料に、其刀は遣すから大切に下さい」

「エッ、それでは此刀は先生から私へ下さりますのですか」

「ウム、左様ぢや」

「有難う存じまする」

是が有名な闇魔丸、即ち關兼重の鍛へた名刀で、木下が持つて居た爲に自分の綽名を、其儘に闇魔丸と名付けたのである。源次郎が安政五年の疑獄に連座して、小笠原家へ預けられた時、死ぬまで持つて居たのが、即ち此名刀であつた。

何事も斯ういふ調子で、木下の豫期した以上に、智慧もあれば度胸もあり、且つ物覚えが良いいいふのだから、木下も非常に乗氣になつて、源次郎が他の子であるにも拘らず、木下は矢部と梅田の兩家に交渉して、文政四年の秋、源次郎を江戸表へ修業に遣すことに決めた。路銀として與へられた四兩の金を懐に、源次郎は道中格別の支障もなく、早くも江戸の藩邸に到着するに、自分の叔父に當る、矢部萬藏といふ者の家に寄宿して、藩の儒者で、其頃有名な山口菅山に就て修業を始めた。劍術や柔術は言ふまでもないが、先づ學問の修業に力を入れたのである。僅に一年餘りにして、左傳通鑑を讀破して、諸子百家の書に通じ、藩中の評判は非常なものになつて來た。此様子を見て、叔父の萬藏は、自分に男の子の無いのを幸ひ、或日源次郎を呼んで、

「儲て、お前の身に付ては俺も是までに心配して、修業をさせて居るのぢやが、俺の家には相續人さすべき男の子がない、お前と俺とは叔甥の間柄であるから、丁度似合の縁組と思つて相談をするが、何うちや俺の家に養子になつて、家を相續して呉れることは出来まいか」

不意の相談に源次郎は、暫く考へて居たが、聽て叔父に向つて、

「折角の思召ではありまするが、私は矢部の家に生れて、今は梅田家の養子になつて居るのでありますから、今更に叔父様の許へ、養子になることは出来ませぬ身の上でござりまする」

「イヤ、それに付ての心配はない、梅田家へは俺の方から談判をして、お前を矢部家へ取戻した上、更に母のよしにも話をして、其上で俺の養子にするのだから、さういふことは一切俺に任かせて置なさい」

「其仰せは如何にも有難いことではありますが、一旦梅田家へ養子に參りました者が、理由なく養家を破縁するといふのは、洵に養家へ對して不信の行爲と思ひまする、此事は平に御免を願ひたいのです」

「お前は、さういふことを言ふが、現在の叔父が相續人が無くて困つて居るのに、梅田家はかりを大切に思ふて、叔父の家を相續せぬのは不都合ではないか」

「それ程に思召して下さりまするならば、弟や妹もあることありますから、母に御相談の上、私の弟を御貰ひ下さるやうに願ひたい」

「左様なことはお前が指圖するには及ばぬ、私はお前を養子にしようといふのぢや。何でも子供でさへあれば、宜いといふ譯ではない」

「然らば、私としては平に御断りをする外はござりませぬ」
 「何ぢや、断りを言ふこか」
 「左様でござります」

「怪しからんこを申すな、此思知らず奴が」

「言ひ乍ら、傍にあつた湯呑を疊に叩き付けた。無論のこも、威喝にしたのではあらうけれど、源次郎の身に取つて見るこ、甚だ叔父の振舞が面白くなく感じた。殊に武士もあらう者が、斯ういふ相談が思ふやうに調はぬからいふて、座にあるものを投打をするこは、何ごいふ情ない人であるかと思ふこ、もう叔父の顔を見るさへ厭になつてしまつた。其日のこも程好くして濟ませて、自分の部屋へ戻つたが、何しろ叔父の家に寄宿して居る身の、朝夕に顔を合せるのだから、此事があつてから以來の源次郎は、何ごなく居難くなつたのみならず、叔父の萬藏は、恰で出て行けがしの扱ひをする。そこで自分も、他の家に移つて江戸に止まるのは却て目上の叔父に反抗するやうになつて宜しくないといふ考から、故郷の小濱を指して立歸るこになつたのである。」

源次郎が歸る前に、萬藏から母のよし子の方へは、何か嚴重な談判があつたのだ。恰度、源次郎が立歸つた時に、母のよし子は重病に罹かつて居た。其上に萬藏からの書面で、氣を痛め

たものこ見えて、源次郎の顔を見るこ、もう涙が先に立つて、何も言ふこが出来ない程であつた。若し此事情を細々こ物語つて、それが爲に母の病氣に觸つてはならぬと思つたから、成るべくは此話は避けて言はぬやうにして居たが、母の病氣は日増に重くなつて、介抱の効もななく、遂に此世を去るこになつた。其際に書き遣した書面の中に、叔父の萬藏と源次郎の間のこも書いてあつて、それが病氣の重くなつた原因のやうにも思はれたから、流石に源次郎は男泣きに泣いて、別の部屋に退つて腹を切らうこした。それを姉が見付けて、刀を持つ手に纏つて、段々の意見、

「母上が色々こ御苦心なされたのは今更に言ふまでもないが、今此事でお前が自殺するやうなこもがあつては、猶更に母の志にも反くこにならう、又あゝいふこで國越えをなされた、父上の行方も捜さずに、此儘に棄て、置くのは、亡き母に對して一層の不孝であるからお前がそれ程に母のこを思ふて呉れるのなら、何うか父上の行方を捜して、今日の矢部家の様を物語つて貰ひたい、是が何よりの孝道であらう」

「懇々こ説いた姉の意見に従ふて、是から源次郎は父の岩十郎を索ねる爲に、再び小濱を離れる覺悟になつた。彼是する中に三七日の供養も濟んで、もう差支がないこなつたから、知己や親戚にはそれこ言はず、或夜のこも、姉から貰ふた二朱の路用を懐に、飄然こして小濱を立

つて、是から確な目的はないのだけれど、京都へ乗込んで来た。

(三)

其頃、京都の薩邸に留守居役を勤めて居た、山田市郎右衛門といふ傑物があつた。此人は嘉永年間の島津家の御家騒動、即ち齊彬と久光の相續争ひに付て、齊彬の味方をした正義黨の一人で、遂に藩主齊興の機嫌に觸れて、切腹はしてしまつたけれど、却々の人物であつた。曾て島津家中興の先祖の木像が、紀州の高野山に預けてあつて、それが爲に年々島津家では、先祖の祀をするのに、高野山まで人を特派して行つて居たので、之に付いて費す金は却々に莫大なものであつた。加之高野山の方では、何かに付けて寄進を求めて来る。其煩にも堪へないやうになつて、島津家では色々相談を遂げたが、何分にも先祖の木像が預けてあつては、高野山との關係を絶つことも出来ず、豈夫に薩日隔三國の領主たる島津家が、寄進の金のこみに付て彼是故障がましいこを言ふたに、世間の人に知られても餘り面目の好いこではないから、成べくは此木像を取返して、高野山との關係を絶たうといふこは、殆ど島津家の宿題になつて居たのだ、山田が京都の留守居になつてから、又もや此問題が持上つて、山田が島津家の代表者として、高野山へ乗込んで、木像取戻しの談判に及んだ。無論それには少なからぬ金を寄

進するといふこも、條件にはなつて居たのであるけれど、高野山の方で見て見れば、年々歳歳の供養の度毎に、多くの納金をして貰ふさか、或は事毎に島津家の寄進を待つといふ方が、却て高野山の爲には都合が好いといふ、勘定づくから割出して、容易に木像を返すこを承知しないのみならず、果ては木像は何うしたか、俄に紛失して今見當らぬといふ、不當な申條であつた。そこで段々嚴重の談判に及ぶに、全く盜難にでも遭つたものか、木像を置いた所が破れて、何處にもなく持去られたといふのであるから、談判も斯うなつてはもう仕様がなから鹿兒島の方へ此旨を申送つた。島津家でも大騒動になつて、それらの役目の者を選んで、高野山へ實地見分に送るやら、坊主の方へ談判を始めるやら、擦つた揉んだの騒動を、殆ど二年餘り續けたけれど、結局要領を得ずに、先祖の木像は何處へ行つたか分らぬこになつた。そこで島津家は行掛かりの感情から、何うしても其木像を捜し出さなければならぬ、といふこになつて、山田へ此係を命じたのである。山田は實に迷惑なこだと思つたが、他の事とも違ふから、辭退をすることは出来ぬ。其役目を引受けて、是から山田は、普通の町人と同じやうな風態になつて、高野山へ乗込んで来て、或時は豆腐屋の若者となり、又或時は肥汲みとなり、様々に變装して、高野山の各房へ入込んで、頻に探偵を遂げた。是も殆ど幾年の長きに亘つての苦勞であつたが、遂に其木像は、正に奥院の或一室に隠してあるこを聞き出して、

それから山田は京都へ歸つて、薩摩の方の指揮を仰ぐことになつた。愈々正面から談判をする
 ことになつて、山田が今までとは打つて變つた、薩藩の使者として、高野山へ乗込んで来て、
 坊主等を集めて、談判になつた時、初て自分が今までに苦心をして、漸く木像の所在を知つた
 といふ話をして、愈々其場所を見せて呉れといふ手詰の談判になつたので、坊主等も閉口して
 遂に其木像を山田へ引渡したのみならず、此事を公の沙汰にされては、高野山の興廢に拘るの
 で、それだけは山田の慈悲に訴へて、秘密にして貰ふことになつた。此事があつてから、山田
 が薩邸に於ける信用は、非常に深いことになつたのである。
 源次郎の父岩十郎は、若州を立退いて京都へ這入り、是も町人の姿になつて、殆ど日雇とい
 つたやうな身分になつて居たのだ。それが不圖したことから、山田の知る所になつて、薩邸へ
 雇ひ入れられたが、或時、山田から其身の上について色々尋ねられたので、山田の爲人も多少は
 知つて居る岩十郎が、少しも包み隠さず、今までの身の成行を物語つた。山田は非常に同情し
 てさういふ譯ならば當邸の抱へ待として、當分の中身を隠して居たら宜からうといふことにな
 つて、岩十郎は一時雇の下僕から一足飛びに武士になつて、薩邸の用事を達すことになつた。
 偕て、源次郎は京都へ乗込んで来て、是から何處かといふ目的もなく、父の岩十郎を索ねて廻つ
 て居たが、意外にも三條通りの往來で出會つた其人は、確に父の岩十郎を見て取つて、直に跡

を追掛けて、

「貴下は、父上では御座りませぬか」突然に尋ね掛けられて、岩十郎は頗る面喰つたが、熱々
 見れば幼顔に覺えのある伴の源次郎であるから、流石に親子の情にて、

「オー、貴様は源次郎であつたか」

「僕は父上でございしましたか」

と、互に抱き合ふて、暫くは涙に暮れる程であつた。それから薩邸へ連れて歸つて、其後の小
 濱の様子を聞き、染々矢部家の不幸を哀むやうな譯で、改めて山田へ源次郎を紹介して、是
 から源次郎は薩邸に居ることになつて、岩十郎から天真真揚流の柔術を學ぶことになつた。岩
 十郎は擊劍も薩邸であつたが、殊に柔術は最も達人であつたから、源次郎の腕は着々上達する。
 殊に山田に會ふては、時々と與へられる訓戒が修業になつて、終に源次郎は立派な人物になつ
 た。

江州の大津に、上原甚太郎といふ陽明學者があつて、其頃の陽明學者としては、可なり人に
 も知られて居る。源次郎も亦陽明學に親んで居たから、上原の高名を慕ふて、愈々大津まで出
 掛けて、其塾に入つた。然るに上原は、源次郎の爲人を見込んで、殊には齡に似合はず修業も
 積んで居て、學殖も存外に深い、將來に見込のある青年を見たから、恰で自分の子のやうにし

て十分仕込んだので、忽ち上原に代つて塾の取締をするやうになつて、多くの門人に對して、教授をするまでの身分になつた。所が、上原には信子といふ娘が一人あるばかりで、其他に是れいふ親戚も無い。上原は段々老る齡でもあるし、學者の家に女はあつて効なきもの、幾度か是が爲には歎息もした位で、今源次郎の様を見て、是ぞ確に自分の塾を相續して呉れる、有望の青年と思つたから、そこで養子になつて呉れいふ相談を始めた。源次郎は矢部家に生れて梅田家に養子に行つた身分で、今更に其養家を棄てることは出来ぬ、いふ切ない事情を述べて辭退した。上原は更に押返して、

『さういふ事情ならば、上原の姓を名乗るには及ばぬから、何うぞ信子を迎へて、永長く夫婦となり、俺の學統を傳へて貰ひたい。』

さういふのであつた。さういふ事情から梅田は遂に我を折つて、上原の娘を迎へることにして、彼是して居る中に、上原は老病の爲に此世を去つた。塾の相續をして、上原に代つて教授は始めたやうなもの、幾ら學問が出来ても、まだ齡が若いのであるから、多くの人が却々に懐いて來ない。塾は日に増し衰へて、今は之を維持することも出来なくなつた。そこで信子と相談して塾を閉ぢ、琵琶湖の邊にある、觀音堂の堂守になつて、果敢ない日を送つて居たのだ。此時分に西郷吉之助が、江戸へ下る途中、梅田のこゝを聞いて訪ねて來て、一夜を此觀音堂の一

室に明すこゝになつたが、信子は此珍客を接待すに一文の貯蓄もない、何うするこゝも出來ないので、母から譲られた銀の簪を賣拂つて、西郷の爲に酒肴を求めたといふこゝである。此一事を以て當時の梅田が、何程に窮して居たかといふ例にもなるのだ。

西郷は梅田の入爲を疾くも知つて、京都に歸つてからは、屢々酒井の家來にも出會ふので、其度毎に梅田の爲人を語つて、

『小濱藩では、あれ程の人物を見るこゝが出来ずに、陋巷の間に苦めて置くのは何事であるか』と言ふて、頻に梅田を推奨した。それが何時しか、酒井侯の耳にも這入れば、重役の知る所になつて、源次郎は遽に呼出されて、望楠軒の取締を命ぜられるこゝになつた。

望楠軒は二條堺町に在つて、小濱藩の藩費のやうなもので、京都在住の酒井の家來が、學問をする所になつて居たのだ。梅田の學問と人格は、能く藩中の若侍に、敬意を以て迎へられたけれど、小濱藩の如何にも不取締な、此頃の藩政の類廢して居る有様を見たので、源次郎は我慢が仕切れなかつたものか、藩政改革の建議をして、重役の非行を許したり、或は藩政の不行届なる點を、一々例を擧げて非難を加へた。昔の諺にある通り、良薬は口に苦し、源次郎の直言直筆した建白は、意外にも藩主の怒る所になつて、忽ち望楠軒の取締を罷免されてしまつた。左なきだに窮苦の境遇にあつた源次郎は、益々氣の毒な境遇になつて、今は其日の

煙さへ立て兼ねる程であつた。此時に梅田は、

心大則百物皆通 心小則百物皆病

此對句を認めて、自分の信條として、生活の窮苦の如きは更に意をなかつた。長い間の貧苦に氣病が加はつて、妻の信子は幼兒を抱いて、病床に就くとになつた。其日の煙も立兼ねる程の貧者が妻に患はれたのであるから、醫藥の手當の届く譯もなく、信子の病氣は日増に重り行く、従つて幼兒の體も、刻々に衰へるばかりであつた。此場合に、相州浦賀港へ異人の船が乗込んで来て、江戸は今引繰返るやうに騒動だ、さういふ報知を得て、憂國慨世の氣に富んで居た梅田は、此事を聞いて、今は妻子の愛着に捉はれて、躊躇して居る時節でない、確い決心を以て江戸表へ行かうとした。汚ない二枚折の屏風の中を窺けば、妻は幼兒を抱いて、病の爲に呻吟して居る。此時に梅田は壁間に

妻臥病床兒泣飢、

此心偏欲拂戎夷、

今朝死別兼生別、

唯有皇天皇土知、

ミ題して、決然立つて江戸へ駈付けた。けれども其時は、既に異艦は去つて影も留めず、江戸は元の太平になつて、何の爲に駈付けて来たのか、其効は無かつたのである。そこで直に京都へ引返して来たが、梅田の留守中に、妻の病氣は益々重つて、今梅田が歸つて来た時には、も

う九死一生の境であつた。梅田の顔を見た信子は氣が弛んだものか、其儘に息を引取る。同時に、幼兒も共に死んでしまつた。知人が集つて妻子の死骸は、鳥部山の安祥院へ葬つた。昔の所謂志士仁人なる者の裏面には、斯ういふ悲愴なことが屢々あつたものだ。

(四)

浦賀へ亞米利加の艦が来てから、引續いて他の異國からも、開國を迫つて来る。それが總て幕閣の問題になつて、朝廷の方からは攘夷の詔勅が出る。毛利が巧に其詔勅を利用して、幕府を倒さうと計る。佐幕派の諸侯は、頻にそれを心配して、毛利藩に當る。併し、天下の大勢は全く攘夷に傾いて、今は幕府の力を以てしても、此攘夷の御沙汰を動かすことは出来なかつたのである。殊に中川宮は、開國佐幕の意見を有つて居て、頻に毛利藩の陰謀を討いて、之を朝廷の勢力の中から退けやうとする。それに對抗して、飽までも毛利を擁ぐ公家があるので、朝廷の中は恰で同士討ち、權勢の争奪で滅茶々になつてしまつた。此時代が勤王攘夷を唱へる志士が、最も活躍した時であつた。梅田は其後、烏丸御池上る山科左馬頭の隠宅に這入つて、諸國から集つて来る、浪人や志士を對手に、頻に勤王攘夷の説を唱へ、併せて倒幕の議を首唱して居たのだ。此時に或人の勸めで、和泉國高田の村島内藏之進といふ人の娘、千代といふの

を迎へて、後妻にしたのだ。梅田の名は漸く内外に高くなる。従つて徳川に對抗の運動は、多く梅田を中心として唱へられるやうになつて、其頃の梅田の勢力は、却々に大いものであつた尤も、薩藩や長州藩が、優れた人物を、澤山に京都へ上らせて、朝廷の勢力を巧に利用して、大勢を作つたのではあるが、兎に角、梅田のやうな人物が、各地に散在して居て騒いだのは、大勢を作る上には非常な効力があつたのだ。京都は全く攘夷黨の巷々化して、今は徳川幕府が何んな方法を以てしても、開國條約に調印したことを、朝廷に認められる見込は、全く無くなつてしまつたのである。

時に安政五年の秋九月、伏見奉行の内藤豊後守の命を受けて、組下の役人が組子三百人を率ゐて、梅田の住宅へ押寄せ、遂に梅田を縛して、江戸へ檻送することになつた。何が爲に斯様なことをしたのかさういふに、是は世に有名な老中の間部下總守が、大老の井伊直弼の内命に依つて、京都へ乗込んで来て、勤王攘夷の説を唱へる浪士を、片端から引提へて獄に下した。有名な安政の疑獄の手に始めに、押へられたのが梅田であつて、梅田の江戸へ檻送された後に、頼三樹三郎を首めこして、多くの志士が押へられて、遂には近衛左大臣の老女村岡までが、江戸に檻送されるさういふやうな騒動になつたのだ、詰り朝廷の思召が攘夷に決つて、之を動かすことの出來ないのは、是等の連中が騒いで居るのが原因である、さういふ所へ目を着けて、井伊大

老は此猛断を行つたのであつた。後には是が原因となつて、自分の首が飛ぶことは、豈夫に知らなかつたのである。斯くて梅田は江戸へ送られると、一應の審問を受けて、傳馬町の獄舎に入れられたが、其後病氣になつて、小笠原家へ御預けになつた。梅田の病氣は多少あつたに違ひないが、其審問の際に、拷問に遭ふたのが病勢を増して來たので、萬一自殺をする可かぬさういふので、齒の如きは全部抜き取つてしまつて、両手の爪も總て引剥してしまつた。

之に依つて見ても、其拷問が何程酷かつたかさういふことは、想像するに餘りがある。併ながら梅田は、大義名分を楯として、飽までも幕政の不都合を數へ立て、却々に屈しなかつた。小笠原家は斯ういふ人を預けられたのは、甚だ迷惑ではあつたらうが、却々親切に手を盡して看護をした、さういふやうに聞いて居る、安政六年の九月になつて、梅田は遂に衰弱の結果死んでしまつた。假令病氣で死なずとも、もう一月生きて居れば、橋本左内や吉田松陰と共に、斬首されるには定つて居るが、併し梅田の死んだのは病氣で、表面は脚氣衝心となつて居るが、實は拷問に掛かつた衰弱の結果であるさういふのが、本當の説である。淺草の松葉町の泊船軒に其遺骸は葬つた。時に行年四十四歳、明治二十二年に正四位を贈るさういふ御沙汰が朝廷から下つて、今は招魂社に併祀されて居るが、死ぬ時の歌は、

君か代を思ふ心の一すちに我身ありきは思はさりけり

剣舞の詩に有名な、梅田雲瀧の生涯は、斯の如く果敢なきものであつたけれど、慷慨義烈の志は萬世の下にまでも傳へられて、安政の疑獄が有名なるだけに、梅田の最後の悲惨であつたことは、却て後の人心を刺戟することも強からうと思ふ。

紀尾井坂の記念碑

明治年間に於て、唯一の政治家と云はれた大久保利通が、暗殺された時の事情を述べる事にする。今更云ふまでもないが、維新の三傑と云へば、西郷、木戸、大久保を数へ上げて、先づ大きな人物として西郷、進歩した思想を持つて居た人物として木戸、稍保守的に傾いては居たが、政治家としては大久保が、他の二人に勝れて居た。

音に聞く高石の濱の松ケ枝も

世の仇波は遁れざりけり

云ふ歌がある。是は大久保が、關西地方の行政を視察する爲に、堺縣へ行つた時に、今の濱寺公園の設けられてある海邊を、縣令の税所篤と云ふ人の案内で、徜徉して居るに、盛んに樹木を伐倒して居るから、大久保が税所に向つて、其の理由を質すに、
別に理由と云ふてはありませぬが、此邊の士族や百姓が、縣廳へ拂ひ下けを願ひ出て、皆彼

のやうに伐倒し、木の幹は材木となり、小枝は其々に賣渡され、焚附になるのであります。是を聞いて、大久保は、

「其は惜いものだ、是だけの風景に富んだ海邊も、詰り此の松があればこそ、一段其の風景も惚ばれるのであつて、新に植附けて、是だけに大きくしようと思すれば、五十年、又は百年の月日を経なければならぬ、折角はまだ雨風に揉まれて、枝態も好く大きく育つた此の木を無残に伐倒するのは、如何にも心なき所業である、是非だけは保存するやうにしたら、さうぢや」

「左様、私もさう考へて居りますが、何分にも、衣食の爲には風景などは願て居られぬ、云ふ輩のする事でありませぬから、致し方はありませぬ」

「宜し、其では縣廳から相當の金を出して、此の松だけは保存する事にしたら宜からう」
此の大久保の注意があつた爲に、其の海邊一帯の松が、保存される事になつたのだ。濱寺公園の風景は、大久保の一言に依て、永久に多くの人を樂ませる事になつた。其の際に税所縣令の詠んだ歌は

吹下す大倉山の山嵐に

涙ふるひし斧の柄もこれ

大久保は只不骨な政治家でなく、其の半面には、斯ういふ風流氣もあつたのである。抑も大久保の家は、島津の藩中に於て、相當の位置もあつて、父の治右衛門は、有名な島津齊彬の御覺えも目出度く、其の愛臣の一人であつた。然るに齊彬の父齊興は、六十以上の年になつて、伴の齊彬が三十を超えて居るにも拘はらず、未だ相續もさせずに、藩主として頑固を通して居たのだ。其の齊興の愛妾が、江戸は三田の大江の娘で、おゆら云ふ婦人であつたのだか、其のゆらに子が出来た。それは普之進云ふ御方で、是が後の久光である。普通の人情として母のゆらは、久光を島津家の當主にしたい、云ふ考へを起したが、齊彬は勤王主義を保持して居た人であるから、老臣の内に意見の合ぬ者もあつて、密におゆらに欺を通じて、齊彬を排斥して、久光を相續人にしよう計つた、其縫れが段々甚くなつて来て、遂には嘉永年間の御家騒動になつたのだ。齊彬に附て居る家來が、非常に憤慨して、斯様な事の出来るも、詰りおゆらが在る爲である、御家の爲におゆらを殺して了はうといふので、血氣の者がおゆらの暗殺を計畫した。其の事が圖らずも洩て、齊興の耳に入るに、非常に立腹して、俄に齊彬に附て居る家來を、片端から處分して了つた。番に齊彬の侍臣ばかりでなく、島津家の一門であつた赤山頼負を初め、島津壹岐なき、云ふ一城の主までも切腹を命ぜられ、多くの近臣は、閉門又は流罪になつたのである。此時の島津家の騒動は容易ならぬことで、其時に利通の父治右衛門

も、此事件に連座して、島流しを申渡されて、長く海上の一孤島に世を送る事になつたのである。利通は未だ未成年であつたが、父の不在中は、母や妹の世話をして、僅かに與へられる食祿の内から、父の許へ送りもすれば、一家の生計も繰廻し乍ら非常に苦勞をしたのだ。若い時分に、斯ういふ苦勞をした大久保は、漸く島津家が齊彬の物になつて、三百諸侯の内でも、随一の名君と謂はれ、非常に評判の宜いやうになつてから、大久保も相當の役目に引上げられて、大層齊彬に可愛がられたものだ。然るに此の齊彬が、安政五年の夏、天保山沖の海軍演習の時、暑氣中りになつたのが原因で、後に病性が變じて、赤痢となり、醫藥の手當の甲斐もなく遂に永眠したのは實に惜いことであつた。其處で久光の子忠義が順養子として島津家の當主になつた。随つて親の權利で久光が後見職に上り、威權を揮ふやうになつたのである。それから大久保は、節を任せ恥を忍んで、巧みに久光に取り入り、その信用を得て、漸く島津家で重く用ひられるやうになつた。今に至るまで西郷に對しては、世人が非常に、尊敬の念を持つて居るのにも拘はらず、大久保に對しては存外に、好い感情を持つて居ないのは、さういふ譯であるか云ふに、矢張此の事が關係して居るやうだ。西郷は齊彬の亡き後も、齊彬の心を以て自分の心として、一生を終つた位であるのに、大久保は久光に取り入つて、自分の位置を作つた云ふ事が、甚く肝癪に障つて、其の感情が今日までも残つて居て、大久保に對する尊敬

の念が薄くなつたのである、けれども大久保が、久光に取入つたのは、天下の事に與るの、さうしても藩の勢力を利用しなければならぬ。其をするには久光に取入る外はないといふ考へからで決して自分一身の利慾の爲に、節を枉けた譯ではないのだから、大久保の爲には諍議の辭はあるけれども、世間の人はさう見て居ないのである。

さういふやうな事を離れて、單に大久保を一個の人物として見ても、實に豪い所はあつた。徳川幕府が倒れて、新政府が起つた時に、初めて天皇陛下に拜謁が叶ふ事になつた。其際に大久保が、禁裡御所へ出頭するに、取次の公卿が、御座所前の庭前へ通して、砂の上に坐らせやうとした。然るに大久保は、冷然として立て居る。取次の公卿が、頻りに座に着けよ云ふて促したけれど、大久保は首を振て應じなかつた。

拙者は極めて小身微祿ではあるが、苟も島津家の武士である以上は、是へ坐る事は出来ぬ、砂利や砂の上へ坐るものは、罪人の外にないと思つて居る、若し左様致さなければ、御上に拜謁が出来ぬ云ふならば、此儘御免蒙つて立歸る。

さ云ふて、其の場を離れやうとしたから、公卿は驚いて、薬で出来た圓座云ふ物を持って来て其の上へ坐らせる事にした。斯ういふ點から見ても、大久保は普通の武士でなかつた云ふ事は分る。極めて謹嚴にして苟も人に容さざる窮屈な人ではあつたが、女に掛ては矢張り世間並

に發展して居た。現に祇園の一方の娘、おゆう云ふ美人を愛妾として、幾人かの子供さへ奉けた位で、其の外にも二人の妾はあつたやうである。謹嚴で人に容さぬ大政治家も、女には許したのに違ひない。又明治十年の西南戦争が濟でから、今の岩崎家が俄に大金持になつた。其は西南戦争に就て、運送船が缺乏した際、政府の御用を一手に引受けて、莫大の儲けをした上に、特別の御褒美までも戴いたので、岩崎家の富は、其時に今日の基礎を作つたのである。彌太郎は非常に是を喜んで、大藏卿の大隈重信が、巧く舵を取て、特別に儲けさせて呉れたに違ひないが、其上に大久保利通云ふ大勢力を持った、内務卿の居た御蔭である事は、彌太郎も知つて居たから、是を此の儘にして置ては宜しくない云ふ考へで、澤山の御禮金を懐中にして、密かに其の屋敷を訪ねた、所が大久保は、極めて謹嚴寡黙な人で、岩崎と相對して口を堅く噤んで、昵き彌太郎の顔を見詰て居るので、流石の彌太郎も御禮金の出しやうがなく、世間話に時を移して歸つて来た、其から二三度は大久保を訪ねたが、何日も大久保の威嚴に打たれて、其の御禮金を出す事が出来ずに終つた云ふ事である。世間には出入の町人が、御禮金を持て来なければ、それもなく催促をする政治家はあるやうだが、目の邊り御禮金を持て来た者が、其の嚴然たる容態に打たれて、金を出す事が出来ないうで終つた、さういふやうな逸話は、多くある事ではない。其ほ大久保といふ人は、他に對して謹嚴に構へて居たのである。

西郷三木戸が、倒れてから、明治政府は、多く大久保一人の天下になつて了つた。當時は他の藩からも、多くの人材が出て居たけれど、大久保の前には殆ど頭が上らず、何事も大久保の心一つで極まつて行くといふ有様で、明治政府の政權は、全く大久保の手に歸して了つたのだ。後の歴史家が、當時の政府を稱して、大久保の政府云ふたのも、強ち過言ではないと思ふ。勢力の有る所には、必ず猜忌嫉妬が附いて廻る、大久保が無限の權力を握つて居た、其の無限の權力に對して、一方に反抗の起つて來るのは、無理もない事だ。殊に西郷が死んで了つてから、西郷の人は望は段々高まるだけに、大久保へ對する反感が、西郷黨の人の頭に起つて來るのは、當然の事である。石州縣の壯士で、島田一郎云ふ者があつた。是が西郷に信服して居て、十年の役には人数に纏まりが附かずして、馳參する事は出来なかつたけれど、遠く西郷に心を寄せて居たのは事實である。浪花節や變な講釋師が、島田一郎五月雨日記云つたやうな事を演つて居るけれども、彼は悉く作り物であつて、一つも信を置く事は出来ない。彼の話を聞くに、島田と西郷が、宛然友人のやうにして居るけれども、其は甚だしい間違ひで、島田は只石州縣の強い壯士云ふに過ぎなかつた。西郷の眼中には、島田などはなかつたのであるが、島田の方では、西郷は實に豪い人であるに、尊敬して居た位の關係である。島田が西郷を尊敬するだけに、大久保に對する反感は強かつた。ソコで大久保を殺さうといふ考へも起つて

來たのだ。

殊に此の時代には、新舊の思想が衝突して、何日も舊式の頭を以て、新式の人のする事を見れば、癢に障るのは當然の事である。大久保のやうな最も進んだ政治家が、自分の手に天下の大權を握つて、思ふ儘に政事を行つて行けば、其に對する不平や反抗の起つて來るのは止むを得ぬ。島田の計畫が、漸次に進んで行くのに、大久保の方では、そんな事は少しも知らなかつたのである。

明治十一年の五月十四日の朝、大久保は例もの通り支度をして、是から御所へ出やうとする所へ尋ねて來たのが、福島縣の山吉成典云ふ縣令で、是は大久保の子分であるが、地方長官としては却々の手腕家であつた。

『オウ山吉か』

『ハイ』

『何で來居つたのか』

『長官會議も昨日で終りましたから、兩三日内に歸縣を致さうと考へまして、一寸御機嫌伺ひに出ました』

『ウムさうか、モウ歸るか』

「ハイ」

「お前にも些話して置きたい事はあるが、今は出掛る所ぢやから、夜分にでも一寸来て貰ひ度いが、さうぢや」

「ハイ、御用がございまするなれば、必ずお伺ひ致します」

「さうか、其ぢやアさうして呉れ」

大久保の顔を、熱々見て居た山吉が

「甚だ恐れ人た事を申すやうではありますが、閣下は何所か、御加減でもお悪いのではありませんか」

「イヤ、別に悪い所はない、殊に今日は氣も暗々として、誠に好い心持ちぢやよ」

「ハ、ア……」

「何で、さう云ふ事を聞くのか」

「如何にも閣下の御顔色がお悪うございますから、何所かお悪いのかと心得まして、一寸伺ひました」

「ウム、別に氣分も悪い事はない」

「其では宜しうございまするが、閣下は御大切な御身體でございますから、さうぞ御注意は

すやうに願ひます」

「其アお前が云はんでも、乃公もまだ前途が長いのぢやから、大切にして居るよ、ハツハツハツハ」

豪い人が變死を遂げる前には、何か前兆のあるものだとは、昔から言傳へて居るが、山吉の目には大久保の顔色が何となく怪しく見えたに違ひない。

是は別の話だが、星亨が暗殺をされる日の、ホンの一時間ばかり前まで、僕は傍に居たのだが、如何にも星の顔色が悪いから、

「先生、何所か工合が悪いのですか」

と聞たら、星は苦笑ひをして、

「二三日前に腸を病ふて、少し下痢をしたから、其の故であらう」

と答へた。其の何氣なく答へる内にも、例もの星のやうに元氣がなく、何となく衰へて見へたから、僕も變だなとは思つたけれど、豈夫に彼んな事が起らうとは思はなかつたから、其の儘別れて歸つて来るまで、直ぐ其の後で、伊庭某の爲に、彼アいふ目に遇て斃れて了つたのである。僕は其の時に熱々思つた。人の陰が薄いと云ふのは、彼ア云ふ事を云ふのであらう、と感じたのであるが、斯ういふ圖抜けた人物が、不慮の事で瘞れる前には、多少とも其の兆がある云

ふのは些々舊弊な事を云ふやうだが、確である云ふ事を、自分の實驗の上から證明する。
 大久保は山吉を屋敷へ残して、馬車に乗り、是から御所へ出掛けて行く。其の途中は紀尾井坂下の清水谷を通る事になる。今では彼の邊も一面に家が建てられて、一方だけは空地になつて、大久保の遭難紀念碑が建て在るけれども、其の時分には一面の茶畑になつて居た、云ふ事である。其の茶畑の間に通じて居る道を馬車を急がして、大久保がやつて来たが、其の少し前から、五六名の士族體の者が頻りに草や花を撿つて居た。是が島田一郎の仲間であつて、長連豪、脇田功一、杉本乙菊、杉村文一、淺井壽篤、是に島田一郎を加へて、都合六人の決死の士族が、大久保の來るのを、今や遅し待受けて居たのである。
 丁度、大久保の馬車が、茶畑の處へやつて来た時に、前の方に草を撿つて居た、年の若い士族が、右の手を上げるのが合圖見えて、傍の茶畑から飛出して来た一人、是が即ち島田一郎であつた。馬車を目掛けて急いで來る様子に、馭者が變だなき氣が附いたから、馬に一鞭當て飛ばせやうとした時、前の方に居た若い男が、ヤツミ聲を掛けて、馬の前足を切つた。馬は其の痛さに驚いて悲鳴を揚げながら掉立になる。馭者は上から飛下りて、人殺し、人殺しく、と叫びながら駈て行くのを、後から追いつて一太刀浴せた、馬丁は既に坂の上へ駈登つて居たのであるから、幸ひに斬られなかつた。早くも馬車の窓を開いて、中へ飛込んだ島田が、伊藤

工部卿からの手紙を読んで居た、大久保の右の腕へ切附けた、「待てッ」ミ大喝されて、流石の島田も刀を引いて、睨み見た時に、大久保は切落された手に残つた手紙を取つて、衣匱へ納め乍ら、

「亂暴をせずとも、願ひの趣があるなら、云つて出たらさうぢや」

流石に大久保も豪い、此の場合に落着拂つて、此の一言を云ふただけれき、最早血に狂つて居る人達の耳に入るべき譯はなく、

「何を吐すか、今に及んで」

と言ひながら、又一刀バツサリ浴せて、馬車の中から引出して、六人の者が寄つて集つて、ズタ／＼に切苛んで、止めの一刀まで刺して、凱歌を奏して引揚けたのである。

斯の如くにして一代の大政治家、大久保利通は紀尾井坂の露を消えて了つたのだ。島田等は直ぐ其の足で自首して出たから、警視局へ送られて尋問されたが、固より自首して出るだけの覺悟があつたのだから、何の隠れる事もなく、今までの始末を悉く自由に及んだ、其の關係者として連座した者も十數名有つて、一時は却々の騒ぎであつた。其の兇行をする前夜に、島田から東京の各新聞へ、斬奸狀を密封して送つた。其の斬奸狀に依て見るに、大久保は天下の政權を素り、國費を濫費した云ふやうな事も書いてあつたけれど、今日になつて見れば、そん

な形跡は更がない。其の外に大久保の罪を数へる事数を條であつたが、多くは大久保の爲した事ではなかつた。兎に角、斬奸狀に書いた趣意から云ふよりは、西郷に對する復讐をしたを見るのが、一番適當であらうか。

島田が鍛冶橋の未決監に繋がれてから、面白い話がある。島田の入つた監の前に入つて居たのが、例の高橋お傳であつた。島田はまだ三十になつたばかりで、體格も立派、苦み走つた如何にも男らしい、締りのある顔で、堂々たる風采であつたから、何時か知らず牢格子の間から垣間見たお傳は、終に島田に戀して、見廻りの役人の目を忍んで、紙屑を丸めては、島田の監へ投附けて居た。島田は變な女だと思つたが、對手にもせずに居るに、或日一つの紙屑が、牢格子の間から、巧く飛込んで来た。ソコで是を開いて見るに、思ひの丈を書いた戀文であつたから流石の島田も是には驚いて、其の儘丸めて糞壺の中へ打込んで了つた、云ふ事である。流石は日本一の毒婦云はれたお傳、牢の中へ入つても、こんな事をして日を送つて居たのである。一方が愛國の志士島田一郎で、一方が有名の毒婦高橋お傳だけに、其の對照が頗る面白いと思ふ。

大久保の死だ後に、祭祀料を下し賜つた上に、贈右大臣の御沙汰を受けて、大久保は莊嚴なる式の下に埋葬をされた。大久保の暗殺事件の前後には、斯ういふ話もあつた云ふだけ、

只一括して述べた次第である。

日露媾和と焼討事件

東京の人は一體に焼討が好きのやうだ、甚い政變が起る毎に必らず焼討が行はれる。餘り風々續いたので此頃は少し遠退いたやうであるが、其うちには何か事件が起つて、必らず焼討が始まるに違ひない。大きな政變が起つた場合には、其様な騒ぎの起るのも幾分か恕すべしだが電車の一錢價上げ位で焼討を初めるのは、如何にも騒ぐ人の氣が知れない、併し、此様な事をやらかす者に、固より思慮の深い人は少なく、理窟の有無を考へて、夫から緩くり構へて初めるやうな者はなからう。

『ワーツ』の閑の聲を上げて、それツ、ヤツつけろ』

こいふ掛聲の下に、何こいふ事はなく、只だ無考へにやつて了ふのだから、さう深く咎める事も可能ないが、餘り風々斯ういふ事が續くに、遂には世間の同情がなくなつて、幾分の理窟があつて騒ぐ時も、皆同じやうに見做されて了ふから、焼討などは度々起すものではない。日露媾和の際の焼討は、何しろ二年の間、世界一の強國と戦ふて、幸ひに連戦連勝の勢を以て進んで来た。其の折柄の媾和談判が、條件の上に土地と償金の事がないのは怪しからぬ、こいふ

て騒いだのだから、此時の事は簡単に、莫迦な事のみは言へぬけれど、燒討の遺法は實に莫迦らしかつた。小村大使は亞米利加のボーツマウスで談判して居るのに、夫が癪に障つたさうして日本の東京で燒討を始めたのだから、其の騒ぎの波動が、小村の耳に届くまでには、多くの時間も要する譯で、早く言へば、二階から出して居る尻を、下から焙つて居るやうなもので、冷静に考へたら實に滿らない事ではあつたが、當時の國民の意氣込からいふたら、那の位もの爆發はしても已む事を得ない、畢竟は國民公憤の飛火である。僕等にしても、少しはやつて見たい位の氣は起つたのだから、強ちに是を以て、無智の暴行のみを斷定して、國民ばかり咎める事も可成まい。

明治三十三年の義和團事件、即ち太沽天津の方面から北京へかけて、義和團の一揆が、起きた、是は排外思想で凝結まつた、頑迷な連中が造つた團體で、有名な端群王が陰然其の首領になつて居たのだ。初めは耶穌教排斥から起つて、夫が遂に純然たる排外運動になつて來て、尙も支那人以外の者は、何處の國の者でも構はずに、討ち拂つて終はう、さういふ勢ひで、見るうちに其の勢力は膨大して、殆んど十萬以上の群集が、北京へ殺到して事が餘りに急激に起きたから、北京城内の居住民は、是を防禦のに充分の用意もなく、支那政府は兵を出して征討しようとしたが、却つて官兵の中に裏切りをなして、義和團に通ずる者が多く、到底征討の見込

は立たなくなつて、北京城は愈々包圍に陥らうとした。於是、光緒皇帝並びに西太后は、多くの家來を連れて熱河へ蒙塵する事になる。支那には昔から變な事があつて、天子の都が極まるに、直ぐに其の附近へ、事變の起きた時に、蒙塵す可き都を造つて置く、熱河は清政府の皇帝が、何時でも蒙塵する都である。折角に拵へた避難場を、使はずに置くのも莫迦らしい、さういふ考へがあつたものか、僅に百姓一揆の大きい位のものも起つても直に熱河へ逃げて行く。包圍の中に陥つた北京城内には、各國の紳士淑女が澤山に居て、其の混雜は尋常でなかつた。有らぬ外國人は義勇兵になつて北京城の防禦に力める事になつたけれど、何分にも武器は少なく、平生は勞働に服したこゝのない、充分に腕力のある人には乏しく、只だ必死の覺悟を以て、防禦するさういふだけの事であつた。處へ、漸次に集まつて來た義和團が、猛烈に攻撃を始める。幾度かの衝突があつて、遂に獨逸公使が慘殺されたり、或は日本公使館の一等書記生が刺殺しになつたり、或は兒玉大審院長の令息が討死をする、引續いて西郷從道の婚さんが燈籠を、さういふやうな譯で、此の騒動の爲めに有用な人材は可成りに死んだ、各國の東洋艦隊は太沽の方面へ集まつて來たけれど、何しろ義和團の勢ひが強いから、手も足も出せない。其處で、日本政府へ各國政府から漸次の掛合があつて、日本政府は何うしても、此の騒動を鎮定す可き、大役を引受けなければならぬ事になつた。

全體を言へば、此様な事件が起きた時に、日本政府は、直ぐに征討軍を差向けて、一日も疾く鎮定する位のことは、他國から催促されずとも爲す可きことではあるが、其處は日本の外務省のこころであるから、容易に腰が切れず、さんく甚い目にあつた末に、各國政府から請求されて、初めて出兵をするやうな悠緩こころをやつて居たのだ。最初は常磐艦に、東郷平八郎が乗込んで、太沽へ押かけ、夫から水兵を以て陸戦隊を組織して、盛んな戦ひをやつて砲臺を占領した。其處までは陸戦隊でも處分は付くが、之れからは眞の陸兵でなければ、思ふやうな戦ひは可能ない、僅に占領した砲臺を固守して、空しく陸兵の到着するを待受けて居た。處へ、廣島の第五師團の兵が乗込んで来て、夫に幾分か他の方面の兵士も混り、福島安正が總指揮官になつて、片端から撃退けて北京へ進んで行く、斯ういふ甚だ簡単なやうであるが、實は北京へ進むまでの骨折りは尋常でなかつた。辛うじて北京へ乗込んで来て、義和團を悉く撃退して、北京城を包圍の中から救ひ出した。長い間籠城して居た各國の人民も、茲に初めて蘇生の思ひを仕て、我が軍隊の勢を感謝した。然るに此騒動を機會として、露西亞政府は西比利亞鐵道の便に依つて、滿洲方面へ澤山の兵を繰出し、表面の口實は何處までも、義和團を征討するといふのであつたけれど、其實は滿洲へ充分の兵備を設けるのが、その本心であつたらしく、送つて来た兵隊の幾分は、北京へ差向けたが、大半は滿洲の要地へ配置して、夫々に軍事設備を完全

に仕て居たのだ。斯ういふ悪い企てをして居た事を知つて居たのか、夫にも知らずに居たのか、我が外務省は何の抗議も申込まずに居た。時に帝國大學の講師をやつた居た戸水寛人が、外務省に向つて

今露西亞政府が、兵備を整へて居る滿洲方面は、總て支那の領土である。義和團の騒動があるのは北京方面であつて、滿洲には何の關係もないのだ、然るに露西亞政府が、其の滿洲方面に向つて兵備を設けるのは、甚だ怪しからぬ事であつて、他國の領土内へ公然と兵備を設けるは、非理非法の甚だしきものである。何故に我が政府は、是に向つて抗議を申込まぬのであるか、今にして相當の處置を付けて置かなければ、後日に至つて臍を噛むの悔があらう我が政府は一刻も早く、滿洲の兵備に就て、露國政府へ抗議を申込むべし。

「何の學者なぞが、外交の事に口を出したところで……」

「いつた調子で受付けない。其うちに義和團の騒動は鎮定して、我が兵も引上げて来たが、獨り滿洲方面の露兵は一人も撤退せずに、兵備は日に益々嚴重になるの状態であつた。」

戸水は大學に於て、羅馬法の講座を受持つて居た博士であるが、學者としては實に立派な人物で、世間の俗情に通せぬ爲めに、一寸見るに阿呆のやうにも見えるけれど、眞の學者はあゝ

いふ風の人であるかと思はれる位に、世間から超然として立つて、學者の態度を立派に示して居る人である。然るに此人が、此問題を以て是程に騒ぎ出したのは、必ず充分の所以がなければならぬ。現に同じ大學の教授を勤めて居た、高橋作衛、中村弼、寺尾亨、金井延等の博士が何れも戸水を扶けて、盛んに外務省へ警告を發したのみならず、遂には二六新報の紙上を借りて、此の問題に就ての意見を公にするといふやうな事になつて來たので、サア大臣等の驚いた事は尋常でない、遂に文部大臣が、此の連中に干渉を試みて、

「苟も大學の教授をして居る者が、實際の政治問題に口出しをするのは、甚だ以て怪しからぬ事であるから、速かに其態度を變へれば宜し、然らざるに於ては相當の處分を爲る」

といつて、暗に免職處分を仄めかした、處が、平生から燬酒を呑んで、氣を強くして居る人のやうに、元氣な連中であるから、容易に凹垂れない。

「可矣、政府がさういふ意見ならば、我々に於ても大いに考へがある」

といふ意氣込みで、是から國民の輿論を喚起すべく、博士連中は東奔西走する。初めのうちは國民も、學者の意見のみ聞き流して居たけれど、漸次實際に就て見れば、容易ならぬ問題であるから、茲に外交問題を研究して居る、政界の一部に反響があつて、漸く政府攻撃の火の手が起りかけて來た、其處で政府は、愈々狼狽を極めて、今度は博士連に最も受けの善い

山川健次郎を以て懇談をさせる事にしたが、夫でも博士連は運動を止めずに、盛んに政府に反抗の態度を以て、露兵撤退の議論を唱へて居る。事此に至つては、政府對博士の問題でなく、國民一般の議論になつて來て、様々の曲折のあつた末に、歌舞伎座に於て、對外破派を稱する一派が發起して、國民大會を開く事になつた。例の頭山滿を初め、河野廣中、神籬知常などいふ連中が、大會の決議を齎して、總理大臣の桂太郎を訪問するやら、外務大臣の小村壽太郎を詰責するやら、遂に國民的の騒ぎになつて來たのである。

初めのうちは極めて軽い問題のやうに言ふて、程よく受流して居た外務省も、國論が漸次起るにつれて目が覺めた。西比利亞方面へ密使を遣はして、漸次調べさせて見ると、實際は戸水博士がいふた以上に、準備が既に整ふて居たので、其處で初めて吃驚した。是れから露國政府へ、嚴重な掛合に及んだが、先方では斯ういふ事に就ての掛引が巧いから、

「如何にも仰せ道理」

といったやうな顔付で、直ぐにも撤兵するやうな態度は見せるけれど、其實は平氣で兵備を進めて居るのだ。さうなつて見るに外務省も、平生の弱腰で押通す事もならず、國民の輿論が喧しくなつて來たから、お上手を専門にして居た、ニコボン主義の開山たる桂も本氣になつて、此の問題の解決に勤める事になる。外務大臣の小村も、今は平生の平和主義を擲つて、飽迄も

強硬な措合を始めた、處が其の談判は、年月を重ねても容易に落着かない、何日まで経つても同じ様な事を繰返して居たが、遂に明治三十六年の十二月、平和に解決の付く見込みは絶えて愈々最後の手段に訴へるまでも、撤兵請求は押通さなければならぬ、といふ事になつて、世間は漸く騒々しくなつて來た。翌三十七年の正月中旬には、最後の御前會議が開かれて、茲に平和と断絶を決した。栗野大使はペトログラードを引上げて歸る、ローゼン公使は我が東京を去る東郷平八郎は聯合艦隊の司令長官となつて、急に佐世保へ出かけた。陸軍の方でも出兵準備にかゝる事になつて、翌二月九日には、仁川旅順の方面に於て、先づ海軍の衝突があり、夫から陸兵の輸送もなつた。乍併、此の戦争は幸ひにして大勝利を博し、難攻不落の旅順口も陥れ奉天の大會戦にも捷ち、猶ほ戦闘は何時まで續くか分らぬ。左様なるに世界の人が迷惑をするといふので、亞米利加の大統領ルーズヴェルトが仲裁役となつて、媾和の勸告があつた。朝野の間には、媾和非媾和の二派に分れて、却々に論戦は喧しかつたけれど、遂に媾和談判を開く事に決して、小村壽太郎が媾和全權大使として、亞米利加へ出張する事になつた。此時に鳥渡面白い逸話があるから、夫を話す事にしよう。

桂は却々老獪なところがあつて、失敗の責任を遁れる事に巧な人であつたから、此の媾和談判が愈々始まるといふ場合になつて、竊に考ふるに、到底土地を取るに、或は償金を出させ

るにいかいふやうな事は、到底可能者ではない、滿洲方面に於ける日本の利権を、露西亞同等にする位の談判が關の山で、土地や償金の事は無駄であるを見て居たのだ。若しさうなるに戦勝の酒に酔て居る國民が、必ず騒ぎ出して、折角に戦争で勝つた功名は、媾和談判の失敗に依つて、滅茶々々になつて了ふに違ひない。此場合には戦勝の功名のみ自分の手に納めて、談判の責任は他の方へ譲つて終はう。といふ狙い考へを起して、伊藤博文を巧く煽動あけて、此の大使の任を受けさせやうとした。其相談も大進んで、愈々奏聞の手續きに及ぶ迄になつて二三の新聞には、伊藤が此の大任を受け、書いたのも有る位で、世間では伊藤が出掛る事を確信して居た、處が伊藤の子分のうちで、最も腕利きにして評判の高い、伊東巳代治が是を聞いて非常に驚いた。戦勝の功名は桂に握られて、談判の責任は伊藤が背負つて立つ、こんな莫迦な事をされては堪らぬと思つて、自分は未だ大病の後で、充分に身體は動かかなかつたけれど、芝公園の末松謙澄の家に、伊藤が來て居るのを幸ひ、是を訪ねて、

「貴所は全體さういふ考へで、此役を引受けるのか知らぬが、其様な莫迦な事をされては困る今日まで貴所には何等の瑕もなく、當代一流の政治家として、世界にも其名を知られて居る其の大切な名譽を、此の談判に依つて傷つける事になるのぢや、尤も戦争を始めた責任が貴所にあるのなれば、其の結末を付けべき談判の責任も、又貴所にかゝるのは當然であるが、

戦争は桂が始めて、其の功名は桂が収める事になつても、此談判に依つて、土地や償金を取る見込はないから、媾和條件に對する國民の不平は、貴所の頭の上にかゝつて來るのだ、そんな莫迦な事を引受けるさいふ事があるか、直ぐに斷つてお終ひなさい」

巳代治は無遠慮に論じ立てた。考へて見れば正に其通りであるから、流石の伊藤も、頭を押へて黙つて居る。伊藤は極めて良く出來た人間で、他の煽動には能く乗る人だ。殊には仰々しい名前の役は、常に好んで受ける性分であつた。其の弱點に付け込んで、桂が巧く煽て上げたので伊藤は何の考へもなく、露西亞第一のウキツテに對する談判は、自分でなければならぬ、さいふ己惚もあつて、巧く嵌り込んで了つたのだ。ところが巳代治に斯う言はれて見るに、成程夫に違ひないのであるから、飛んだ事を引受けたとは思つたが、今更に仕様がなない。

「そりやお前のいふ事にも道理はあるが、俺も迂闊引受けて了つたのぢやから、今更斷るにしても一寸困る」

「宜しい、夫なれば私から桂へ斷りませう」

「夫ぢや、さうして呉れ」

巳代治から桂へ電話をかけて、甚く怒りつけて、伊藤の引受けたことは取消して了つた。其處で、政府は已む事を得ず、小村を遣はす事に仕た。小村も此の大任を受ける時分に、土地や償

金の事は難かしいのであるから、何うせ國民の攻撃の標的になる覺悟はして居たのである。小村が引受けないで、伊藤が行つても、矢張り那の談判の結果は、那れ以上に巧く行くものではない、夫は識者の間には、チャンと判つて居たのである、小村も此の談判を引受けるに就ては夫だけの覺悟はあつた。されば談判を終つて横濱へ歸つて來た時に、今の外務省の政務局に勤めて居る、第一課長の小村欣一が、未だ其頃は大學に勉強して居た時分で、父の歸京を聞いて、横濱埠頭に出迎ひの爲めに出掛けた、其時に小村は欣一の顔を見て、

「オウ、貴様は生きて居つたか」

「さういふた。此の一語の内に小村に覺悟のあつたことは想像される。考へて見れば、小村も災難な役目を引受けたものだ。」

國民の希望は償金と土地に於つたのだから、夫が愈々取れなくなつて、只だ滿洲方面に於ける、利権の幾分を獲得したに過ぎない、さいふ事を聞くに、サア國民は一時に激昂して、此様な莫迦々々しい事なら、二年も續けて戦ひをして、大切な子供を殺すのぢやなかつたか、各方面に怨嗟の聲が起きて來る。例の對外硬派の連中は、此の機會に乗じて日比谷公園に、國民大會を開く準備にかゝつた。

明治三十八年の九月五日の事であつた。日比谷公園に黎明頃から、集まつた群衆は雲霞の如

く、何れも談判の結果に憤慨しての事であるから、殆んど革命が起きたやうな騒ぎで押寄せて来た。時に警視廳の方針が、此の連中を緩和して歸すやうにせず、何處までも頭から壓迫して終はうと、例の警視廳一流の遣方押さへ付けやうとしたから、一時に爆發して那の騒ぎが起つたのだ。日比谷公園は東京市の支配であるにも拘らず、警視廳は市の常局者へ對して、何等の相談もなく、公園の四門へ丸太を以て、交通遮断の柵を結び廻らした。市では臨時に參事會を開いて、滿場一致の決議で、市長參事會員等が手配をして、内務省や警視廳へ、木柵の取拂ひの談判を初めた、其一方には日比谷へ駆付けて、騒ぐ群集を宥めるのか煽動するのかわらないやうな事をして、柵の繩を斬拂ひ、一時に公園の中へ入れて了つたから、サア堪らない。斯うなつて見るに、如何に警察力を以て、無暗に押へつける事がお上手でも、其の鎖無は可能るものではない。一日の間公園の内外で押返して居るうちに、夕方になるに何者とも知れず、内務大臣の官舎へ火を放つた者がある。夫が動機となつて、各方面へ一時に焼討が起つた。媾和談判に賛成した記事や議論を書いた新聞社は、片端から焼討をされた。其時の騒動といふたら實に前代未聞の事で、東京市の交番は全部焼拂はれて、警察署の如きも四五ヶ所は同様な目に遭ふた。三四日の間は白晝に雖、女子供は外出が出来ず、夜になるに全然人通りが絶えて了つて、流石の東京市も闇のやうになつて了つた。其の内に軍隊の出動となつて、殆んど戒嚴令

を布かないまでの警戒が起り、群集も数日續いての騒ぎに疲れもすれば嫌氣もさして幾日かの後には、元の平和の都にはなつたけれども一時は何様な騒ぎになるか、市民は安き心はして居なかつたのである。此の騒ぎが各地方へ及んで、神戸や京都大阪などの焼討は平生に悠然した人間ばかり住んでゐるころとしては、實に不思議だと思ふ位に大騒ぎをやつたもので伊藤博文の銅像が引下されて、海へ投げ込まれたのも此時のこゝであつた。政府は日比谷公園へ群集を引入れて、大騒ぎをやつた首謀者は、對外硬派の連中であるといふので、河野廣中、大竹貫一、櫻井熊太郎、小川平吉等の人々を被告として、法廷に立たせる事にしたが、主任判事の今村恭太郎が、数日の訊問を續けた末に、兇徒囂集の教唆は證據不十分として、一同を免訴放免して了つた。是れで國民も満足は仕したが、若し此時に今村が有罪の判決を下したら、夫で一騒動起るにやうな勢ひはあつたのだ。兎に角、此時の焼討は將來に傳はる事であるから、只だ其の概要だけを述べて、事實の真相を過らぬやうにして置かうと思ふて、簡単に述べた次第である。

七 卿 西 軍

今の時世から見れば、舊幕時代に於ける、攘夷の詔ほご不思議な物はない。異人の船が入

つて來たり一念なく撃拂へ、異人を見たら叩つ斬て了へ、云ふのである。さういふ譯で、そんなに異人が嫌ひであつたのか、深く其の理由を尋ねたならば、必ず此の詔を奉じて、攘夷の運動をした者も、正確な答をする事は出来ないだらう。現に僕が、井上侯に遇つた時、

「閣下は攘夷黨の一人として、高輪御殿山に火を放つて、英吉利公使館を焼いたり、或は異人を斬らうしたり、種々攘夷に就ては、骨を折られたやうであるが、さういふ風に攘夷を行つたなら、日本の前途がさうなると思つたのですか、當時の見込を聞かせて戴き度いものです」

云つたら、井上は顔を曇めて、

「そんな事が分るものではない、只異人を斬つて異人館を焼けば、其が攘夷の實行で、天下の御爲になるものさ、斯う考へたのであつて、日本の前途がさうなるか、そんな先の先まで考へた物ぢやアないよ」

「斯う答へられた事がある。是れが一番正直な答であつて、其の當時の攘夷運動をした者が明治になつて以來、豪い地位を占てから、種々に攘夷論を辯解して居る者もあるけれど、其は明治になつてからの頭で解釋をしたもので、實は舊幕の時代に、先の先まで考へて居たものはない。唯だ單純に、異人を斬つて異人館を焼けば、其が攘夷の實行であつて、天下の御爲になる考へて居た云ふ、井上の答は、實に正直であると思ふ。」

徳川幕府が倒れて、愈よ明治政府が出来た時に、智者として有名な岩倉公でさへ、非常に困つたのは、兵庫の港に集つて居る、各國の公使の處分方であつた。攘夷の詔はまだ其儘になつて居るから、朝廷の御趣意は、攘夷に極つて居るのだ。今更になつて、彼の詔勅は間違ひであつたから、取消すさも云へぬ、諺にもある通り、論言は汗の如しで、一度出した論言は變改すべきものではない。豈夫に徳川を倒して、明治政府が起つたから云ふて、俄に攘夷の詔勅は止めになりました、さも云へないのである。岩倉は各國公使へ對して、此の始末をさう附けたものであるか、頻りに苦しんで居た。時に陸奥陽之助が尋ねて來て、岩倉の顔色の悪いのを見て、

「何か御心配の筋でもあるのですか」云聞たから岩倉が、實は斯うくである云ふて、心配の事を打明けるさ、陸奥はニヤリニ笑つて、

「そんな事なら、少しも心配はありませんまい、朝飯前に處置が附くではありませんか」

云、陸奥は無造作に答へた。

「君はさう云ふが、詔勅の變改は出来ない、其で困つて居るのだ」

「別に詔勅を變改するには及ばない、詔勅は其の儘にして置いて、外國の公使へ、今度は徳川幕府が倒れたに就て、王政復古になり、天子自ら政事を裁御す事になつたに就て、各公使へ

拜謁を許される事になつたから、直ぐに出て来い云つて通知をしてやれば、詔勅の事には關係なく、喜んで彼等は参内をするに違ひない、ソコで御上から、今後共に親しく交らうのお一言が下つたならば、其で自然に攘夷の詔勅も消滅する事になる、さうすれば、表面は飽までも詔勅を變改しないのであるから朝廷の御威光には關係ない事になつて、容易に始末が決してありませんか」

岩倉は思はず膝を打つて、
「成程、是は名案である、さうすれば皇室の體面にも拘はらないのであるから、早速に是は實行しよう」

云ふて、直ぐに各國公使へ通知をするに、陸奥の見込だ通り、一同喜んで京都へやつて来た第一に乗込んで来た、英吉利公使のパークスが、四條堰までやつて来るに、攘夷黨の浪人に斬掛けられて、驚いて逃出したけれども、幸ひに後藤象次郎と中井弘三の二人が擁護して居たので、公使に怪我はなく、亂暴を働いた浪士は、反對に斬殺されて了つたので、此一件は無事に済んだが、此事に就て考へて見ても、攘夷論の如何に愚論であつたか云ふ事が分る、後の始末にさへ困つた位の愚論であつたのだ。其の攘夷の詔勅を楯に取て、盛んに攘夷風を吹かせたのが、長州の毛利藩である。當時京都に在て、政務役座役を勤めて居たのが桂小五郎であつて

後には是が木戸孝允なる人であるが、其の頃は年僅に二十七八歳で、非常に才氣があつたけれども、勢ひに乗じて進んで行く時には、些か調子に乗過ぎる風があつた。其の桂が毛利藩を代表して、朝廷の方は、手一ぱいに運動して居たのである。

朝廷の御活計向は、誠に淋しいものであつて、僅かに十一萬石餘の御取入で、其中から公卿の食祿を拂つて、剩す所は僅かに三萬石ばかり、其で一年の御活計を立るのであるから、宮城の玉垣が崩れても、其を繕ふの餘裕なく、禁廷に雑草が生茂つても、其を刈取らする人足の費用を拂ふ事も出来ず、關白は日本第一の大官であるが、其でさへ僅かに五千石位のもので、江戸では満らない旗本でも、一萬石位取て居た者があるから、逆も比較物にはならない。ソコで公卿が、食ふに食はないの境から、種々な内職を初めた。其の一ツが例の花札を拵へる事で、是が公卿の内職になつて居たのだ。されば口の悪い者が、公卿の位倒れなご云つた位に、甚だ威嚴のなかつたものであつた。其の公卿が貧窮して居るのに附込んで、桂が盛んに金を振撒て、朝廷への貢は云ふまでもなく、公卿の方へも賄賂が充分であつたから、段々桂の信用が厚くなり、毛利藩に依頼するの念も深くなつて、遂に朝廷の權勢は、毛利藩が握つて了つた。幕府は朝廷の御趣意に背いて、外國の條約へ判を押して了つたのであるから、朝廷から攘夷の御沙汰が下れば、幕府は間へ挾つて苦む事になる。従つて攘夷論が盛んになれば、盛んになるだ

く將軍に逃げられたので、今度はモウ一層規模を大きくして、大和行幸を企てた。攘夷黨の公卿を巧みに使つて、遂に朝廷を動かして奉り、愈々供廻りの役までも極つて、行幸云ふ事になつた時に、會津中將が桑名越中守と相携へて、大活動を始めたのである。此の大和行幸の際に更に攘夷の詔勅を下されて、將軍家が攘夷の節刀でも請けるやうになつては、其こそ一大事だ云ふので、長州藩を京都の勢力圏内から、追出しては云ふ計畫を立てた。所が中川宮は開國論者云ふほごではなかつたが、極端の攘夷説に反對をして居たので、殊に毛利藩が京都に於て、餘りに我意の振舞をする事を、心憎く思つて居られたのを幸ひに、會津中將が巧みに此の中川宮に就て、是から朝廷を動かす方の運動に取掛つた。中川宮は又の名を栗田宮とも申上けるし、又青蓮院宮とも稱へられて居た。彈正尹云ふ肩書があつた爲に、尹の宮様も申上けて、中々聰明なお方であつたが、今の久通宮家が、即ち此の方から續いて来たのである。頗る果斷に富んだ御方であつたから、會津中將の來談に御承知をなすつて、直ちに參内をして天皇に謁え、段々にお諫め申上げた。爰に於て大和行幸を中止される事になつて、文久三年八月十七日の夜、毛利に反對して居た公卿は、残らず出仕に及んだ。其内に會津、桑名の兩卿を初め、稻葉侍従、一橋慶喜等が段々參内をして來て、爰に衆議一決した結果が、毛利派の公卿は、悉く詔勅を以て謹慎を命じ、有栖川、近衛の兩家の如きも、一時閑門をさせられた位で

あつた。同時に毛利家へ對しては、京都に其の藩士を留める事を禁じて、堺町御門の警衛も免するといふ、達しが出たのである。其前から多少怪しい形跡はあつたけれど、勢ひに乗じて來た桂は、さまで注意をしないで居た。折柄、一夜の内に大勢が變つて、斯ういふ御沙汰が下つたから、扱こそ一大事と、桂が直ちに馬を馳つて、堺町御門へ駈附けて來る。此時既に長州藩士は、勅命に依つて悉く追拂はれ、會津藩の旗印が、御門の上に高く掲げられて居て、桂の入門を拒絶したので、流石に智慧のあつた桂も、此時には何ともする事が出来なかつた。來島又兵衛を初めとして、藩士の面々は憤怒の餘りに、大砲を宮城の方へ向けて、今や撃拂はうといふ有様であつた。是を見た桂は大に驚き、一同の者を鎮めて、無理からに河原町の藩邸へ引揚けた。所へ、柳原前光が勅使として藩邸へ來て、毛利大膳大夫に對しては、禁裡守護職を被免すると共に、藩士一同は國元へ引揚げる、云ふ御沙汰であるから、種々議論をして見たが勅命があつてはさうにも仕様がな。ソコで桂は當時、毛利藩を代表して居た、毛利謙岐守と御分家の吉川監物に相談して、取敢ず藩邸を引拂ひ、妙法院まで引上げて來て、是から善後策を講ずる事になつたのである。

其の相談が、まだ煮切らぬ内に駈附けて來たのが、三條實美、東久世通禧、西三條季知、四條隆謨、壬生基修、萬里小路頼徳、澤主水正の七人であつた。桂が面會をして、段々次第を聞

くも、七卿は既に官位を剝脱されて、謹慎を命ぜられたので、今後さういふ嚴重な御沙汰が下るかも知れぬ、此際京都に留つて居る事は危険であるから、是非長州へ連れて行つて呉れる云ふのであつた。此上に朝廷の御勘氣を蒙つた、七卿を守護して引揚けては、彌よ朝廷の御感にも悪くなるに極つて居る、さうかして七卿だけは、別にしよういふ考へであるが、七卿は一生懸命になつて絶り付くので、今更如何にもする事が出来ない、殊に幾度か此の七卿の手を借て、朝廷の議論を纏めた事もあつて、其の縁故があるのだから、遂に吉川と相談の上で、七卿を連れて立退く事になつたのである。

夜の拂曉から、降出して来た雨は、蕭々として、七卿の西竄を弔ふ如く、四隣寂として何もなく心も濕る此の朝に、眞の藩士、浪人で藩士と稱して居る者を合せて二千餘名、堂々として京都を後に、大阪を指して引揚げる、七卿は其中に圍まれて落て行くのであつた。

是を聞て幕府の兵が追撃しようとしたけれど、其は慶喜が固く押へて動かさなかつた。若し追撃をして、毛利の方に充分の用意があれば、其こそ大きな戦争になつて了ふ。而も其が徳川幕府の方から、仕掛けた戦云ふ事になるに、忽ちの間に又幕府が、朝廷の御勘氣を受けなければならぬ。殊に勝敗の見込が明かに分らぬ云ふ場合に、妄りに兵を動かす事は善くない、云ふので、是を押へた慶喜は、流石に前途の見えた人であつた。

斯て七卿は、長州の同勢に圍まれて、一度は山口の城下へ入つたが、當時毛利の藩論も、二つに分れて容易に決せず、朝廷の御勘氣を被つた七卿を、城下へ匿まつて置くのは穩かでない云ふ説が勝を制して、遂に七卿は三田尻の招賢閣へ移されたが、其も遂に藩論の一變から、長く留まる事を許されず、據らなく三田尻を去て、是から九州へ渡り、筑前の太宰府へ来て、天満宮の宿坊、延壽王院へ入つて謹慎をする事になつた、其の間に、七卿の中で病む人もあり又死ぬ人もあり、今まで附て居た者も大分離散して、今は其の日の事にも差支へるやうな、哀れな境界になつて来た、其を陰になり陽になり、能く世話をしたのは長州藩であるが、後に薩藩の連中が、能く是を守つて呉れたので、辛うじて命には災害がなかつたのである。

幕府の方では、七卿を其の儘にして置ては、若し其を擔いで何か企てる者があるに、危険である云ふ見込で、目附の小林甚六郎に命じて、新撰組の隊士を率ゐて、急ぎ太宰府へ乗込で七卿に手を付けやうとした。此の事を早くも聞た西郷吉之助が、國元へ急使を送り、黒田了介や大山格之助をして、小林等の七卿に害を爲すのを防いで呉れた。其の内に土方楠左衛門が乗込んで来る、尾崎三朗がやつて来る、總て中岡慎太郎もやつて来る、さういふ工合だから、追々七卿も景氣附て来た。

斯る内に、京都の大勢が又一變して、佐幕論の連中は、全く屏息して了つて、今までの攘夷

勤王の輩が、羽を延す事になつたから、其の混乱は一通りでなかつた。徳川家茂は、長州征伐の最中に、病氣が出て薨去するに、後見職の一橋慶喜が、十五代の將軍になつた。此時には幕府の勢力も全く地に墜ちたのみならず、其に四邊の事情が追々切迫して来て、遂に徳川慶喜は將軍職を辭す事になつて、朝廷へ大政返上の辭表を出した。其が慶應三年十月十四日の事で、辭表は直ちに御聞届になつて、爰に全く徳川政府は倒れて了つた。翌年正月に起つた伏見、鳥羽の戦ひ、是が又徳川の大敗北になつて、慶喜は僅かに身を以て江戸へ遁れるに始末で、全く恢復の道は絶て了つた。而も幕臣の多くは江戸城に據て、最後の戦を試みやうに云ふのを、勝安房が一人不可を稱へて、遂に江戸城は、手附かず明渡すことになつたのである。

京都の勢ひは、江戸の方に反して非常なこゝになつて来た。併し薩長聯合の結果、第一に西郷大久保の二人に、桂小五郎木戸孝允が加つて、此の大舞臺を背負て立たのであるから、事の運びは非常に早かつたのである。而も公卿としては、珍しく果斷に富だ、其上に智慧の勝れた岩倉が踏張居たから、此の三傑相應じて、新帝陛下を守立て、王政復古を天下に宣言する迄になつた。今まで先帝に從つて、種々苦勞をした七卿に對しても此時宥恕の御沙汰が下つた七卿に云つても、筑前から迎へられて、京都へ歸る事の出来たのは五卿で、其前に死んだのが

萬里小路頼徳、澤主水正は筑前の平野國臣に引張出されて、生野銀山の旗揚げの首領になつたが、其の戦争が破れたので、行衛を眩して居たのである。三條實美は京都へ歸つて来るに、長い間、京都を離れて居る内に、孝明天皇は既に崩御になつて、新帝の世になつて居たのである。月の輪の御陵に参拜した時は、聲を揚げて慟哭した末、咏んだ歌は、

悲しさや歸りて見れば月の輪の雲の御陰に君かくれぬ
 一度は殉死をしようまで思つたけれども、イヤさうでない、新帝陛下は猶ほ御幼冲に渡らせられ、國家の大勢は、未だ全く定まらぬ折柄であるから、自分の一身を粉にしても、新帝へ御奉公申上げなければならぬに、其から深くも新帝の御前勤めに、忠節を擡げたのである。此の新帝に申上げるのが、即ち今は先帝なられた、明治天皇陛下の事であるに云ふ事は、是また記憶に存して居て貰ひ度い。七卿の長州落の始末は、是で完結した事になる。

大浦問題と内閣留任の真相

(一)

代議士を買収する習慣は、随分舊くからあつたこと、何れの政府でも、之を行はずに濟ませた政府は、絶對に無からうと思ふが、併し何時の政府でも之を行つたから、大浦が其轍を踏

んだのも止むを得ない、云ふのは到底議論になりぬ、他人の悪い事を容して居たから、彼の人々が今度悪い事をして、それは可憐である云つたやうなことを言へば、最早世の中には、法律の制裁も、道徳の制裁も無くなつて、畢竟は、悪い事を爲さない者は損である、云ふことになる、左様な馬鹿な事が行はれては堪らない、悪い者は、何處までも悪いとして排斥しなければならぬ、大浦が大浦を罷めて、家督を息子に譲つたから、それで改悔の情が現はれた、云ふのは俗論で、國民の前に白晝唱へる議論ではあるまい、それを正直な國民の子供が聞いて何う云ふ風に解釋するか、それを想へば、實に寒心せざるを得ないのである。大浦の大臣を罷めたのは、固より當然のことであるが、若し大浦が果して改悔して居るならば、何故辭爵を爲さないのであるか、大臣だけは罷めたが、華族の班には列して居る。自分は隠居しても、忤は政治上の大罪を犯した者の子として、猶ほ子爵家を相續して居るではないか、左様云ふ不謹慎なことで、苟も其處に改悔の情が現はれて居るであらうか、或人はあれまでになつたからは、最早酷く追及しないでも宜からう、云ふことを言つた。左様云ふことを言ふ人は、矢張り自分も、大浦と同じやうな罪惡を犯さう云ふ、下心があるからのことであらうと思ふ。殊に大浦には、毫も悔悟の情が無い、愈々牢へ打ち込まれるになつたから、據所なく大臣の職を辭したのは、當時の事實が、明かに之を證明して居る。

此大浦の辭職に關聯して、大隈の留任問題が起つた。是も深く考へるまでは無い。苟も憲法政治の何物たるかを知つて居る者は、此留任が不正の留任である位の事は解つて居る筈だ。それに種々の屁理窟を付けて辯護する者は、大隈にお世辭の一つでも言つたならば、何かになれるだらう位の卑しい考から言のであつて、膝組みになつて話をすれば、何んな者でも、不正の留任であるに答へるに違ひない。恐らく大隈が、擧者か盲目であつたならば、一人として其留任に謳歌する者は無からう、茲に於いて最も訝かしかつたのは、萬朝報の論説では、大隈の留任す可からざる事を痛論して、其墨痕未だ乾かざるに、黒岩周六は築地の精養軒に於ける宴會に於いて、大隈内閣の留任は國家の爲めに大いに慶す可きである、云ふお世辭を列べて居る。このことである、自分の主宰して居る新聞の論説では、留任不可を唱へて居るのに、彼れ黒岩は宴會の席に於ては、大隈の留任を謳歌する演説をして居る、此位の矛盾は無いと思ふ。新聞に俺は違ふ、云ふやうなことは、三百代言の遁辭なら格別、苟も新聞記者の言ふ可きことには無い。尤も今の黒岩では「イヤ俺は、此頃は新聞記者では無い、増屋云ふ米屋の主人である」に答へるかも知れないが、左様なことも亦世間には適用しない理窟で、米屋は米屋、新聞記者は新聞記者、孰れにしても黒岩周六云ふ人間に、異りの無い以上は、其舌や筆を二様に使つてはならぬ。乍併、勳三等を頂戴することになつては、此位の御奉公は、最易容いこと

であらうと思つて、聊か黒岩の爲めに、萬歳を唱へざるを得ぬのである。

(三)

大正四年の六月二十六日、赤坂の三河家に、十七八人の政客が集つて酒宴を催した。是は極く仲の善い友達が集つて、時々催す宴會であるが、其中に海軍大臣の八代六郎も加つて居たのである。中には政友會の代議士も居たから、酒間の談論に花が咲いて、盛んに八代に對つて、攻撃を始めた者がある。

「君のやうに正直な者が、大臣になつて居る内閣が、斯う云ふ不都合なことをして居るが何うだ、それは他の事でも無い、此間の總選舉に、非常な干渉を用ひた上に驚く可き大金を撒布して居るのだ、殊に昨年の議會に於いて、大浦兼武が代議士の買収を行つたが、左様云ふ不都合なことをして、政治の争をするに云ふのは、甚だ以て怪しからぬではないか、君のやうな正直者が側に付いて居て、左様云ふことを爲せたことになれば、君も亦不正直な一人なるのであるから、吾々は甚だ君の爲めに、惜まざるを得ないのである」
「言はれて八代は、あゝ云ふ氣風の人だから、
「イヤ、そんな馬鹿な事は無い、俺は常に内閣に席を連ねて、種々政務に付て相談して居るが

大浦は實に立派な人である、そんな馬鹿氣な事をするやうな者で無く、稍々度量で偏頗に過ぎる點はあつて、黨派上の争になつたならば、随分反對の者からは、甚く排斥されることはあるかも知れないが、併し大臣としては、實に立派な人であると思ふ。従つて左様な悪い事をしたことは、俺には信ずることが出来ぬ」

「そりや君が間違つて居る、現に吾々が之を言ふのには、相當の證據を握つて居るが、何うだ」
「フウン、それは面白い、證據があつては大浦も、嘘を吐くことは出来まい、何う云ふ證據があるのか」

「宜し、それでは其證據を今話さう」

是から代るく種々な事實談を始めた。熟々聽いて居た八代が、

「成る程、左様聽いて見れば、或は眞實かも知れぬ、それが眞相であると思すれば、大浦は怪しからぬ事をしたものぢや、俺も大いに考へなければならぬ」

其晩は全然八代征伐の宴會のやうになつて了つた。

其翌々日、即ち二十八日が、定例の閣議の日であつた。内閣に一同集まつた時、八代は大浦に對つて、

「時に斯う云ふことを聽いて來たのであるが、事實か何うか、直に辯明して貰ひたい。實は一兩

日前に、或る場所で宴會を開いた時、我輩の最も尊敬して居る親友が、君の代議士買収の事に就いて、種々の證據を擧げて、我輩に話したことがあつたのぢや、それを聴いて見るに、如何にも道理千萬なことであつて、我輩は之を否認するだけの議論をするこゝも出來ず、止むなく沈黙して來たが、何うちや左様云ふことがあるのであるか、若しあつたミすれば有體に言つて貰ひたい、我輩にも亦自ら覺悟がある、遠慮なく打明けて下さい」

斯う言つて八代は、是から友人に責められて來た事を、詳しく語つて、更に其證據を以て擧げられた事實も打ち明けた。

「サア斯う云ふ譯であるが、何うかね」

之を聴いて居た大浦は平然として、

「イヤ、左様云ふことはありませぬ。それは反對黨が我輩に對つて、殊更に加へる非難でありませう」

「言つて脇を向いた。そこで八代は尙ほ重ねて、

「それに違ひ無いかね」

「斷じて左様な事はありませぬ」

「宜しい、其男らしい返事を聴いて、我輩も安心した、併し、それを我輩に話した連中も、決

して、我輩を欺くやうな者ではない、左様な君も信じて居るが、其連中も信じて居る、兩方を信じて居る我輩は、何方の言ふことが眞實か、殆んど解らなくなつてしまつた、是にはチト困つた」

「言ひつゝ、今度は大限に對つて、

「今お聴の通りの次第であります、貴方は何うですか」言はれて大限は、例の調子で、

「そりや左様なことのある可き筈はない、大抵それは政友會の奴等の言つたことであらうが、彼れ等の言ふことは一つも信用が出來ぬ、大浦君の言ふ通りであつて、我輩が地球大の印を

押捺して保證するところであるんである」

大限が是までに保證するから、八代も後の言葉は無く、其日の閣議は、何事も無く濟んだ。

然るに其後、幾く程も無くして、大浦の邸へ豫審判事が出張するやら、檢事が臨檢するやら、段々事件の雲行が悪くなつて來て、大浦は最早法網を免れることは出來まい、云ふ風説は、それからそれへ傳つて來た。

(三)

全體此問題は、あれ程大きくならず済んだのを、昨年の議會に於いて、政友會の代議士が

頻りに選挙干渉議員買収の事に就いて、政府に肉薄した。其時に大隈が、『それ程に悪い事があるならば、一々證據を舉げて來い、證據さへ舉げて來たならば、直に相當の處分をするから、遠慮無く證據を舉げて、告發でも何んでもしろ』と叫んだ。當時之を聞いた心ある者は、大隈云ふ人は老人甲斐も無く、宛然壯士上りが代議士に成つたやうな人物である、密かにあの態度を口調には、不快の念を懐いた位であつた。所が政友會の代議士の中で、村野常右衛門云ふ人が、之を聞いて居て非常に憤慨したのである。村野は未成年の時分から、政黨の運動に従事した、八王子在の豪農で、先祖以來の資産もあつたのであるが、殆んど政治の事に奔走して、之を使ひ盡してしまつた位である。其弟の連太郎の如きは、選挙競争の紛糾から、遂に味方の中で裏切りした者を、一刀の下に斬殺して、無期徒刑にまでなつた位で、其一門一族は悉く國事か政治かかの罪に座して、皆牢に入つた位に、精神家の集りである。殊に村野は、少しも今日までに醜怪な行爲の無かつた、眞に國士の風のある男だ。長く代議士に選ばれて居ても、議會の演壇に立つたこゝは一度も無い、何んな政變が起つても、公衆の前に演説をした事も無い。何時も長い身體を、ノソリノソリ運んでニヤク笑つて居るばかりだ。併しいざなつた時に、眞の決心を成し得る者は、政友會の代議士を通じて、恐らく村野以上の膽玉を有つて居る者は無からう。明治二十二年に來島恒喜が

大隈に擲つけた爆裂彈は、實を言へば此村野が渡してやつたのである。今までは秘密になつて居たが、もう大抵明かにしても宜からうと思ふから言ふのだが、村野は左様云ふ凄い男である。長い間政黨運動はしても、何時も極く眞面目な男であるから、大隈の暴言を聞いて、非常に憤慨したのも無理は無い。如何に辯解しても、昨年の議會に代議士の買収したのは事實であるし、又本年の總選挙に政府が黄白を散じ、警察官を使用したのも、勿論事實なのであるから、其明かなる事實を蔽ふが爲めに、證據があるなら訴へて來い、云ふやうな暴言を放つ以上は最早容赦はならぬ、そこで村野は、直に告發の手續に掛つたのである。それに就いて村野が頗る困つたのは、自分は辯舌に巧みならずして、法廷に立つこゝは難かしい。専門に法律學を修めて居るので無いから、何うしても相當の代人を選んで、此告發の任に當らしめなければならぬのであるが、されば言つて、政黨に關係のある人や、平常に政治運動をするやうな者では、何うしても裁判所の信用が薄からうし、又政治運動に關係はせずとも、人格の低い者では、法律に精通して居ても、此事件の代理者にはさせられないのである。斯う云ふ所から苦心して行くところに、村野の人品の高潔な所は現はれて居る。漸く索し出したのが、鹽谷恒太郎と今村力三郎の兩人であつた。鹽谷は人も知る如く、帝大出身の法學士であつて、實に立派な品性を具へた辯護士だ。今村は私立大學の出身でこそあるけれども、是も

亦人格の高い人である。村野は此兩人に面會して、是非此告發代理人になつて呉れ、頼み込んだのである。初めの間は兩人も躊躇したが、段々村野の決心を示しての頼みに、遂に之を引受けることになつた。村野は政友會の總務をして居たが、之を辭するのは勿論の事、萬一にも此告發が成功しない場合には、自分は速に代議士を辭して、故郷へ歸り一生を百姓で送るに云ふ決心までして、其辭表を示しての相談であつたから、兩人も其精神に動かされて遂に引受けたのである。

(四)

それは例の一萬圓事件の方であつて、白川友一が大浦兼武に一萬圓を提供して、之を議員選舉の費用に當てやうとしたのだ、尤も此中間には、例の事件師の林田龜太郎が入つて居たから愈々告發が受理されて、検事局の取調が始まるに、既に其前に關係者一同が、各所に密會を遂けて、悉皆口供の打合せが出来たのであるから、愈々免れ難い時には、林田が背負ひ込んでしまへば、大浦が助かる云ふ目算は立つて、訊問を受けることになつた。従つて検事が着手した時は、最早大浦に對する證據は、十分に湮滅されて居たのである。其秘密運動の一例を擧げて見るに、五月の二十八日に築地の花家へ、廣島縣選出代議士の湯淺凡平が行つた時、圖らず

も廊下で出遇つたのが、例の白川であつた。

『オイ白川、何しに來た』

『イヤ、湯淺君、實は下岡の奴に捉まつて、泣付かれて困つて居るのさ、ハッ、ハッ、ハッ』

笑ひながら行つてしまつた。白川の背ろ姿を見送つて、湯淺は苦笑ひをした。其下岡云ふのは、内務次官の下岡忠治のことである。恰度村野が告發して幾日かの後に、白川と下岡が密會して居たのが花家であつた。而かも湯淺に對つた白川が、

『下岡に泣付かれて困つて居る』

と云ふた、此一言は他の問題で無く、無論此事件に就てだといふことは、常識を以つて十分に判斷し得るのである。斯う云ふことがあつた位であるから、其内部には何れ程の打合せがあつたか云ふことは、十分に想像が出来るではないか。取調が進行するに従つて、一萬圓事件は起訴になりさうも無い、證據が十分でない云ふやうな、噂が漏れて來た。そこで村野は私に考へた。

『是程の問題が、唯本人等の口供の打合せがあつただけで、總ての證據が湮滅されるやうなことがあつては、法の威信云ふものも無く、折角に許した悪事も、彼等の爲めに其事實を抹消されることになる、宜し、それなら第一の問題でやつつけやう』

「今度は代理者の名を用ひずして、自分の名を以つて、平沼検事總長へ一片の親展書を送つた。其中に書いてあつたのが、後ちの問題になつた、例の四萬圓事件なのだ。是は彼等に、何等の打合せも無く、従つて十分に油断して居た、其内容の醜怪な事實を、一々證據を擧げてあるから、追の平沼も、餘りに其事實の醜惡のに驚いたけれど、免に角、人格ある村野が、親展書として書送つて來た位では、必らず事實の一部はあるに違ひないと思つて、そこで愈々檢擧に着手したのである。所が此方は、告發して表面に騒がなかつたから、彼等に罪跡を隠蔽する暇も無く、全く不意打ちを喰つたのだ。仲間の口供は齟齬する、證據は着々擧つて來る、ミ言つた調子で、終に那ア云ふ大きい事件になつてしまつたのである。世間に知られて居るのは一萬圓事件だけの事であるが、實は四萬圓事件の方も、村野が許いたのだ。國の體面の上から考へれば、餘り感心したこゝでは無いけれども、村野のやうな正直な男があつて、之を許いて呉れなかつたならば、あゝ云ふ悪い事をする代議士が、何時までも議會に跋扈つて居るこゝになるのだ。僕は私かに村野の勞を多しするものである。」

(五)

借て話は前に戻つて、愈々大浦も難かしいこゝになつて來た。サア左様なつては、追に頑迷

な大浦も、椅子に嚙り付いて居るこゝは出来ない。或る日の閣議に於いて、大浦は、「何んも相濟まぬこゝだが、自分は愈々法廷の取調を受ける身分になつたから、此上は職に安んじて居るこゝは出来ぬ、従つて内閣全體に累を及ぼすこゝを恐れて、今日限り内相の職を辭したいと思ふから、然る可く陛下へお取次を願ひたい」と言つて出た。一座は白けて暫くは寂しして居たが、八代は稍々顔色を變へて、大浦に對ひ、「こりや怪しからぬ、左様するこゝ、君は議員買収を行つたのですか？」大浦は黙つて居る。八代は猶ほも重ねて、「君が少しも内に疚しいこゝが無ければ、縦令豫審判事の取調を受けやうとも、又法廷に立たうとも、正々堂々争つて、其事實の無いこゝを證明したら何うですか、然るに今に至つて、自分が之を行つて居るが如き口吻を漏し、刺へ職を辭するこゝ云ふに至つては驚かざるを得ない。過日の閣議に於て、我輩があれ迄に尋ねた時分に、君は斷じて無いこゝ云ふとを答へられたではないか、我輩は君の一言を信じて、眞に君は男子らしい人であるこゝ、今日まで思つて居たのぢや、所が今になつて見るこゝ、斷じて行らないこゝ答へたのは全く嘘であつて、實は左様云ふ悪い事をして居たのだ云ふこゝになる、君は之れまでにして閣僚たる吾々を欺くこゝは何等であるか？」

遺に軍人の八代は、言葉も正しく筋を立て、大浦に迫つて行く、周囲の大臣も、殆んど耳を掩はんばかりの有様であつた。

「何れも大浦は、明確なる答は爲し得ずして、タツタ一言、何れも相済まぬ事でありました」

「言つただけであるから、最早此以上は八代も、大浦を追及する氣は無かつたが、其次に大隈の方へ向き直つて、

「首相は此間のお答に、矢張り大浦君と同じやうな事を言はれて、左様云ふこゝがある可き筈はない、言はれたが、今現に此通り、大浦君が罪に服して居るのである、して見るこゝ、貴方の言はれたこゝも間違つて居つたのだが、議會に於いて聲明した言に對しても、甚だ責任は重いと思ふが、今後何うなさるお考か」

何事にも強辯して容易に下らぬ大隈も、此八代の眞つ向から斬込んで来た一刀は、受けるこゝが出来なかつた。眼をグリ／＼させて手を振りながら、

「それは甚だ怪しからぬこゝであるが、何うも、大浦君が左様云はれる以上は、左様であるのである」

何んだか譯の解らぬ事を云つて、愚圖々々して居る。其間に他の大臣も、頻りに仲裁する者である」

があつて、此掛合は一時止んだが、大隈は直ぐに大浦の辭表を齎して、御前に出るこゝになつた。此際に他の大臣の間に、連帶して責任を負ふか何うか、云ふ議論が起るこゝ、八代は、

「我輩は軍人であつて、憲法の正條位は心得て居るが、憲法學者のやうな議論は出来ないのであるから、果して此責任が、内閣全體の責任であるか何うか云ふこゝは、議論して主張するこゝは出来ぬけれど、何うも自分の心持ちでは、此重大な罪を犯した大浦君に連座して職を辭す可きものだと思つて居る、此考は何處までも、我輩は遂行しなければ、國民に相済まぬのであるから、是だけは念の爲めに斷つて置く」

それに續いて加藤も若槻も、同様な説を述べた。獨り茲に不思議なるは、平常から大臣の責任を、非常に重く觀て居る尾崎が、

「大浦君が爲したこゝは、自分等は相談に與からぬ事であるから、従つて其責任は、大浦君が單獨で負ふ可きものであつて、自分等は何等の責任も有つて居らぬのである、従つて連帶して辭職する必要は無い」

云ふ説を唱へ出した。初期の議會以來、尾崎が議會の演壇に於いて述べた、速記録を悉く蒐めて来て、此日の無責任論を對照して見たら、何の位面白い事であらうと思ふが、尾崎本人の斯う云ふこゝを云つて居たのだ。そこで此議論は後に決するこゝして、大隈は御前へ罷り出たの

である。

聽て大隈が退出つて来るに、一同を列べて置いて、

「御前へ罷り出た所が、大浦君の辭職に對しては、先帝以來の重臣であつて、國家に對する功勞も多し、今此位の過失の爲めに職を辭するまでの事はなからう、云ふ意味の御沙汰が下つて、又我輩が董督不行届の理由を以つて、辭任を申出たに對しては、有り難き御沙汰があつて、尙ほ留任して國家の政務に執掌せよ、云ふお言葉であつたから、最早斯く相成る以上は、社會の攻撃が何うあらうとも、上御一人の御信任に對して、我輩は自己の毀譽褒貶を顧るに暇は無いのであるんである」

之を聽いた加藤は、怫然として立ち上るに、

「大隈首相は左様仰しやるが、我輩は一身の毀譽褒貶は、斯かる場合に一層顧みますから、従つて辭職の外は無い、云ふ決心致しました」

「答へた。追に加藤は偉い、彼の人は何となく人に悦ばれないけれども、若し彼の人から傲慢臭い所、自我の念の強い所を去つたならば、無論第一流の政治家であるに違ひない。此日に大隈が、

「一身の毀譽褒貶を顧みぬ」

云つたのに對して、

「我輩は斯う云ふ場合には、一身の毀譽褒貶を顧みろ」
云つてのけた所に、何と無く面白味があるではないか。

(六)

終に大隈内閣は留任を定まつて、加藤、若槻、八代の三人は、職を退くことになつた。其時に大浦が、大隈から、陛下の御沙汰を傳へられるに、衣囊から手布を出して、之を額に當て、卓上に打俯した儘、鼻汁を唾液と一緒に出して、

「此陛下の有り難き思召しに對しては、最早死すとも憾む所は無い、我輩は今日より政治上の生活は止めます、閣僚諸君に對して種々御配慮を懸けて、寔に相濟まない」

云ひ終り、悄然として涙を抑へて出て行く、其背姿を見た時には、痲痺を起して居た八代も、追に氣の毒になつて再び之を喚び留めて、詰責する勇氣が抜けたと云ふことである、當時の内閣には斯う云ふ悲劇もあつて、終に大隈は秋の御大典を當て込んで、留任することになつたのである。

議員買収の事は、非常に大きくなつて、多くの代議士が入獄したけれども、大浦は起訴を猶

豫されて罪を免れた。此一事は人心の上に、甚だ不良なる結果を與へたことは、掩ふ可からざる事實である。大浦に悔悟の念があつたか無かつたかは、以上述べた事實談に照しても分る若し裁判所が大浦を追及しなかつたならば、彼は恬然として、猶ほ榮職に留まつて居たのであらうか、愈々罪が明かになつて來たから、是では堪らぬと、大臣の椅子を擲つたが、尙ほ爵位にはへバリ付いて居る。刑事上の罪を受く可き大浦の子供は、子爵として皇室の藩屏の一人となつて居るといふが如き、奇怪な現象を呈するに至つては、國民たる者は何んな感じを起すであらうか、識者を俟たずして分るべきである。然るに尾崎司法大臣は、盛んに刑事政策を云々して、大浦の起訴猶豫は當然である、と言ふて居る。司法大臣の口から斯う云ふ言を聞くに至つては、實に驚くの外はない。有名な倫理學者の中島徳藏が、

「斯う云ふ事をされるやうでは、學校で倫理學を教へても、何の効能も無い」

と言つて痛嘆したのは、道理なきことであると思ふ。兎に角、村野があの人格を以つて、大限の暴言に對して、癩癩を起した爲めに、此事件を惹起したものとしたり、村野に對つて、大に感謝しなければならぬのである。

贈位されたる韓國の志士金玉均

(一)

新帝即位の大典に際して、韓國の志士金玉均が、贈位の御沙汰を受けたことは、既に一般の人の知る所であるが、何故に日本に併合された以前の韓國の志士が、贈位の御沙汰を受けたかといふことは、十分に其意味を知つて居る人は少ないのである。そこで僕は、一般的によく分るやうに、金玉均の事蹟を述べて見たいと思つて此題を掲げた譯である。

明治元年以來、朝鮮政府と我政府の間が、常に圓滿な交渉を遂げるこゝが出来ずに、大小の問題何といふことなく、總て衝突して日を送つて居た。其紛擾が起つて、國際談判が始まるに何時も我政府が失敗を遂げて、各國の物笑ひになつて居たのである。何ういふ譯で對韓外交が常に失敗に終つたかといふに、第一に我政府の對韓策が、何時も曖昧であつて、是といふ秩序立つた取極めがないから、何時も失敗に終るやうになつて居たのだ。それにもう一つは、支那政府に對して何事も遠慮勝に處理して行くことが、何時でも朝鮮に對する、外交上に累をして居たのだ、又朝鮮政府は支那政府の指揮を受けて、殆ど支那の屬國なるが如き觀があつて、日本政府と面倒な交渉が起れば、必らず支那政府の力を藉りて、對抗するやうになつて居たのだ。

であるから、支那政府はそれを宜いことにして、日本政府に何時も威壓を加へて、其對韓政策を根柢から打壞して了ふ爲に、我外交は常に失敗にのみ終つたのである。支那でも朝鮮でも、強い者には従ふべきもので、勢力のある所には阿附すべきものだといふことを、唯一の信條として居たのが、支那朝鮮の國民の一般の人情であつた。尤も此事大主義は、常に支那朝鮮ばかりでなく、日本人の間にも大分感染して來て、今では政府の味方をすれば何事にも便宜を得るまいつたやうなことが、何時か一般の人の骨までも腐らせてしまつて、何時の時代にも政府黨が全盛を極めるまいふのが、即ち日本人の間に事大主義の行はれて居る、確實な證據も見られる。此弊は朝鮮人に於て、殊に甚しかつたのである。されば長い間、支那政府の威壓に甘んじて、其屬國扱ひを喜んで居たまいふ風があつたのであるから、我政府が何かの問題に付て交渉する場合には、當の對手の朝鮮政府は暫く措いて、先づ以て支那政府と争はなければならぬ、といふ習慣になつて居たのだ。其場合に我政府の大臣は、皆支那の勢力を恐れて、何時も失敗に終るやうになつて居たのだから、今より考へて見ても、實に憤慨の至りに堪へないのである。

金玉均は朝鮮國の有様に憤慨して、早く支那政府の羈絆から脱して、朝鮮を純然たる獨立王國にしたい、といふ希望を以て、密に味方も集めれば、自分の議論も鼓吹して居たのだ。乍併

是は容易な業でないといふことも、よく呑込めて居たから、此事を成し遂げるには、日本黨の應援を求めなければならぬ、若し出來得るならば、日本政府に公然援けて貰はなければ、自分の目的を遂げることは出來ぬといふ考を有つて居て、密に支那黨に反抗して居たのである。表面に於ては獨立黨を稱へて居たけれど、其實は日本黨もいふべき主張の下に、金玉均は活動の舞臺を求めて居たのだ。

金玉均は相當の學問もあり、又智識も膽力もあつた人であるから、此目的は十分に成し遂げる覺悟ではあるが、朝鮮の習慣として門地門閥の高い者を、首領に擔ぎ上げなければ、何うしても味方に有力な人を引付けることは出來ない、そこで皇族の一人たる朴泳孝を説いて、遂に首領に仰ぐことにした。引續いて、洪英植、徐光範、徐載弼等の人物が味方に加つて、獨立黨の勢力は存外に強くなつて來た。折柄、明治十五年の京城の變亂が起つて、是が爲に朴泳孝は國王の李熙に代つて、謝罪使として日本へ渡つて來ることになつた。其時に金玉均も亦隨行して日本へ來たのであるが、日本人との關係は此時に付いたのである。

十五年の京城の變亂は、何ういふ性質のものであつたかといふことも、一應は説いて置かなければならぬ。是は支那政府と日本政府の権力の争が、遂に大騒動の原因となつて、支那人が巧に朝鮮人を煽動して我公使館に燒討を仕掛けたり、或は駐在軍の兵舎を襲ふたりして、公使

の花房義質等が、命からくんで日本へ逃げて歸つた。軍人の中にも大分酷い目に遭つた者があり、又一般の日本人の中には、非常な凌辱を受けた者も多くあつた。此頃死んだ袁世凱は、此時に朝鮮へやつて来て、一種の高等破落戸で日を送つて居たのだ。然るに此事件に付て乗込んできた、馬建忠といふ偉い人物があつて、此人に見出されて國際探偵を勤めたのが、非常に成功して、能く袁の探偵振が急所に當つたといふ所から、馬建忠の信する所になつて、此事變が治つた後にも、尙朝鮮駐在の役人として長く居居ることになつた。それは總て袁の支那政府に於ける、政治家としての立場が出来た原因である。兎に角、公使館が燒討をされたり、軍人が慘殺されたりしたのでから、如何に軟弱な外國方針であらうとも、豈夫に無言の中に、之を見過すことは出来ない、我政府も支那朝鮮の兩政府に向つて、談判を開いた結果、曲りなりに解決が付いて、謝罪の使節として朴泳孝が、我國へ來朝するやうになつた。是は十五年の變亂の大要であるが、其時に金玉均は深く考へて、將來は日本人と結託をして、朝鮮の改革を計らうといふ決心をしたのであつた。

何事にも鋭敏な金玉均は、疾くも日本國と關係を結ぶべく、その準備の第一策として、翌十六年には留學生十六人を率ゐて、日本へやつて來た。此留學生は戸山の陸軍學校へ這入つて、それから後ちに來た留學生は、慶應義塾に這入つたのもあるし、其他の學校に這入つて盛に新

式の教育を受け、總て其連中は日本黨として、朝鮮へ歸つてから活躍をしたのである。此際に金玉均は、國王の委任状を持つて來て、國政の改革をするに付て必要な、三百萬兩の借入を我政府へ頼込んだ、然るに此時の公使であつた。竹添進一郎と金玉均が、非常に感情が悪く、恰で犬と猿のやうに、顔さへ見れば睨合つて居た。金玉均が國王の委任状を携へて、大金を借入る爲に日本へ渡つたに聞くと、竹添は直に電報を以て我政府に「金玉均の携へて行つた委任状は、贋物である、決して國王が渡したものでないから、それを信じてはならぬ」といふ意味の事を通じて來た。是が爲に金玉均が何れ程働いても、借金のごきは遂に行届かず、結局は十五六萬兩の端金を、正金銀行から借受けて、辛うじて歸國するといふやうな甚しい失敗に陥つたのは、全く竹添公使の私心を挟んだ故障が効を奏したのであつて、金玉均には氣の毒な次第である。

(三)

是より前、後藤象次郎は明治六年に政府を退いて、閑散に日を送つて居たが、何時までも浪人で、唯空しくして居るごきの出來ないのは、後藤の性質からいふても當然なごきで、後藤は何れかに、其鬱勃の氣を吐く場所を求めて居たのだ。然るに近年になつて、頻に朝鮮に問題が

湧いて来て、其度毎に我政府の外交が失敗を遂げて、何時も世界の物笑ひになつて居るのは、如何にも残念な次第であつて、自分が明治六年に辭職したのも、又征韓論の爲であつたから、旁々以後藤としては、朝鮮の問題に付ては大に趣味を有つて居たのだ。けれども、唯日本から朝鮮の空を眺めて、徒に遠吠をして居た所で、詮のないことであるから、自分は自から朝鮮へ渡つて、大に奮闘して見やう、といふ覺悟を有つて居たので、之を密に福澤諭吉に漏した。後藤程の人物、而も英雄の素質を備へた、豪放にして多智な後藤が、鶏林八道を自分の活動場所として乗り込むといふ、此決心には福澤も動かされて、進んで相談に與つたのである、其前から福澤も、亦朝鮮の問題に付ては、常に憤慨して居たのであるから、朴泳孝に隨いて金玉均が來た時分にも、福澤は自ら、進んで金に面會して、朝鮮將來の計畫に付ては、大に相談に與つて居たのだ。斯ういふ事情で後藤の朝鮮行は、福澤に於ても頗る賛成を表して、大に相談對手になつた次第である。けれども、後藤が愈々朝鮮へ乗込んで、支那黨を排斥して朝鮮を日本の勢力圏内に引入れて、大活動をなさうとするには、何うしても政府の有力者と結ぶ必要がある。自分の計畫が進んだ結果、或は支那と戦端を開くやうになるかも知れないのであるから、政府の有力者を味方にして置かなければ、中途に挫折することになるのである故、其點に付ては後藤も、非常に苦心して、それから伊藤博文に此意を通じて、其同意を求めたのである。然

るに伊藤は、又朝鮮の問題が年々起つて來ては、何時も日本政府が損害を負つて、外交は失敗に終つて居ることを、密に嘆いて居たのであるから、後藤の朝鮮行に付ては頗る同意を表して大に激勵をした位であつた。尤も此事は、後に井上馨に漏れた爲に、井上が非常に怒つて、伊藤が獨斷で後藤に答へたことを面責した。其結果として伊藤は、無關係なるが如き態度を裝うて、一悶着を惹起したれども、最初は伊藤も、後藤の相談に乗つて居たには違ひないのである。此時分に、例の井上角五郎が、慶應義塾を卒業して、尙福澤の世話になつて居た。井上は洵に明敏な頭腦を有つて居て、數字のことに明るく、大きい智慧はないにしても、臨機應變の奇才に富んで居て、辯舌も亦亦に優れて居たので、福澤も存外に井上に向つては、信用をして居たのである。今から思つても、此人がもう少し誠意のある人で、眞面目に國家の事に關係したならば、或は尙我政界の一勢力になつたかも知れないが、何分にも軽い調子で、利害を見ることに敏く、愈々いふ土壇場まで坐つて、思ひ切つた仕事をするといふ風に乏しく、大概なことは利害から打算して、大義名分を輕んじた爲に、多くの人には極めて輕薄なる小才子の如く見られてしまつて、あれだけの實力を有つて居る人であり乍ら、其割合に世間の同情もなく、本人が眞面目になればなる程馬鹿にされて、頭ごなしに「ア、井の角か」といつて、一笑に附せられてしまふやうになつたのは、如何にも惜むべき次第である。

ツイ昨年の選挙にも、自分の實兄が或人から澤山の負債をして居て、年々の利息は兄の爲だ
 さいふので井上が支出して居た上に、此選挙の競争が始まるに、債権者から『お前の兄の負債
 を、全部支拂つて呉れなければ、お前の選挙の爲にならぬのみならず、盡力はせぬぞ』とい
 て来たので、井上は據所なく、兄の負債を全部償還した。然るに此事が問題となつて、遂に井
 上は折角當選したには拘らず、選挙法違反となつて嚴罰を蒙るゝことになつたのだ。若し是が
 井上でなかつたならば、或は裁判官の同情を得て、兄の爲に負債を返したのであるから、多少
 其間に選挙との關係があるといふことを認められても、無罪になつたかも知れないが、何しろ
 被告人が井上であるといふので、新聞も同情せず、世間の人も氣の毒だといふやうな感を有た
 ずに、常に冷笑の中に葬られて居たから、裁判の結果もあといふことになつてしまつたのだ。
 是は其人の徳不徳に關することであつて、議論を以て律することは出来ない。
 福澤が密に考へたのは、後藤をして朝鮮に大雄飛を試みさせるにしても、先づ以て其仕組を
 する者が必要である。それには先づ乗込んで、準備をさせる必要があるのだが、其役は誰にし
 たものか、密に見渡す所、井上が一番に適役であるを見て、福澤が或日井上を呼んで、此内
 談をした結果、遂に井上は朝鮮に渡つて、後藤と福澤の意見を行ふべき、基礎を造る爲に、活
 動を始める事になつた、此時に起したのが漢城旬報といふ新聞で、井上が社長兼主筆となつて

盛に支那排斥の空氣を造り掛けた。之には支那黨の連中も面喰つたものか、盛に袁世凱の力を
 以て、漢城旬報を押潰さうとしたけれど、容易に其事の行ひ難きを見て、今度は日本政府に向
 つて『漢城旬報の爲に、日支間の感情が段々悪くなるから、寧ろあといふものは廢めた方が宜
 からう』といふ意見の説法を始めた。是は存外に効驗があつて、井上外務卿が此説に同意して
 漢城旬報を押へ付けるやうにしたから、井上は非常に窮地に陥つて、一時は新聞を休止して、
 日本へ歸つて来るやうな悲境に陥つた、乍併、福澤と後藤の心配に依つて、多少の資金も出來
 て、再び朝鮮へ渡り、此新聞は繼續することには出來たけれど、一旦挫折して、後藤の最初の計
 畫の如く、大きい目的を遂げることは出來なくなつたのは、自然の成行で止むを得ないが、流
 石に多智多能の井上も、豫め考へた活動の半も出來なかつたのである。

(三)

彼是する中に、形勢は色々に變化して行く、従つて日本政府の方針も、時に移動して行くの
 は固よりのことで、初めは金玉均と頗る感情の面白くなかつた、公使館の役人連中が、明治十
 七年の夏頃から、大分調子が變つて来て、金玉均を歓迎するやうになつた。尤も竹添公使が日
 本に歸つて居た留守中は、島村といふ書記官が、何事も切つて廻して居たのだが、何うせ政府

からの命令で、あつたらう、島村は頗る金玉均に接近して、色々其後援をして居たのだ。然るに十一月になつてから、竹添が再び朝鮮へ乗込んで来て、今までの態度はガリリと變つて、獨立黨の爲に頗る好意を表するやうになつた。従つて金玉均も、幾度か公使館へ招かれて激勵されるこいふやうな次第で、今までは金の一派は、公使館でも成べく敬遠して居たのが、却て敬意を以て迎へるやうになつて来た。今までに極く仲の悪かつた竹添が、斯様な調子になつたから、心の中は金も頗る疑を懐いて、竹添の仕向は喜ばなかつたが、段々交際して居る中に、其態度の變つたのは、本國政府の方針が一變して来た結果だこいふ、豫測も付いたので、金も幾分か安心して、竹添と對談するやうになつた。それが聽て獨立黨の一大飛躍をなすべき原因になつたのであるが、兎に角、竹添と金玉均の間の交情が深くなつたこいふことは、頗る面白い事蹟の一つとして見るべきことである。

此時代が、袁世凱の最も活躍した時で、袁の將來の位地は、此際に全く築かれたのであるが、朝鮮政府唯一の勢力家たる、閔泳翊と深く交つて、何事も袁の頭腦から出た策略に依つて、閔は日本政府に對抗して居たのである。國王の李熙は、唯好人物こいふだけのことで、是こいふ取止めた考を有つて居る人でもなく、又朝鮮國を背負つて立つこいふやうな、氣概のあつた人でもない。其代り王妃の閔氏は、極めて慧敏な上に度胸もあつて、萬事は國王に代つて、朝鮮

國の政治は内外の別なく、閔氏の意に仍つて決せられてゐた位だ。袁は巧に此閔氏に取入つて宮中の權力を握つて居たから、そこで表面は、閔泳翊が働いて居ても、内部には袁の勢力が非常に擴張されて、居たのである。凡そ朝鮮國に於て、政治上の或大事をなさんとする者は、必ず王妃に取入らなければならなかつたのである。袁は其呼吸をよく知つて居て、王妃の相談對手になつて居た爲に、大概なこいふは袁世凱の一言に依つて、決せられるの有様であつて。従つて袁は、朝鮮政府の總理大臣もいふべき立場に居たのである。朝鮮國の獨立を策して、支那政府の羈絆から脱せしめやうとする獨立黨の人々は、何うしても日本政府の、力に依つて、對抗するの外に途はなかつた。今までは日本政府が、常に曖昧な態度に出て、愈々こいふ土壇場になるに、支那政府に屈從して居た。其臍甲斐ない有様を見て居たので、容易に日本政府の方針に、信頼しなかつたけれど、此頃の竹添の調子を見れば、日本政府の覺悟も相當に強くなつたこいふこいふが見られたから、茲に於て金玉均は、頗る竹添に近付いて、様々の策を講ずるやうになつた。竹添と親しくなつて行く程、井上角五郎との關係も深くなつて行くのは當然であつて、段々相談の結果、何うしても非常手段に依つて、一舉に事を成し遂げなければ、到底難かしいこいふこいふに歸着したのだ。明治十七年の十二月四日に、京城の郵便局が落成して、其開始式を行ふこいふ日取りになつて、其晩の會合に、多くの政府の大官や貴族が集つて来る。

此機會に於て、一大奮闘をしようといふ覺悟を定めた。

(四)

日本政府の方針が一變して、自分等の爲には最も有利になつて、竹添公使の態度も、既に獨立黨を助けることに決した以上は、金玉均等の身にして考へれば、日本政府の外交方針が、今までに幾度か動搖して、更に信用が置けなかつたのが、今度は漸く獨立黨に有利の方針に傾いて來た。それが何時まで同じ調子で進んで行くか、深く考へて見れば多少の疑惑を生ずる、茲に於て、事を急ぐ必要はあつたのだ。十二月四日の京城郵便局の開始式には、朝鮮政府の大官が多く集つて來る、此機會に於て一舉に、事を成し遂げやうとの計畫を運んだ。金玉均は無論、それ等の人と同席するのであるから、もう事を始めても宜いといふ、場合を見計つて、外部に居る同志に通ずるに、直に事を起すことに相談を濟ませて、是から其準備に掛かつた。

郵便局の裏手に小さい家屋があつて、今は住んで居る人のないのを幸に、此家屋の床下に、爆發藥を装置して、金玉均が内部から合圖をした時に、直に爆發させると同時に、其物音に驚いて、宴會の席に居た大官が戸外へ驅出して來るに違ひない、それを待受けて居る者が、片端から斬倒すことになつて、その斬倒す役目は、何れも井上が率ゐて居る、日本人の受持になつ

て居たのだ。然るに愈々宴會が始つて、爆發藥に火を點じたのだけれど、何ういふ譯か、好い工合に破裂しなかつた。爆發藥や爆發彈の破裂しないのは、洵に間の抜けたもので、ツイ此頃も爆發彈の破裂しないのがあつて、今裁判になつて居るが、斯ういふ種類のもものは、轟然たる音響と共に、其附近にあるものを破壊してしまふから、其効力も認められて、人々にも恐れられるのだが、破裂もせず音もしないとなつた日には、石塊を投げる程の値打もないものだ。今更に爆發藥が破裂をしないからといつて、他に方法はないから、據所なく石油を注いで、火を點けるといふやうな譯で、洵に事は半間になつてしまつた。併し、一時にバツミ燃上がつた火が、郵便局の硝子窓に映つたから、破裂の音はしないけれど、金玉均は外部の準備が整ふたこと見たから、そこで火事だといふ大聲揚げて、椅子を離れた。集つて居た大官の中の閔泳翊といふ、第一番に勢力のある男が、先づ以て戸外へ驅出した。それに續いて一同が、ワイ／＼押合ひ乍ら驅出さうとする。豫て待構へて居た暗殺團の二三者は疾くも閔泳翊の姿を見たから躍り掛つて斬付けた。所が、石段を降切つた時に斬ることになつて居たのだから、何しろ幾分の狼狽もあつたらうし、今まで仇敵のやうにして憎んで居た閔泳翊の顔を見たので、流石に氣の壯んな者は、落付いて居るこゝが出来ない。石段をまだ降り切らない中に斬掛けたから、刀が届かず十分の深傷を負はずこゝが出来なかつたので、閔泳翊は人殺し／＼と叫び乍ら、局の中に驅

込んだ。積雪を打つやうにして、戸外へ出やうとした連中は、此有様を見て驚いて引返へす、暗殺の計畫は是で全然敗れてしまった。隣の家に放けた火も、そのうちに熄んでしまったから恰で子供の喧嘩のやうであつた。

金三朴は、疾くも事の十分に成らぬことを知つたが、今更騎虎の勢で、手を束ねて見て居ることは出来ぬ、流石に機智に富んで、膽略のある金は、朴泳孝を誘ふやうにして、王城へ駈付ける。此時に竹添公使は我駐在軍の兵士を率ゐて、王城へ乗込んで来て、此兵士が王城の四門を固めた。金三朴は、直に國王の居る宮殿に乘込んで、

「唯今、支那の暴民が謀叛を企てまして、閔泳翊以下の大官に害を加へんとして居る所でありますから、何事も日本公使の竹添氏に御相談あつて、此王城の守護は、竹添公使に御頼みなさるやうになされたら宜しうござりませう」

と申上げたので、國王の李熙も首肯して、萬事は朴泳孝に任すことにした。一寸斷つて置くが暗殺團の日本人は、皆髻髪に着いた帽子を被つて、服装も支那人の少しも違はぬやうにしてあつたのだ。事の成否に拘らず、何處までも支那人の暴動の如く装うて、竹添公使は事變が起つたから、王城を救護したのであるといふことに見せ掛けたので、些小刀細工のやうではあつたが、當時の事情から考へれば、此外に遣方はなかつたかも知れない。王城内の混雜は實に

名状すべからざる程の騒動になつて、此混雜に乗じて金玉均は、縦横の手腕を振うて、片端から支那黨の朝鮮人を斃したのである。即ち第一に閔泳稷、趙寧夏、閔臺鈞の三人を斃した。尙進んで、李祖淵、韓奎稷、尹泰駿の三名を斃した。其多くは金玉均が、自から手を下したといふことである。斯ういふ勢でやつ付けたから、僅に一晩の中に、王城内の権力は、獨立黨の握る所になつた。

袁世凱は郵便局に事變が起つて、王城へ日本の兵士が押掛けて行つたことは聴いたが、冷然として更に騒がず、唯事の経過を靜に見て居た。此時の袁の態度は實に堂々たるもので、愈々内外の事情が明に分つたから、そこで方針を決めて、七百人の駐在軍を悉く繰出して、黎明時から王城へ迫らせた。夜の明けるときは流石である。若し此時に竹添公使が軍人出身の人か何かで、斯様な場合の知識もあり、膽力もあつた人なら、ウンミ腰を入れて掛かつたらうし、袁の策にかけるられるやうなこともなかつたかも知れないのだが、何分にも竹添といふ人は、漢學の力こそ日本人としては、多く見るここの出来ない程に深い人だけれど、外交官としては甚だ其知識に乏しく、殊に斯様な擾亂の巷に立つて、大膽な仕事を遣るさいふ向の人でなかつた。支那兵が大舉して押掛けて来て、王城を圍んだ時には、一縮みに縮み上つて、何等の計畫も立てずに、

直に引揚げやうと言ひ出した。ウンミ踏張つて争ふたならば、人数の上に於ては及ばなくとも相當の争にはなつたらうし、又竹添公使が殺されたならば、それこそ日本人が總掛かりになつて、其骨は拾つたであらうが、惜むべし、竹添は遂に其策に出でずして、直に引揚げの準備に掛かつたのは、其處が學者の外交官で、何うも致方がない。

竹添が既に弱腰になつた以上は、今更に如何にもすることが出来ないから、金や朴は頻りに竹添を説いたけれど、其策は容れられなかつた。茲に於て萬一の策として、金玉均は國王を説いて、仁川まで一時落延びて、善後の策を講ずる外はない、といふことを主張したけれど、國王は遂に聽かなかつた。彼是する中に、支那兵の追撃は、段々激しくなつて来て、何うも致方がないから、金玉均は竹添に從ふて、日本公使館へ逃込むことになつた。支那兵は此有様を見るに、直に追かけて来て、盛に公使館の周圍から攻掛かる、これには朝鮮人の手傳もあつて、人数は殆ど目に餘る程の多數になつた。竹添は益々驚いて、左右の者と共に一生懸命に包圍して居た支那兵の一方を打破つて、命からかくに仁川へ引揚げ、それから下關へ渡り、電報を以て此顛末を、政府へ報告したのであつた。

(五)

竹添が逃歸るに共に、金朴の一行も亦隨いて来て、直ぐ東京へ出て伊藤や井上に面會を求め、善後策に付ての相談をするに、伊藤や井上は甚だ冷然たる態度で、金朴等の相談に應じないのみならず、果は兩人が訪ねて行つても、大抵は留守を使つて面會しない。獨り福澤が非常に同情して、金玉均は暫く福澤の邸に起居するやうになつた。日本政府の態度の前後不整であつたことには、今も尙此事件に關係した者は、深い恨を有つて居るやうである。現に此事件に付て最も深い關係を有つて居る井上角五郎が、是も金朴等と同時に歸つて来て、先づ伊藤博文を訪ねて、事の顛末を訴へた。然るに伊藤等は井角に對して、何等の慰藉も與へず、「お前等が餘計なことをしたから、日支間の外交が面倒になつて困る」と恨みがましいことを言つて、最初は自分も亦此計畫に耳を傾けて、實は井角に多少の内意を傳へたことのあるに拘らず、失敗して歸つて来たといふので、斯ういふ冷然たる態度に出でたのは、甚だ怪しからんと思つたから、井角も流石に若い時分で、非常に疝癪を起して、元來が文筆に堪能な男であるから、直に筆を走らせて、此内容を詳細に認めて、天下に告白したのである。其時に何ういふ事情であつたか、末尾に福澤諒吉の名前を載せて置いたことが、伊藤や井上の疝癪に觸つて、井角は遂に